

気高く生きる道を選択します

http://hatagaya-saisei-univ.jp

幡ヶ谷再生大学

HATAGAYA RE-BIRTH UNIVERSITY

Hatasai Magazine Vol.8

特定非営利活動法人　幡ヶ谷再生大学復興再生部　（23生都管特第1204号）

幡ヶ谷再生大学復興再生部とは？

2006年に仲間内のサークルとして始まった幡ヶ谷再生大学
陸上部や格闘部など、あくまで自分達の人間復興として集まって活動していた。
そんな中2011年3月11日に発生した東日本大震災
日本中、世界中に大きな衝撃と悲しい爪跡を残した。
その復興支援を主な目的とし、その他の危機的な災害が起きた際も
支援出来る非営利団体としてこの度新たに復興再生部を開校する。

幡ヶ谷再生大学復興再生部　部長　TOSHI-LOW

VISION（目的）

2011年3月11日に発生した『東日本大震災』
その被害をうけてしまった地域の子供達の未来構築を軸にそれに関わる全ての復興支援を目的とし活動する事。
また、その他予期せぬ危機的事態が発生した際は状況下に応じて対応していく事。

MISSION（使命）

身体的、精神的にも被害をうけてしまった子供達への明るい未来を構築していく事。
単発的なサポートではなく、長期を見越して復興への活動のサポートをしていく事。
幡ヶ谷再生大学の定義に則り、遊び心を忘れずに人間再生と被災地の復興を行っていく事。

CLARITY（明確さ）

当団体の役員は報酬や利益は一切受けず、全てを災害の復興支援に使用する事。
あくまで直接的に行動する事を前提に行動、リサーチし、他団体、自治体とも連携しあって明確なサポートをしていく事。
活動予定、活動結果を随時報告する事。

特定非営利活動法人　幡ヶ谷再生大学復興再生部　（23生都管特第1204号）

幡ヶ谷再生大学 他学部紹介

私たち、幡ヶ谷再生大学では復興再生部以外にも学部を併設しています。
あくまでも自分達以外の人間復興を軸に立ち上げた
サークル活動ですので、基本概念に変わりはありません。
その中で、私達の意思にご賛同頂いた方々と共に
その他サークル活動も共有できたらと思っています。
陸上部、及び農学部に関しては頻繁に募集を行っています。
詳細はそれぞれのWebやTwitterなどをご確認ください。

陸上部

5km走って来い 陸上部

https://twitter.com/rebirth_rikujyo

格闘部

東京木曜会
TOKYO THURSDAY JU-JITSU

山岳部

HATAGAYA WANDERVOGEL

音楽部



農学部



https://twitter.com/nougakubu

読書部



手芸部



二輪部



映像部



けん玉倶楽部

幡ヶ谷再生大学 けん玉倶楽部

主　な　活　動　履　歴

2011	03/17~19	tactics recordsおよび水戸の仲間たちによって北茨城・いわき・高萩へ支援物資の募集と運搬（飲料水は岩手県宮古市へ）
	03/29~04/05	避難所に直接物資を届けている札幌のハードコアバンドSLANG KO氏に託すために子どもたちへのおやつを募集。BRAHMANのメンバーによる岩手県宮古市へ運搬
	05/12~22	「オペレーション米騒動」岩手県・宮城県・福島県への送る支援物資の募集。集まったお米、約10トン
	08/01~13	作戦コード「H2O」福島県南相馬市への支援物資（飲料水・お菓子・米・レトルト食品・保存食品）の募集。集まった飲料水、約25トン。「幡ヶ谷再生大学　南相馬キャンパス」LIVE前に支援物資受け入れ先の南相馬市「きっずくらぶ」へBRAHMANメンバー、スタッフ、茨城県、福島県の仲間により運搬
	11/11	NPO（特定非営利活動）法人 幡ヶ谷再生大学復興再生部（23生都管特第1204号）取得
	12/11~24	作戦コード「SMS」岩手県、宮城県、福島県への支援物資（お餅）の募集。集まったお餅、約7.5トン。茨城県、福島県の仲間によるNBC作戦の募集場所に運搬
2012	03/11	幡ヶ谷再生大学 開校
	04/12~05/11	宮城県石巻市小渕浜（牡鹿半島）にてワカメ収穫作業の生徒募集及び派遣
	04/30・06/10	「首長恐竜の親子３体像展示」イベント（6月17日～7月1日）会場になる宮城県石巻市のみなと荘園庭に残る津波漂流物やガラス片撤去と清掃・整地作業
	05/13	竜巻被害にあった茨城県つくば市北条にて瓦礫撤去作業
	06/17~7/01	宮城県石巻市のみなと荘にて「首長恐竜の親子３体像展示」イベント開催
	09/15~16	東北AIR JAM 2012　幡ヶ谷再生大学 復興再生部 ブース初出展
	09/17~11/04	宮城県石巻市「大街道子供広場作り」。全3回
2013	02/07	幡ヶ谷再生大学 読書部として宮城県石巻市立湊小学校にて全学年、1クラスずつ読み聞かせを実施
	02/25	仙台市立蒲町小学校にて、特別講師として「生きる」ということをテーマに授業を開催。未だ仮設の校舎のなか、元気で真摯な子供たちの姿は再生大メンバーにとって非常に勉強になる講義となる
	04/29	宮城県・小渕浜子供広場作りに着手
	07/07	幡ヶ谷再生大学 読書部として穀町幼稚園、ふたば保育園にて読み聞かせを実施
	08/10~11	幡ヶ谷再生大学 復興再生部　SUMMER SONIC 2013東北復興PROJECT「音遊海岸」にブース出展
	12/05	幡ヶ谷再生大学 読書部として石巻市大原小学校全校生徒に読み聞かせ
2014	01/11	小渕浜子供広場完成(全13回)
	04/29	小渕浜子供広場お披露目会　地元の大原小の児童らによる獅子振りや空手の演武、ミュージシャンの演奏に合わせた地元の住民による歌などを披露

















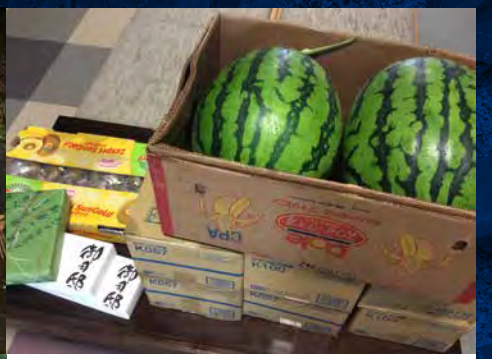




	05/21~06/21	BRAHMAN Tour 1080°幡ヶ谷再生大学復興再生部ブースを全会場に出展
	08/06~2015/07/05	いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会（放射線基礎講座 計2回）1回〜7回
	08/16~17	幡ヶ谷再生大学 復興再生部　SUMMER SONIC 2014東北復興PROJECT「音遊海岸」にブース出展、大阪にも初出展
	12/03	津波被害の大きかった閖上近くの仙台市東四郎丸小学校6年生の授業で「生きる」をテーマに特別講師として参加
2015	03/11	幡ヶ谷再生大学映像記録「鼎の問」DVD発売
	04/04	猪苗代野外音楽堂建設に向けた天神浜清掃
	05/13・14	猪苗代野外音楽堂オープンのための音開き用ソーラーパネル設置作業以降、毎年幡再でお手伝い
	08/09,09/14,10/25	幡ヶ谷再生大学 公開講座開催　第1,2,3回目
	09/15~2017/07/22	東日本豪雨災害・常総市支援活動第1回〜第25回　大雨被害にあった茨城県常総市にて浸水した民家の泥かきや家具の運び出し等のお手伝い、若宮戸・石塚さん宅作業、浸水した米農家さんと蕎麦屋さんの片付け、近隣のお宅の土嚢撤去、お墓の泥出しや掃除、自動車工場やご自宅の泥出しや片付け
	10/03・04	ブルーベリー農家さんの畑とハウス内泥出し、整地、土嚢撤去など
	11/01	Tシャツプリント工場にて浸水したTシャツの片付け、仕分け、洗濯など（Tシャツ再生大作戦の立ち上げ）
	11/07	猪苗代野外音楽堂 音仕舞い ソーラーパネル撤収作業　以降、毎年幡再でお手伝い
2016	02/13~14	沖縄アサイラム（ブース出展、特別公開講座）
	02/15	辺野古、じんぶん学校、高江訪問
	04/20	幡ヶ谷再生大学 復興再生部 熊本入り
	05/01	茨城県常総市災害復興支援イベント「Dappe Rock's」にてブース出展
	05/29	常総若宮戸石塚さん宅作業FINAL
	06/02	BRAHMAN「幡ヶ谷再生大学 熊本キャンパス」@熊本NAVARO
	06/03	幡ヶ谷再生大学 読書部として、りょうさんが熊本県大津町立護川小学校と大津北小学校に読み聞かせ・同日、学長、南阿蘇避難所にて弾き語り
	06/11~	現在も進行中 熊本地震により熊本県・南阿蘇村、嘉島町、熊本市内、大津町、西原村、益城町にて瓦礫撤去、屋根のブルーシート掛け、農地や集落・通学路の草刈り、解体前納屋や倉庫片付け、古民家片付け、神社片付け、自然農の和子さんの茶摘み・草取り・田植え・種まき・稲刈り、のはら農研塾にて農作業、子供たちとお菓子作り、学校キャンプ、子供会、語りべ、などのお手伝い、語りべバスツアー、食にまつわるワークショップ、など仮設住宅への引越し
	07/04・05	片平里菜さん、益城町立飯野小で弾き語り・南阿蘇西小、南阿蘇の避難所で弾き語り
	09/11~2017/04/02	東日本豪雨災害・常総市支援活動第22回~24回
	09/15	ORANGE RANGE東海大熊本キャンパスにてライブ
	11/03・11/12	阿蘇山噴火火山灰被害による果実園での火山灰撤去、果実洗浄作業

	11/05	岩手県・大船渡FREAKS 常総Tシャツ洗濯作業
	11/12	阿蘇山噴火被害による果実園作業
	11/23	宮城県・石巻南境 正月飾り作り
	12/10	幡ヶ谷再生大学 公開講座開催 第4回
	12/24	熊本県・南阿蘇村での熊本地震案内語りべツアー
	12/31~	石井麻木写真展・広島県
2017	01/02-06~12/8-10	石井麻木写真展・広島県、東京都・新宿区、福島空港、宮城県、福岡県、岩手県、大阪府、宮崎県、福島県・喜多方での設営・撤去のお手伝い
	03/19・04/19	大船渡KESEN ROCK FREAKS 常総Tシャツ防音内装作業・木札取り付け作業
	04/19	大船渡 KESEN ROCK FREAKS 本設オープンのための木札作業
	05/02・04・06-07	熊本県・垂玉温泉「山口旅館」片付けのお手伝い
	05/19	福島県・猪苗代野外音楽堂 音開きソーラー設置作業
	07/01	宮城県・小渕浜みかん公園 パネル補強と側溝補修、草取り
	07/07~	現在も進行中 九州北部豪雨・福岡県朝倉市での活動 第1回~93回 九州北部で発生した集中豪雨被害により被災した福岡県朝倉市の比良松地区、黒川地区、上須川地区、山田地区、などで家屋や納屋、倉庫、蔵、庭の泥出し、片付け。稲刈りが円滑に進むよう田んぼの流木や木っ端出し。梨畑と柿畑の泥出し、流木や木っ端の撤去による復旧作業。 柿畑から出た流木を「東北ライブハウス大作戦」木札に→『木札with a mission』開始
	07/08・21・23	福島県・猪苗代野外音楽堂 装飾・設営作業・ソーラー積み込み作業・荷降ろし作業
	07/13・08/13・09/17・10/02	岩手県・岩泉町視察
	07/22	東日本豪雨災害・常総市支援活動第25回 Tシャツ工場FINAL
	08/24	熊本県・大津護川小子供会
	09/10	宮城県・小渕浜みかん公園大運動会
	10/09 ~	現在も進行中　台風第10号災害による岩手県・岩泉町での流木を活用した薪割りお手伝いなど復旧活動 第1回-4回
	11/12	宮城県・小渕浜みかん公園 遊具解体と公園整備
	11/19	小渕浜みかん公園終了
	12/10	熊本県・南阿蘇「食のワークショップ」開催
2018	01/13-14	福岡県朝倉市にて小型車両系建設機械講習会を開催
	02/09	『木札with a mission』BRAHMAN武道館 朝倉木札
	02/17-25	「石井麻木写真展」姫路 設営・物販・撤収お手伝い
	03/11	ASYLUM 2018in Fukushima at いわき 振る舞いご飯作り
	04/15	『木札with a mission』GAMADASE KUMAMOTO 朝倉木札
	04/16	熊本県・南阿蘇での熊本地震語りべ&案内













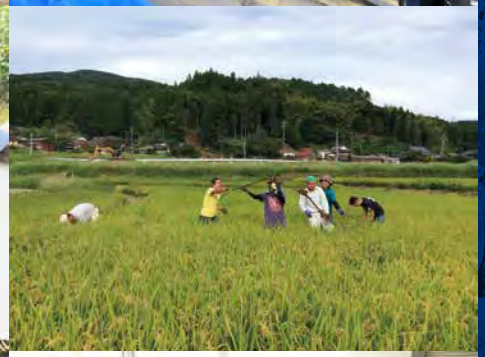














※ 石巻南境、岩泉、いわき、愛媛、大阪、九州、東海、真備など各地で「自主練」として継続中（P.126～）
主な活動履歴を掲載しています。詳しくは幡ヶ谷再生大学webにて詳細がご覧になれます。http://hatagaya-saisei-univ.jp

2019	05/07 ～	『木札with a mission』MONOEYES Mexican Stand Off Tour 小渕木札
	06/03	小渕浜みかん公園閉園式
	07/06 ～	現在でも進行中　「大阪自主練」として始動　大阪府北部地震・大阪府茨木市での活動。平成30年6月に発生した地震により被災した茨木市や大阪市東住吉区を中心に破損した屋根にブルーシートをかける作業、瓦礫の撤去、家屋の補修、リフォームに伴う片付けや掃除などの復旧活動
	07/10 ～	西日本豪雨・岡山県真備町や芳賀での活動 第1回-39回。平成30年7月豪雨により被災した真備町と芳賀にて家屋や納屋、倉庫、蔵、庭の泥出し、片付け、リフォームに伴う片付けや掃除、桃畑の再生などの復旧活動
	07/12 ～	現在でも進行中　「東海自主練」として始動　岐阜県関市上之保地区での活動。平成30年7月豪雨による津保川が氾濫で被災した関市上之保地区にて家屋の泥出し・片付け、水車の修理、お庭の整備などの復旧活動。
	07/12-17	「石井麻木写真展」札幌　設営撤収お手伝い
	07/14-15	『木札with a mission』KESEN ROCK FESTIVAL 朝倉木札
	07/23	沖縄にて平良啓子さんによる対馬丸事件の体験談お話し会(第5回公開講座)
	08/23 ～	現在でも進行中　西日本豪雨・愛媛県吉田町での活動 第1回-13回 平成30年7月豪雨により被災した吉田町玉津で家屋や倉庫の泥出し、片付け。みかんの摘果、収穫、選果。みかん山園地の泥出し、土嚢積み、土嚢作りなどの復旧作業
	09/02	第2回宮城県・小渕浜みかん公園大運動会（石巻市立・大原小学校にて開催）
	09/08-09	『木札with a mission』風とロック芋煮会 小渕木札
	09/09	『木札with a mission』AIRJAM 朝倉・小渕木札
	09/18-25	「石井麻木写真展」盛岡　設営撤収お手伝い
	09/22-23	『木札with a mission』山人音楽祭 朝倉木札
	10/04-10	『木札with a mission』relationship FRANCE tour 小渕木札
	10/06-07	『木札with a mission』気仙沼サンマフェスティバル 朝倉・小渕木札
	11/13-18	「石井麻木写真展 」神戸　設営撤収お手伝い
	11/16-18	『木札with a mission』狼甲子園 朝倉・小渕木札
	02/03-16	「石井麻木写真展」新宿　設営撤収お手伝い
	03/09・03/10・03/17	熊本県南阿蘇・野焼き
	03/11	福島県・富岡町でのスタディーツアー
	04/06	東京にて 第6回公開講座「やんばる高江石原家から見た日本。沖縄のこと」
	04/13	『木札with a mission』テレビズナイト019 朝倉・小渕木札
	04/14	沖縄スタディーツアー
	05/03-06	『木札with a mission』VIVA LA ROCK 朝倉・小渕木札
	05/11-12	『木札with a mission』宮古島ロックフェスティバル 朝倉・小渕木札
	05/31	沖縄にて戦跡基地フィールドワーク
	06/09	愛媛県吉田町第13回　土嚢作り&トーキョータナカさんの東京田中亭 presents BBQ開催

九州北部豪雨支援活動

**2017年7月5日から6日にかけ、
福岡県と大分県は集中豪雨に見舞われ、
甚大な爪痕を残しました。
幡ヶ谷再生大学は、福岡県朝倉市を中心に
被害に遭われた方たちとともに活動を行いました。
災害当時の様子、ともに過ごした日々、
見据える未来について話していただきました。**



「自分ひとりではなにもできない。ひとりでなにかしようかって考えてもできない」

浦塚保子
福岡県出身
／福岡県在住
仕出し屋

福岡県朝倉市で仕出し屋を生業にする浦塚さん。
夫妻で幡ヶ谷再生大学の朝倉での活動を支えてくださいます。
作業開始時には集合場所として、終了後には「食堂」として、
その場を提供してもらいました。
また幡ヶ谷再生大学の活動Tシャツになった「朝倉カラー」は
浦塚さんの存在あってのもの。
2017年の九州北部豪雨から現在まで、
幡ヶ谷再生大学とともに歩んだ日々をふり返っていただきました。

――2017年の災害(平成29年九州北部豪雨)直後の状況を教えてください。

自宅が被災しました。悲惨な状況でしたけど私の兄弟や甥や姪、主人のほうの甥や姪が集まってくれて、泥出しなど片付けをしてくれました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

あの災害が一段落したころですかね。「おばちゃん、なにかやることない？」と矢野くん（P.33）が、訪ねて来てくれました。

ありがたかったですね。私の家もひどい状況でしたけど、家族や親戚たちが手伝いに来てくれていましたので矢野くんたちが来たときは、ある程度片付けは終わっている状況でした。

――写真などを見ると過酷な状況だった印象を受けましたが…。

私の家より隣近所のお宅はもっと悲惨な状況でしたから「そちらを手伝ってあげてください」とお願いしました。近所のお年寄りの方、体の不自由なご家族がいる方、自宅を解体しなければならない方を順にご紹介させていただきました。

近所ではなくても、「うちは大丈夫だから、そっちのほうへお手伝いに行ってあげてください」とお願いしました。

それでも気をつかってもらって、何度も顔を出してくれて…。結局はうちの掃除も手伝ってもらうことになりました。

――そうなんですね。そこで幡ヶ谷再生大学を知ることになったのでしょうか。

そうです。矢野くんたちがユカリさんを連れて来てくれて、いろいろやってもらって、それから店にいろいろ物を預かったりするようになり、現在までずっと付き合うようになりました。

それからですね。黒川地区の友達（この冊子ではお話を伺っていない方もいますが、渕上さんP.20や岩下さんP.18など）をご紹介して、そこをきれいにしてもらって。それから3軒、4軒…と紹介させていただきました。

――矢野さんとはどのようなご関係だったのでしょうか。

矢野くんは近所ですので、子供のころから知っていました。活動によく来る首藤ゆうこ(Hatasai Magazine Vol.7 P.34)ちゃんは、



私の高校の後輩だったり、やっぱり自然となにかのご縁を感じています。

――世代を越えた縁になりますね（笑）その後は「朝倉での活動拠点」にさせていただきありがとうございます。

あの子たちの荷物は、まだ今もお店に置いたままなんですよ（笑）「おばちゃーん」「おじちゃーん」って我が家を訪ねてきてくれる。自動車の鍵を置いて活動に行って、帰りはまた荷物置いていく。その繰り返しですね。

――訪れるたびに美味しいご飯をたくさん用意いただいております。毎回ご飯をご馳走になって、たくさんおしゃべりしておなかも心も満たされて1日の活動を終えることができること、感謝の気持ちでおります。

私たちも感謝の気持ちでいます。やっぱりあのときは、なによりもありがたかったです。心身とも元気になれば、災害は過去のこととして忘れたいですよね…。

だけど、やっぱり…あのとき…私たちは藁にもすがりたい気持ちでいました。みんな同じ気持ちだったと思いますよ。人間、やっぱりその当事者になってみんとわからんもんですよ。

今になったら「あっという間」。でも実際、自分たちの家に水が入ってきたり、土砂が流れ込んできたあのときのあの心境は、当事者になってみんとわからんものです。

今でもみなさまには「ありがたい」気持ちがあります。その当時を思い出すと励みになっています。

――印象に残っている思い出があればお聞かせください。

心が沈んでいるときに、若い人たちが暑い日でも寒い日でも懸命にがんばってくれている姿は心に残っていますよ。

人間は知らず知らずのうちに、そういう姿を思い出して「自分もがんばろう」って心境になっていくんじゃないか、と私は思っています。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

それはないですよ。人間、なにかをしてもらえれば、それなりの喜びとか…感謝の気持ちを持つものじゃないのかな。普通のときだったらわからんよ？でも人になにかをしてもらったら助かるし、うれしいことばかりじゃないですか！

“幡ヶ谷”のみんなの顔を見るだけでうれしいし、会ったときは抱き合う、帰るときには見送る、いつもそういう気持ちでいますよ。これまで携わった場所のみなさんもきっとそうだと思います。

来てもらったところは絶対に忘れられないものです。「思い出」はうれしいことのほうが強く残りますよね？普通の状況ならすぐ忘れてしまうけど、恐怖やうれしさ…そういう感情はすぐに忘れるものじゃないと思います。私は現在でも水の音を聞くと恐怖で胸がドキドキする。水の音が大きくなると胸が「キュッ」となります。うれしさはその逆です。たとえうれしいことがなくても、“幡ヶ谷”のみんなに会えば自然にうれしい気持ちなるんです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

全然知らない人たちが一人ひとり集まって活動しているから、本当に不思議です。「大したもんやな」って。いったいどういう“技”なのか、知りたくなります（笑）

見ると、ユカリさんがしっかり気を配りますもんね。あの人の言うことはみんなちゃんと聞くから「大したもん持っちょるなー」と思っています。特別、喋るわけでもなく、やかましく言うわけでもなく、みんなが一丸となってやるから「大したもんやな」と思います。私たちが住む区の区長さん（P.24）と「幡ヶ谷の方たちにだいぶ助けてもらったし、応援もしてもらった」って話になるんです。うちに貼ってあるみなさんの写真を見て、「あぁいい写真やぁ…思い出すなぁ…」って微笑んでいましたよ。

私の店に来る人たちはみんな、“幡ヶ谷”の皆さんの写真を見るたびに笑顔になっています。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

天災はあってもらっちゃ困るけど、こういう“幡ヶ谷”の人たちがいるからみんなが救われていくんじゃないやろかって、私は思います。ボランティアさんは、大したもんですよ。決して綺麗な仕事でない汚いような仕事を、気候に関係なく頑張ってやってくれるわけですから。しかも朝早くから遅くまで。遠くから来られる方には特に頭が下がります。

“幡ヶ谷”の皆さんが帰るときには、主人も協力してもらって皆さんにいろいろ召し上がっていただいています。やっぱり私ひとりだけじゃできんですもん。家族の力がないとできん。協力したいと思っても、家族が反対すればできないものですから。みなさんもきっとそうではないでしょうか。

――読者に一言あればお願いします。

「自分ひとりではなにもできない」、「ひとりでなにかしようかって考えてもできない」ようなことも、“幡ヶ谷”のみなさんはやってくれました。その思い出は、私たちにとって力強い励みになっています。

「人間性が『ものすごく良い』と感じました…来る人は皆、気持ちが良いんですよ」

宮地伸行
福岡県出身
／福岡県在住
無職

福岡県朝倉市で鉄工所を営み、代替わりした後に被災した宮地さん。
幡ヶ谷再生大学との触れ合いで感じた心情、
宮地さんが考える「日本人のあり方」、
今後の日本を担う若人たちへの提言も話していただきました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

なんとなくですね…。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

なんとなく…。漠然としたもんですよ。

――どのような活動をされましたか。

ボランティアらしいことはしてないですよ。私自身、仕事に追われて貧乏ですからね（笑）当時は何もやる気が起こらなかったですよ。仕事が忙しくてそれどころじゃなかったばってんね。

――お仕事をされていらっしゃるんですか？（笑）

はい（笑）昔から近所で鉄工所をずっとしようとですよ。私はもう84歳でして、事業を息子に譲ったもんでしたから、そっちが心配でしたね。

――それでも幡ヶ谷再生大学の活動に何度か来られていますね。どういった心境だったのでしょうか。

ユンボ（重機）があっても誰も運転できんけん、行っただけだよ。自宅の泥出しを“幡ヶ谷”の人たちに来てもらったけん、その御礼ですよ。人間そういうもんやと思う。

――活動を通してとくに嬉しかった想いがあればお聞かせください。

自宅の泥出しに来てもらった時点で私は感動していました。あの豪雨災害に遭ってから、幡ヶ谷再生大学さん以外のボランティアの方々にも来てもらったんですよ。

若い人たちが汗水たらしていろいろやってもらって、感激も、感動もたくさんしました。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

ありませんよ。家の中の掃除、荷物の運び出しなどいろいろ「何かできることあるかな」と思っていましたけど、皆すすんでやってくれるもんだから、やることがなくなっちゃいましたよ（笑）

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

人間性が「ものすごく良い」と感じましたね。人間性がものすごくですね。来る人は皆、気持ちが良いんですよ。

それにありがたい気持ちがいっぱいです。うちの場合は水が入ってきて、家の中が泥水でいっぱいでしたから、来てもらっただけで感謝感激ですよ。皆、一生懸命仕事していただきましたから…。

それに若い人も多かったでしょう？ 20歳前後の女の子もひたむきに汗びっしょりになって、泥まみれに泥水でぐしょぐしょになりながらやってもらい、感謝感謝という気持ちですね。



――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

やはり昔からの良心というか…。元来、日本人は気持ちのどこかに美徳があると私は考えています。その気持ちを継いでいってもらうのが本当のボランティアの活動の意味だと思います。

水害自体が初めてだったもんですから、他所のことは新聞やテレビで見ていましたけども、やっぱりわが身にふりかかってわかることはたくさんありました。

ふり返ると感無量な気持ちがいっぱいありますよ。

――読者に一言あればお願いします。

とにかく日本人の、昔のおじいちゃん、おばあちゃんの気持ちを継いでいってもらわないかんと思いますね。今の若い人たちの考えは全然違いますからね。その辺をしっかり幡ヶ谷再生大学の皆さんたちに指導していってほしいですね。

私たちはこの年ですからもう数年と思いますので、あなたたちが今度は若い人たちに対してしっかり伝えていってほしいです。昔の日本人の考え方が、私はやっぱり一番いいと思うんですけどね。終戦後から…最近はもうめちゃくちゃじゃないですか。

そして、じいちゃん、ばあちゃんと同居する若い人が少なくなりましたもんね。考え方が全然違いますもん。そういうことをしっかりあなた方にお願いしたいですね。

――「日本が豊かになった」ということでしょうか。

それもあるが、豊かになり過ぎた。いかんなと思いますよ。奢って自分勝手な考え方ばかりしていたら日本は滅びますよ。



「『気持ち』だけで動いている方が多くて、本当に頭が下がる思いです」

岩下多美江
福岡県出身
／福岡県在住
果樹園業

朝倉市で生まれ育ち、果樹園を営む岩下さん。
幡ヶ谷再生大学への活動に対し、感謝を述べる一方で
ご自身が抱いた疑問を率直に話していただきました。

――2017年の災害（平成29年九州北部豪雨）当時、そして直後の状況を教えてください。

停電になり、電話も繋がらず、ろうそくで2日間ほど生活しておりました。土砂により道も寸断され、不安だったのも覚えています。2日目にヘリコプターで救出され、2週間ほど息子の家にお世話になっていました。

避難勧告が出ていたので、車は使えず自宅付近には近寄れませんでした。主人は徒歩で自宅の様子を見に行っていましたけどね（笑）1週間ほどしたら仮設で道路ができたりして、果樹園の様子を見に行っていました。

――ご自宅には帰らなかったのですか。

見には行きましたが避難勧告が出ていましたので、太陽の出ているうちに家の片付けなどをし、暗くなってきたら息子の家に戻る、という生活でした。2週間ほど自宅を離れ、避難している状態でしたね。

自宅は大きな被害を受けませんでしたが、果樹園に大量の土砂が入ってしまいました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

浦塚さん（P.13）とは以前から懇意にしておりましたので、紹介されたのがきっかけだったと思います。

桃畑の土砂は早急に取り除かなければ、樹木が死んでしまいますので業者にお願いしました。ユカリと知り合い、それを言ったら「もっと早く知り合えば良かったね」と笑っていましたよ（笑）

――どのような活動をされたのでしょうか。

うちの果樹園のある山が崩れその下にあるお宅に土砂が流れ込んでしまったので、そのかき出しをやってもらいました。

狭い場所だったのですが、楽しそうにやっていたのが記憶に残っております。

――とくに嬉しかった想いがあればお聞かせください。

来てもらうボランティアさんが毎回違うことに驚きました。雨の降る寒いときでも、暑いときでも来てくれたのは嬉しかったですね。風邪をひきかけているのに無理して着ている方もいて「そこまでしなくても…」と思う日もありました（笑）。でも、本当にありがたい気持ちです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

それはないです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

皆さん自分の仕事をお持ちなのに、ボランティアだけをしにわざわざやってくるのは「大変だろう」と思っています。交通費もかかるのに頭が下がる想いです。

そういう気持ちのみで動いている皆さんは本当に「凄いな」と感じております。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

ひとつ気になったのですが、全国各地で災害があれば、どこへでも行くんですか？ 災害があればその都度、皆さんでそこに向かわれるのですか？

――幡再のTwitterやWebなどのSNSで募集をかけていますので、全国各地から足を運ぶ方もいますが、災害が起こった地域近隣から来る方が多いです。

そうなんだ。うちに来てくれた人たちが、全国各地に行くものだと思ってました（笑）。そうですよね。ボランティアだけでご飯は食べていけないですものね。

それを差し引いても、すごいなと思います。これからも全国各地でこのような活動を手伝ってくださる方々が増えてもらいたいですね。手伝ってもらった側、助けられた側は、やはり感謝しているものですからね。

――読者に一言あればお願いします。

どんな天候の日でも活動に来られる方や遠方からはるばる来られる方…幡ヶ谷再生大学には「気持ち」だけで動いている方が本当に多くて、頭が下ります。

でもそうやって、活動の“裾野”を広めているわけですから、すごいです。だからこそ「あんまり無理しないでね」とは思っています。

「素晴らしい人たちが集まっていますよ」

渕上美沙子
福岡県出身
／福岡県在住
果樹園業

福岡県朝倉市で梨を中心に果樹園を営む渕上さん。
果樹園に入った土砂のかき出しなどの活動を通じ、
感じたこと、当時は伝えることができなかった想いを話してもらいました。

――2017年の災害（平成29年九州北部豪雨）当日のことを伺ってもよろしいですか？また直後の状況を教えてください。

家が土砂で倒壊してしまい、果樹園にも大量の土砂が入ってしまいました。

土砂により、道は寸断され、母親はヘリで搬出され事なきを得ました。災害が起きる前は地域に16軒の家がありましたが、現在は8軒まで減ってしまいました。

亡くなられた方もいました。私たちの息子たちも道路が遮断されたため、徒歩で山を登って助けに来てくれました。とても嬉しかったですね。

当初は梨畑を復活させるために息子たちや息子たちの友人が、仕事が休みのたびに畑の土砂の撤去を手伝ってくれました。雨が降ると川はすぐに冠水するため、時間との勝負でした。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

浦塚さん（P.13）からの紹介ですね。「どっかないねー」って、心配していただいたので「土砂が梨畑に入っちょるとー」と言ったけんですね。それから“幡再”に来てもらうことになったんですよ。

――幡ヶ谷再生大学の活動に関して思ったことを教えてください。

若い方が多い…それも女の方が多いですよね。流れてきた泥とか、誰もしないようなことをどんどんやってもらいました。とても暑い日でも嫌な顔をせずやってもらいました。皆さん、自分の仕事を持ちながらですよ。仕事の休みの日とかに来てもらいました。「よく来れるねー」と思って、いつも感心というか感謝していますよ。

――具体的な作業内容は、梨畑の泥出しですか。

そうですね。機械を使ったり、運搬車を使って外に出してもらったりしました。それも女の子がやってくれるんですよ。それも若い子がですよ？「すごいねー」と思っていましたよ。

――とくに嬉しかった想いがあればお聞かせください。

皆さんのおかげで土砂がなくなりました。あの年は消毒ができなかったから虫にやられてしまったけど、昨年（2018年）も収穫できたし、今年も無事に花が咲きそうですから、これは皆さんのおかげですよ。自分たちだけじゃできんですよ、そういうことは。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌なことはなかったですね。こっちの方がそうさせてしまったのかな、と思うことはあります。私は仮設住まいで何にもできなかったけど、来てくれる方は自分たちでお茶とかちゃんと持ってくるんですよね。それがなんとも気の毒でした。

うちには虫にやられた梨とかしかあげることができなくて…それが心苦しかったですね。それでも毎回来てくれて…わざわざ声だけかけに来てくれたりとか、そういうのは嬉しいものです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

本当頭が下がりますよ…。昨年も一昨年ほどじゃなく、水害がありました（注・2018年7月の西日本豪雨で朝倉にもまた被害が出ました。当時まだ朝倉で継続中だった泥出しに加え、この災害による泥出しも発生しました）。そのときもまた来てもらったんですよ。「そげんできるもんじゃなかろう」と思いますよ。それもうちの果樹園だけじゃない。広島や真備（岡山）、愛媛も水害被害がありましたよね？そういうところにも行っていると聞いて、「凄いなぁ」と。ユカリさんにもお土産をもらったりして。本当にすごいことをやっていると思っています。今後も全国で頑張ってほしいと思っています。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

全国各地で災害に遭ったところに即座に行っていますよね？来てくれた側の皆さんは喜んでいるはずです。私からは期待とかそういうのはありません。

――「被害に遭われた全国に皆さんの力になってほしい」ということですかね。

あの暑い中でも、若い男の子や女の子たちが汗だくになって作業をしてくれました。鹿児島からやもっと遠方からも来てもらいました。何も言うことはないですよ。

――読者に一言あればお願いします。

黒川はもともと少子高齢化がすすむ地域でしたが、災害で引っ越しをされてしまった方や果樹園業を辞めてしまわれた方もいます。「かつての生活を取り戻せたか」と聞かれれば、取り戻せてはいないのかもしれませんが、災害があったからこそ、幡ヶ谷再生大学の方々にも出会えました。

「素晴らしい人たちが集まっています」と、それしか言いようがないですね。

たくさんの男性たちと若い女の子たちが泥まみれになり、普段は仕事を持っているにも関わらず、その休日を返上してうちの果樹園へ作業をしに来てくれたこと…もう、その気持ちは言葉では言い表せません。

災害で流されたビニールハウスの中に、一本だけ助かった桃の木がありました。その木の枝を折り、苗木屋さんに持っていって、接ぎ木をしてもらったんですよ。それから順調に育ち、昨年12月にその木を災害で流されてしまった自宅の跡地に植えました。

来年か、再来年には実をつけるかな？と期待しております。

また機会があれば、その桃を見に来てください。今度は災害とかではなく、皆さんにお会いしたいですね。



「寂しい気持ちになるんですよ。それまで築いてきた絆がより深くなったと実感してます」

星野龍三
福岡県出身
／福岡県在住
農業

水害による自宅被害は免れたが、だいじに育ててきた柿畑に
大量の土砂や流木が入り、途方に暮れていた星野さん。
『木札with a mission』として東北ライブハウス大作戦の木札も
生まれた流木が山のように折り重なった壮絶な現場での活動を通じて、
幡ヶ谷再生大学の“生徒”との間に生まれた「絆」を話してもらいました。



――2017年の災害（平成29年九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

自宅は被害に遭わなかったのですが、畑がどうにもひどい惨状でした。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

家内が浦塚さん（P.13）と知り合いでして、お話をいただきました。2017年11月ぐらいからですかね。我が家の畑に入っていただきました。

――どのような活動をされたのでしょうか。

うちのいくつかの柿畑に大量の土砂や流木が入ってしまい、その泥出しや流木の撤去ですね。期間としては2017年12月から2018年の3月いっぱいまでやってもらいました。

ちょうど寒くなりはじめ、雪が降り積もった寒い日から、春を感じさせるほのぼのとした日までですね。

――写真で見る限り、すごい惨状でした。星野さんはその光景を見たとき、どのように感じましたか。

畑を辞めようかと思いましたよ（笑）。当時はちょうど、行政がうちの畑の近くで作業をしておりましたので「根こそぎ持っていってくれ！」と言いに行こうかと思っていました（笑）

でも、うちの2番目の畑に入った流木のほとんどが『木札with a mission』として東北ライブハウス大作戦の木札になっていることを幡再生に聞かされましたね。

――そのときの心境を教えていただけますか。

うれしかったですよ。Twitterでも見てね。「東北と九州が繋がっている」「みんなで撤去した流木が誰かの役に立っている」と思ってね。報われた気持ちになりましたよ。

――Twitterやっているんですか？（笑）

やっているよ（笑）。Twitterでね、みんなでつくった「木札たち」が東北のライブハウスに取り付けられている様子を見るとね、やはり感慨深い気持ちになるもんですよ。

――活動を通じてとくに嬉しかった想いがあればお聞かせください。

平成30（2018）年の霜が降りた日でも、雪の中でも、炎天下でも汗まみれで仕事をしてくれたことです。みんなが手を泥まみれにしてね。

私は若いころ人命救助などをしており、さまざまな災害現場へ行きましたが、それは給料が発生する「仕事」なわけです。でも“幡再”は違いますよね？すべて無償でやってくれる。その光景を眺めていたら、ときおりですけど、目頭が熱くなるものがありました。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

それはないですよ。ただ、大きな流木を撤去するのに幡再で重機を用意していただいたときがありました。熊本の、のはら農研塾さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.82）が深夜に持ってきていただき、そのときは幡再の熱意に申し訳ない気持ちになりました。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

「神様」ですよ本当に（笑）。全国各地から集まってきて、活動してくれる姿は脳裏に焼き付いていますよ。皆、自分の子供であり、友達であり、仲間であり…今では「同胞」だと思っております。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください

私は「救われた」と思っているんですよね。これからも全国各地で天災が起こったときには駆けつけて欲しいです。必ず「救われた」と感じる人はいるはずですので。

――読者に一言あればお願いします

私は、幡再の皆さんに巡り会えたことを本当に感謝しております。

我が家の敷地でときどき幡再の皆さんと集まってバーベキューやキャンプをやったりするんですけど、「おはよう」「ただいま」とやってきて、その日の夕方に帰る人や次の日にはみんな帰っていくわけじゃないですか。そのときは何とも寂しい気持ちになるんです。築いてきた絆がより深くなったと実感しています。

「幡再の活動には『ハートがある』と感じます」

篠崎英一
福岡県出身
／福岡県在住
無職

篠崎さんは現在、生まれ育った朝倉の歴史を保存する活動をされています。
九州北部豪雨が起こったときは集落の区長を務め、陣頭指揮を務めました。
災害直後の様子。区長の立場として故郷を襲った天災…。
災害時に社会が抱える「未整備」、「未発達」な部分。
幡ヶ谷再生大学に託す未来を話していただきました。

――2017年の災害(平成29年九州北部豪雨)直後の状況を教えてください。

当時集落の区長を務めていました。7月5日の14時頃から川を監視していましたが、14時半過ぎ頃、堤防が溢れ、集落に濁流が流れ込み始めました。「避難が必要」と判断しました。

しかし、指定避難所への道路はすでに冠水して危険な状態にあったため、15時過ぎに有線放送で呼びかけ、高台にある公民館に自主避難所を立ち上げました。あまりにもひどい状況であったため、記録を残す必要があると感じ、写真、ビデオの撮影も併行して行いました。

19時頃からは、我が家にも浸水の危険が迫ってきたため、手持ちの木材防止対策を取りました。結果的に我が家は幸いにして床下浸水で済みましたが、その頃にはさらに状況が悪化し、警察・消防からの求めに応じて、危険が迫った家屋の住民の避難誘導を共同で行いました。

さらに、日没後は公民館を拠点に情報収集や関係先との連絡調整、停電した公民館の照明や寝具などの整備、安否確認、避難者のお世話などの作業を夜半まで継続していました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

災害後、10日～2週間くらい経ってからですかね。地域住民から「とても親切で、良くしてくれるボランティア団体がいる」との噂で幡再の存在を知りました。その時は、「どこかの“大学生ボランティア”が継続的に集落に来てくれている」くらいの認識でしたね。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

住民からの噂がたびたび聞こえてくるようになりましたので、関心を持ちました。ある日、作業現場に出かけました。そこで、リーダーのユカリさんと出会い、話を聞いて活動を知り、改めて区長の立場から集落の復旧復興についての協力依頼を行いました。

――どのような活動をされたのでしょうか。

当時は区長の立場でしたので、住民とのパイプ役としての活動に徹しました。幡再の皆さんが自主的に見つけてきた案件はお任せしました。私の立場として、区全体の立場から対応が必要な“がれきの分別回収”や“ごみ集積場の復旧”などの地域共通課題。

また、“継続的ケアを要する被災者対応”などを中心に依頼を行っていきました。社協経由の一般ボランティア、NPO団体、重機ボランティア等と、相互補完的に、幡再の得意とする領域で、我々の要望を受け止め、きめ細かく、かつとても大きな貢献をしていただきました。感謝してもしきれない思いですよ。



――とくに嬉しかった想いがあればお聞かせください。

いったんお願いすれば、継続的、自己完結的に仕事をしていただけること、互いに顔が見える関係でコミュニケーションが良く、常に情報共有ができていたことは、当時多忙だった私の立場から、大変ありがたかったことでした。

ビックリしたのは、重機メーカーを呼んで公民館で行ったバックホー（重機）の講習会でしたね。「ここまでやるのか」と感心しました。また、ボランティアの数が次第に減少していく中、息の長い活動を継続し、地域のお世話をいただいていることに頭が下がる思いです。

TOSHI-LOWさん他、有名人に出会えたことも思い出に残っております（笑）

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

ありませんよ。探すのが難しいくらいです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

幡再の活動には「ハートがある」と感じますね。地域や住民に対する想いがある。それを今後も大事にしてください。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

今回の朝倉水害を通じて、「災害時に駆けつけてくれるボランティアの善意を無駄なく活かす仕組み、受容力が社会として未整備」ということを強く感じました。

「遠路はるばる朝倉まで来たのに、空しく帰らざるを得なかった」、「仕事はあっても、ほんの短時間しか働くことができなかった」というような事例を数限りなく見聞きしています。

幡再は、それらとは無縁の、円滑で効率的な活動を続けていただいていますが、幡再と同じやり方をすべてのボランティアに展開することは困難が伴います。今、私の頭の中に「こうすればよい」との確固たるアイデアはありません。ですが、衆知を結集してうまい仕組みを構築し、少しでも現状を変えることができれば、大規模災害が増えつつある日本の社会にとって、とても有意義なことではないでしょうか。

幡再の皆さんは、多くの経験と実績をお持ちです。また、組織力、情報発信力があります。皆さんで議論し、今後のボランティア活動の在り方、とくに被災地域としての受け入れ態勢の在り方について、社会全体に対し、情報発信や提言を行っていただければというのが、私の期待です。

――読者に一言あればお願いします。

駄文、かつ堅苦しい話になってしまい申し訳ありません。読み飛ばしていただいて結構です。

「若い人たちが人助けをするというのは捨てたもんじゃない」

満生 寛
福岡県出身
／福岡県在住
無職

御歳85歳になる満生さん。被災した住まいは解体され、
現在は仮設住宅で奥さまの在宅介護を続けながら生活されています。
被災者になり、幡ヶ谷再生大学と過ごした日々。
その後の触れ合い。伝えたかった想いを語ってもらいました。



――2017年の災害（平成29年九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

自宅に大量の水が入ってきました。それからすぐにボランティアの方々にたくさん協力していただきました。1カ月以上来ていただいて、自宅の泥出しなどをしていただきました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

隣に住んでいた矢野運送の息子さん（P.33）の紹介でした。たいへん協力していただき、とても助かりました。

――どのような活動をされましたか。

家内が病気で倒れ車椅子の状態で在宅介護をしておりますので、活動はなにもしておりません。

――幡ヶ谷再生大学の活動を通し、印象に残っていることがあればお聞かせください。

熊本県や福岡県やもっと遠いところからたくさんの幡ヶ谷再生大学の方々が来ていただいて、畳や使えなくなった家財を運び出してくれたり、その後の廃棄処理もやっていただきました。

一段落してからは隅々まで掃除していただきました。とても感謝しておりますし、どれも印象に残っています。自分が困ったときに我が身のことのように協力してもらえたことが１番嬉しかったです。

これまでは、あんな大きな災害に見舞われたことがなかった地域でしたから…。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

私どもが仮設住宅へ移ってからも「元気にしていますか」と何回か訪ねてくださいました。自転車もボロいのを乗っとったので「新車がもらえるので送りましょう」と持って来ていただきました。

足が悪いものですから、どこへ行くにも重宝しておりますよ。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

私どもに限らず、ほかのところでもたくさん活躍してくださったみたいですね。ここの地区で「助かったわぁ」と言われる方が何人かいっしゃいます。今でも「素晴らしいなぁ」と感心しておりますよ。

「ボランティア」は知っておりましたが、自分自身が被災者にならないと本当の意味での“ボランティア”はわからなかったです。

――これまでボランティアに接する機会はなかったのでしょうか。

住んでいた地区の自治会長のような役をやっており、自分たちのことは自分たちでやってきたので、やってもらったことは初めてです。私どもも真面目にやってきたつもりでしたが、あんなにはやらなかったですよ。だからこそ、感心しております。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

これまでボランティアの活動は40代～50代が中心というイメージがありましたが、幡ヶ谷再生大学は10代～20代の若い世代の方もいて驚きました。若い人たちが、泥だらけで汗をかきながら作業している姿を見て感心しました。

若い人たちが人助けをするのは捨てたもんじゃない、と感じました。今後も続けてほしいです。

――読者に一言あればお願いします。

私の周りの知人も、仮設住宅にいる知り合いもみんな「来ていただいてありがたかった」と言っています。みなさんの前では言えない人も多いんですけど、本当に心から感謝しているんです。

この場を借りて、私から御礼申し上げます。





























幡ヶ谷再生大学 生徒の声 030

幡ヶ谷再生大学の九州北部豪雨支援活動に参加いただいた参加者にインタビューを行いました。災害を経て痛感した想い、足繁く通った理由、「幡再」を通じて得たもの、感じた想いを話していただきました。

「困っている人の手助けがしたかっただけです」

安岡義博
福岡県出身
／福岡県在住
自営業

生まれ育った朝倉市が大きな被災を受け、
すぐに現場に駆けつけ、復旧作業に尽力していた安岡さん。
現在は「幡ヶ谷再生大学 九州自主練」の
主要メンバーの1人として活動を続けています。
半信半疑だった「幡再」との出会い。
活動を通じ、変わっていく心境の変化を話してもらいました。

——2017年の災害(平成29年九州北部豪雨)直後の状況を教えてください。

まさに災害が起こり始めていたときに仕事で朝倉市へ向かっていました。増水による通行止めで一般道では行けず、高速道路を使って現地に行きました。その時は、あのような大災害になるとは思いもしませんでした。

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

最初は社協(社会福祉協議会)のボランティアセンターで活動していました。徐々に活動規模が縮小になっていき、参加しづらくなっていきました。災害ボランティアを行っている団体を探していたところ、たどり着いたのが幡再でした。

——朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

幡ヶ谷再生大学のWebサイトやTwitterで知りました。

——活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

Twitterである程度、活動内容が確認できていました。その当時、私の頭の中ではNPO団体って怪しさ満載でしかありませんでした(笑)。「合わなかったら他を探せばいいかな、とりあえず行ってみようか」と思っていました。

——初参加のときの感想を教えてください。

すごくきつかったですよ。作業が作業だっただけに…。でも、それ以上に「楽しかった…来て良かった…」と思いました。

——どのような活動をされたか教えてください。

初参加のときは家屋の裏山が崩れている現場の土砂出しでした(岩下さんP.18の現場)。それ以降は農地の土砂出しが中心でしたね。少しですが流木の撤去もしました。

——その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。(P.118)

「東北ライブハウス大作戦ってなぁん？」「みんなTシャツとか輪っかとかしとるけどなぁん？」って思ってました（笑）。「こんな幡再生がひとりくらいおってもいいやん」と現在でも思っていますよ。もちろん良い意味で。冗談はさておき、流木を切り出して、それらを送り出す作業に携わりました。「これにみんなの想いが乗っかるんやなぁ」という漠然とした気持ちはありました。

東日本大震災以降、東北へまだ足を運んだことはありませんが、現地でこの木札たちを目にしたときにはこみ上げてくるものがあると思います。

——作業を通じ、とくにうれしかった想いが



あればお聞かせください。

土砂出し、流木の撤去をした柿畑に、一年後また美味しい柿が実っている光景を見たときは嬉しかったですね。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

「嫌やなぁ」と思うことは正直ありましたよ。でも現在は覚えてないですけどね（笑）。それは小さなことだったし、その何十倍も嬉しいことや楽しいことがありました。

幡再の活動は「誰かに強制されて参加しているのではないですし、自分で決めて参加している」と自分で決めて参加するものだと思っています。

人間、嫌やったら参加せんもんね。

――複数回、活動に参加されております。現在は「幡ヶ谷再生大学 九州自主練」の主要メンバーの1人だという認識でおります。その情熱はどこから来るものなのでしょうか。

困っている人の手助けがしたかっただけです。その人が喜んでくれると…やっぱり嬉しいですからね。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する思いがあればお聞かせください。

土砂や流木に飲み込まれた星野さん(P.22)の柿畑の活動初日にも参加したんですよね。その光景は目を背けたくなるようなものでした。「これ俺たちでやれるの？絶対無理やん」と思いましたが、現場責任者の方は「やれるよ、これくらい。時間かかるけど」と言っていました。

そのときは「この人、何を言っているの？絶対無理やろ？ 業者入れんと絶対無理やんか」と心の中では思っていました。

だけど、いつ来るかもわからない業者を待つ時間がありませんでした…。雨の日も雪の日も活動を続け、2カ月後には星野さんも諦めていた柿畑がきれいに再生されていました。県内はもとより、全国各地から人が集まり繋がって大きな力となっている。そしてきついだけじゃなく、すごく楽しい。それが「幡ヶ谷再生大学 復興再生部 ユカリIsm」と感じますね。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

今のまんまであってほしいですね。

――読者に一言あればお願いします。

幡再の活動は、「ボランティア？ NPO？怪しいなぁ」という考えは払拭されるかと思います。一度参加してみてはいかがでしょうか。

「『諦めなくて良かった』とおっしゃっていただいたときが一番うれしかったです」

矢野雄大
福岡県出身
／福岡県在住
診療放射線技師

福岡県朝倉市で生まれ育った矢野さん。
地元への愛情と被災したことにより感じた心境の変化。
背中を押され、ときに支えられ、
今もつづく幡ヶ谷再生大学との繋がりについて訊きました。



――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

幡ヶ谷再生大学のブースをイベントでお見かけしていたのと、石井麻木さんの写真展（Hatasai Magazine Vol.7）を通じて知りました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

朝倉が被災する直前の6月に京都で開催されていた石井麻木さんの写真展でユカリさんにお会いしていたこともあり、福岡の友人と何かできないかと模索していたところにお声がけいただきました。

――活動へ参加しようと思い立ったきっかけを教えてください。

実家、親戚、友人、ご近所さんなど地元の方が経験したことのないような水害で被災して、助けてもらうだけでなく「自分も何か行動を起こしたい」と思ったときに、現在でも活動をつづけてくださっている方々に背中を押していただいたのがきっかけでした。

――初参加のときの感慨を教えてください。

とにかく緊張をしていたのを覚えています。ここまで大きな災害を経験したことがない地区でしたので諦めにも似た雰囲気がありました。そんな中で「（中途半端に作業しては）ご迷惑をおかけするのではないか」とばかり考えていました。

――どのような作業をされましたか教えてください。

川から流れてきた土砂の泥かきをしました。あの独特の臭いと泥の重さは今でも忘れません。

――参加してうれしかった想いがあればお聞かせください。

仕出し屋の浦塚さん（P.13）に「諦めなくて良かった」とお言葉をいただいたときが一番うれしかったですね。

――活動で嫌な経験がありましたら教えてください。

特にありませんでした。

――複数回、活動に参加されたようですがその情熱はどのようなものでしょうか。

「朝倉が好きだからなんとかしたい！」という思いが根底にあったからだと思います。活動に参加するなかできつい作業もありましたが、地元の方や遠くから参加された方々と話すのが楽しくて参加できたのだと思います。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

幡再の活動は多くの出会いがあり、知ることができる場だと思います。自分も今回の災害を通して学ばせていただきました。また、強制されず賑わいながら作業をできるところも幡ヶ谷再生大学の良さだと思います。

今は仕事などで参加できない日々がつづいていますが、また時間を作って学びに帰りたい場所です。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

これからも現場に寄り添い、多くの人との繋がりを作る場所であってほしいと思います。

――読者に一言あればお願いします。

現場に行かなければわからないこと、現場だからこそできることがたくさんありました。2017年7月5日の大雨の翌日に地元に戻り、被害の大きさを知りました。ダメかもしれないと思ったこともありましたが、多くの方が助けに来てくださったことによって諦めずに復興できているのだと感じています。

何ができるか迷っている方がいるのなら、一度幡再の活動に参加してみてください。現地に行くだけでも学ぶことは多くあると思います。

「今、自分にできることを今やる。そして朝倉を復興させたい」

ぺたろー（匿名）
福岡県出身
／福岡県在住

2011年から幡ヶ谷再生大学を知り、
石井麻木さんの写真展のお手伝いを中心に活動してきた
ペタローさんにとって九州北部豪雨とは。
その直後に朝倉入りした心境と、今後もつづく活動への想いを訊きました。

――2017年の災害（平成29年7月九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

現地の友人や先輩から連絡をもらい、ユカリさんと連絡を取り合い7月7日に向かいました。あたり一面の泥や流木、茶色く増水した川と崩れた中学校。家の壁には子供の背丈ほど浸水した水の跡。道はえぐれ、アスファルトは大きく波打っていました。

友人の親戚の家は土砂崩れで埋もれていました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2011年にTwitterのリツイートで流れてきたのを見て知りました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

幡ヶ谷再生大学の最初の現地入りの際、ユカリさんと向かいましたのでそのときに知りました。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

朝倉には友人や先輩がいたからです。

――初参加のときの感慨を教えてください。

たくさんの泥や漂流物、浸水した家を目の当たりにしたときに「水はこんなにも力強く、恐ろしいものだ」と思い知りました。

しかし自然の恩恵を与えてくれるのも水。

自然の力には敵わないけど、うまく共存できたらいいなと思いました。

――どのような活動をされたか教えてください。

浸水した家の荷出しや泥かきを行いました。流れてきたヘドロや発酵した果実の臭いが強烈だったのを覚えています。また、初期の活動場所は風が抜けにくく、真夏の日差しと地面からの湿気で特段キツかったです。

泥かきなどが一段落したころに流木の撤去なども数回行いました。

――その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

木札に触れる人が「これは朝倉の流木なんだ」と認知し、さらに朝倉のことを知るきっかけになると思い、うれしかったです。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

作業の休憩時間は朝倉でお世話になっている浦塚さん（P.13）のお孫さんと周辺を撮影していました。

そのときにそのお孫さんが「俺たちが撮って伝えていかなきゃいかん。みんながこうやって復興のために活動してくれていること『今地元の人はこういう生活で頑張っているんだよ』ってことも。俺たちの地元やから復興させないかん」と少し照れくさそうに、でも決意に満ちた声で伝えてくれたことです。

まだ小学校低学年くらいの小さな子供にもちゃんと想いが伝わって、それを繋げようと



してくれることがうれしかったです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

とくにありません。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

「今、自分にできることを今やる。そして朝倉を復興させたい」

その一心でした。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

現地での活動もそうですが、石井麻木さんの写真展の手伝い。各地での出展。そこから第二、第三の「幡再生」が生まれると思います。1回、1回の活動を通じ、しっかりとした想いを持った同志たちが生まれてくること期待しています。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

このままありつづけてください。

――読者に一言あればお願いします。

朝倉が被害にあったとき、すぐに動き出せて良かったと思っています。

あの土地は自分にとって、「親しい場所」でした。これを読んでいる方にとってのその場所が、被災したときのことを想像してほしいです。

そのときになにができるかを考え、今できることを今やると1人でも動くとなにかが変わるのではないのでしょうか。

「東北と朝倉が繋がったような気がして、何とも言えない気持ちになりました」

朝倉（匿名）
福岡県出身
／福岡県在住
建築業

朝倉市で生まれ育った“朝倉”さん。
故郷を襲った自然の猛威を感じながら、幡ヶ谷再生大学との出会い、
復興へ歩んだ日々をふり返ってもらいました。
故郷を襲った天災は、朝倉さんに何をもたらしたのかを訊きました。

――2017年の災害直後の状況を教えてください。

災害が起きた7月5日は自宅に居たのですが、昼過ぎから雨が降ってきて、だんだんと雨脚が強くなっていきました。夕方頃には近所の川が増水したり、田んぼが冠水したり…今までに経験しことない、ただ事ではない状況でした。

翌朝、水が引いた後…見てまわったのですがあちらこちらにゴミが散乱していたり、水に浸かった車が至る所に流（されていて、流木で道路が通れない箇所がたくさんありました。山田の交差点を見たときは、あ然としました。この流木はどこから来たのだろうと思うくらい、大量の流木が積み重なっていました。

この近くで3名の方が亡くなられました。この災害で小さい頃から可愛がってもらっていたおっちゃんも亡くなりました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2017年の4月頃、天神（福岡県）で開催されていた石井麻木さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.92）の写真展に行き、幡ヶ谷再生大学のことを知りました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

Twitterで知りました。「朝倉に来てくれるんだ！」と思い、本当にありがたかったです。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

石井麻木さんの写真展以降、熊本での活動も行われていることを知り「いつか行ってみようかなぁ」と思っていた時に九州北部豪雨災害が起きました。

当初、被災した友だちの家の片付けや土砂出しを幡ヶ谷再生大学にお願いしようとしたのですが、時間的にむずかしくて、そのときは友人や社協のボランティアにお願いしました。それが落ち着いた頃に、幡ヶ谷再生大学に参加することにしました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

8月下旬に高木地区の梨畑（渕上さんP.20）の土砂撤去に初参加したのですが、その日は朝からとても暑い日で梨畑を中腰の姿勢でスコップを使い、泥をすくって一輪車や運搬車に載せて外まで運ぶ。その繰り返しでした。

たくさんの人がいろんな所から来ていたのにビックリしました。その日は四星球のU太さん（P.88）も来てくれました。

そのときに渕上さんからいただいた梨が、今まで食べたことのないほどおいしかったのを覚えています。

――どのような活動をされたか教えてください。

あまりなにもしてないような気がします（笑）星野さん（P.22）の柿畑の泥出しや流木の

撤去になります。家から近いので、時間を見つけては行っていました。

山のように折り重なった流木の山をテコの原理で崩して、チェーンソーで切ってもらって、それを燃やしたりですね。その焚火で焼いた芋がおいしかったです（笑）

もともとあの地域は知り合いの方が多かったり、小学校からの友達の家があったりで、よく行っていたのかもしれません。あとは自分が朝から活動できない分、仕事の合間に朝倉の豚まんやアイスを差し入れしていました。というか差し入れで誤魔化してました（笑）

――その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

ユカリさんが「流木で木札を作ろう」と考え、私は知り合いの製材所を紹介させていただきました。「末金製材所」（P.119）が、快く引き受けてくれました。

流木には細かい砂利などが入っていることが多いので、鋸の刃を傷めるので嫌がられるので、本当にありがたかったです。
木札ができたとき、東北と朝倉が繋がったような気がして、なんとも言えない気持ちになりました。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

星野さんに毎回「おつかれさま」「ありがとう」と言われることはうれしいですね。あとは幡再を通じて仲間や知り合いが増えたことですかね。活動に参加している小学生に“最強のおっちゃん”と言われたこともうれしかったです（笑）

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

別に嫌なことではないのですが、最近、ユカリさんに会う機会が減ったことですかねー。昨年の地震や豪雨災害や台風被害であちこちへ行ってらっしゃるので致し方ないとは思いますが…。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

いままで朝倉での活動しかしてないのですが、みなさん遠いところから来てくださるので、地元に居る自分が行かなければという思いになります。

あとはいつも来てくれる新里さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.33）や上森くん（P.55）や仲間が来てくれるからですね。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

これまでは朝倉でしか活動してなかったので、これからは熊本や南阿蘇に行きたいと思います！

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

この繋がりや輪が拡がればと思います。

――読者に一言あればお願いします。

災害はいつどこで起こるかもしれません。いつもの日常が一瞬で変わることがあります。朝、普段どおり家を出て、夕方には被災地になることもあります。

また災害が起きた直後は報道されますが、数カ月後には記憶から消えていくと思います。一度、災害があった場所へ行ってみてはどうでしょうか。

なにか感じることがあるかもしれません。





「たくさんの人が関わったものが『全国の人の想いとなって繋がっていく』」

平松ルミ
長崎県出身
／福岡県在住
事務職

2016年の熊本地震で幡ヶ谷再生大学を知り、活動に参加。
2017年の九州北部豪雨では色々な学びの場になったという平松さん。
災害直後の朝倉、日に日に増えていく仲間。
現地での活動を通じて感じたことを訊きました。

――2017年の災害（平成29年九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

福岡市内では普通に動けていたので、ニュースを見てただただ驚くばかりでした。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

熊本地震の後にTwitterでアーティストがリツイートしていたのを見て知りました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

災害直後から朝倉の現場に入っている幡再生から教えてもらいました。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

きっかけは覚えていませんが、「なにかできれば」と思って参加しました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

道は乾いた泥で一面茶色、砂埃が舞っている状態で戸惑いました。ユカリさんから「ただ片付けるだけではなく、地元の方の話を聞くことも大切だ」と言われました。

地元の方や幡再生から話を聞いて、本当に

大変な状況でしたが実際に現地に行って、見て、話を聞くことでまた「何か少しでも手伝えたら」と思いました。

――どのような活動をされたか教えてください。

各所で土砂が家や畑に流れ込んでいたので、主に泥と流木との戦いでした（笑）

水に浸かった家財道具の運び出しや床の洗浄や床下の泥出し、そして畑の泥出しでしたが、どこも大量に流れてきていたので、お家の方だけでやるには大変な状況だと思いました。大量の流木を見たときは、正直どうしよう、と思いましたが…行くたびにどんどん減っていくのを見て「できるもんだな」、「みんな、すごいな」と思いました（笑）

幡再生として、地元の方の大切なお家や畑に入らせてもらい、お手伝いできて良かったと思います。

――作業した流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

木札になった流木は大きくて重くて、それを裁断して、干して大きさごとに梱包してと、たくさんの人が関わったものが“全国の人の想い”となって繋がっていく。これが「幡再なんだなぁ」と思いました。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

地元の方が、自分の家や畑のお手伝いでないときにも「幡再生がいるから」とアイスや飲み物など差し入れてくれたり、休憩用にテントを張りにきてくれたりしてくれました。帰りにご飯食べさせてもらい、お土産までいただいたり、たくさん気にかけてもらえて、うれしいのとありがたい気持ちでいっぱいでした。

地元だけではなく、熊本での繋がりからも「朝倉大変だろう」とご飯やお茶、スイカ、さつまいも、さらには重機まで運んでくれたりと…各地の繋がりと思いやりに、お手伝いに行っていてもいっぱい与えてもらっていることに感謝しています。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

活動ではとくに思いつきませんが、日焼けでシミが増えたことでしょうか（笑）

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

九州内でも何時間もかけて参加するみんなや、関西、関東、東北など全国各地から来てくれる幡再生はみんな素敵だと思います。真面目な話はほとんどしないですが（笑）

各地の幡再生や、地元の方の取り組む姿勢や、どう動くかを楽しく学ばせてもらっています。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

作業するだけではなく、実際に現地に行ってみて、地元の方や幡再生に話を聞いて、何を感じるかは自分次第なので、その自由さが好きですね。

活動後は筋肉痛になっていることもありますが（笑）、リフレッシュさせてもらっています。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

このまま変わらず、幡再らしく進んでいただければと思います。

――読者に一言あればお願いします。

各地にお手伝いが必要な場所がまだまだあると思います。「ちょっと参加してみたい」と思ったら、自分の感覚に従って、行けるタイミングで行ってみたら良いと思います。

私も最初「体力もないし、迷惑をかけるかもしれない」と躊躇をしていましたが、「えぃ！」と参加してみたら、いろいろと得るものが多く、毎回楽しく参加させてもらっています。

「ぜひ現場で笑い合いましょう」

和田朔太朗
神奈川県出身
／福岡県在住
会社員

2016年に熊本地震が起こると2011年の東日本大震災発生時から
抱いていた思いを行動に移した和田さん。
幡ヶ谷再生大学での出会い、
熊本・南阿蘇と朝倉での活動を通して感じた想いを訊きました。



――2017年の災害（平成29年7月九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

当時は熊本県に住んでいました。転勤の時期と重なっていたため、ほとんど初期の活動へは参加できなくてもどかしい気持ちでいました。ぺたろー（P.35）がとても頑張っていた印象があります。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2012年にBRAHMANを知ったころには認知していました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

2016年11月より幡ヶ谷再生大学の活動に参加していましたので、活動初期から朝倉の活動は知っていました。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

2011.3.11の東日本大震災のとき、なにもできなかった自分がいたので2016年に起きた熊本地震のときに“後悔しない”ためにも活動に参加しました。

震災直後はBUILDというバンドの奥村さんたちと共にNBC作戦（自立支援プロジェクト）で活動していました。NBCが落ち着き、幡再の募集を見つけたので参加しました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

初参加は2016年11月3日で南阿蘇のリンゴ園での火山灰の片付けでした。僕と新里さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.33）ゆうこさん（Hatasai Magazine Vol.7 P.34）とユカリさんの4人での作業でした。

緊張はありましたが、楽しかった記憶があります。

そういえば、ユカリさんがりんごパイを作ってくれました（笑）

――朝倉ではどのような活動をされたか教えてください。

家屋の泥出しや清掃、畑や田んぼに入った流木の撤去です。流木撤去の現場を見たとき、「絶対無理だろう」と言っていた記憶があります。

流木撤去の現場の前に別の畑の土砂をかいていたのですが、まさか次の現場が山のように流木が積まれている場所だとは思いもしま

せんでした。

ゆっこさん（Hatasai Magazine Vol.7 P.102）や上森さん（P.55）が自腹でユンボの免許取ってきたときの格好良さは忘れられないです。

――その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

木札を買ってくれた方にはぜひ、朝倉で流木被害の現場だった星野さん（P.22）の柿はめちゃくちゃ美味しいので食べてみてほしいですね。

なんか…そこまで感じてほしいですね。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

星野さんや浦塚さん（P.13）たちと出会えたことですね。

朝倉で「ただいま」と言える人たちに会えたことが一番うれしいですね。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

たぶん、楽しくなくなったら参加するのをやめるんじゃないですかね。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

僕は幡再が楽しくて参加しています。遊びに近い感情ですね。

上森さんともそんな話をよくするのですが、誰かのために生きることは僕にはできません。全部、自分が楽しいからやっています。活動へ行けば、だいたい知っている人がいて、知らない人とも仲良くなって、うまい飯を食べて、ときには活動の後に酒を飲み行っての繰り返しです。

土砂をかくだけ、流木を撤去するだけじゃなくて、その前後も含めて幡ヶ谷再生大学だと思っています。

ユカリさんと会ったらだいたい笑って話していますし、森さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.38）のべらぼうにうまい飯を食べたり、浦野さん（P.78）と音楽の話で盛り上がったりしたりします。

そんな人たちがいるから僕は参加しています。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

朝倉だけじゃなくて、のはら農研塾のケンジさん（のはら農研塾代表・野原健史：Hatasai Magazine Vol.7 P.82）や旅館・朝陽の社長さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.12）、袴野の区長さん夫婦（Hatasai Magazine Vol.7 P.10）をはじめ、伝え切れない人たちと出会って今の僕があります。

幡ヶ谷再生大学がなければ会えなかった人たちに出会って、成長をさせてもらっています。割と僕は若手の部類なので、これからもどんどん諸先輩へ甘えていく所存であります。袴野の区長さん、コーヒーの件は本当にすみませんでした…。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

最近、ユカリさんに会えてないのでもっと会いたいです。

――読者に一言あればお願いします。

この文章を読んでいるということは最後まで読んでいただけたということでしょう。いかに僕が適当に参加しているかということがおわかりいただけたと思います。

こんな奴が楽しくやっているんだから、そりゃ楽しい場所ですよ。

「百聞は一見にしかず」

怖そうな人はたくさんいますけど、今のところ本当に怖い人には会ってないので、大丈夫なはずです。ぜひ現場で笑い合いましょう。九州の幡再生の人たちは、また今度飲み行きましょうね！

「『行動だけが現実!』実践してみてわかることがありますよ!」

麻生島朋子
大分県出身
／福岡県在住
会社員

2011年から幡ヶ谷再生大学の活動を追いつづけた麻生島さん。
地元が被災地になった2017年、仕事の都合上、
活動には行けずにいた彼女を突き動かした要因。
その後の心境の変化を訊きました。



――2017年の災害直後の状況を教えてください。

自宅でニュースを見ていて、知っている景色が目を覆いたくなるような惨状に言葉を失いました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2011年の東日本大震災のときにBRAHMANが支援物資を集めているSNSを見て知りました。

――朝倉の活動を知った経緯を教えてください。

SNSで知ったと思います。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

「何かお手伝いできることがあれば」と思って行きました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

暑さであまり動けなかったので、意気消沈して帰った覚えがあります（笑）

――どのような活動をされたか教えてください。

浦塚さん（P.13）のお宅の窓拭きや宮地さん（P.16）のお宅の納屋の片付けをしました。

――作業で流木撤去をされましたか。

流木が酷かった畑の最終日の活動からお手伝いさせてもらったので、流木は撤去していません。

――その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

畑に大きな被害をもたらした流木が、再利用されることで生かされることはとても良いアイデアだと思いました。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

参加者のみんなが笑顔で迎えてくれることです。

――幡再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

夏の活動は日焼け止めを塗って日焼けして、会社の人にびっくりされました(笑)

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

情熱とかそんな大げさなものはないです。朝倉の方たちも幡再生も快く迎えてくれるので、それだけでうれしいです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

まわりの人に「ボランティア、えらいね」と言われるのですが、幡再は私の中でボランティアだけではないんです。同じ目的の人が集まって、汗を流し、一緒にご飯を食べ、しょうもないこと言って笑い合う。とても居心地が良い空間なんです。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

いままで通り、繋がりを大切に、楽しく学ぶ場所であってほしいです。

――読者に一言あればお願いします

朝倉で水害があって半年くらいは活動に参加していませんでした。仕事とアルバイトを掛け持ちしていて、行きたいんだけど、行けない理由を作って自分に言い訳していました。ある時、やっぱり行こうと思い立って行動してみたら、普通に時間を作って行けるようになったんです。

「なんだ、こんな簡単なことだったんだな」って。行動せずに、頭で考えてばかりでモヤモヤしていた時間がもったいなかった、と思いました。このときの私と同じような思いをしている人はきっとたくさんいるはずです。

「行動だけが現実！」実践してみてわかることがきっとあります！

「いろんなことが無限に広がる“大学”だと思っています」

井上竜典
福岡県出身
／福岡県在住
総合不動産業

東日本大震災以降、なにか自分でできないかと考えていた井上さん。
熊本地震で参加した南阿蘇での語りべで幡ヶ谷再生大学·復興再生部に、
南阿蘇RUNから本校陸上部との出会い、朝倉に、そして…。
繋がり、増えていく仲間、現場での日々を訊きました。

――2017年の災害（平成29年7月九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

災害が起こった７月５日の状況は、局所の大雨だったため同じ福岡県にいながら自分の地域は被害が少なかったんですよね。朝倉方面のみの被災内容をテレビで見たとき、少し受け入れ難かったです。

同じ福岡県でも「全然違うな」と天気の異常さに違和感と戸惑いを覚えていました。

２週間経った19日に初めて現地入りした道中の景色は、川沿いにある学校までの道が分断されていたり、道路のアスファルトのすべてが茶色で、車が通ると砂埃が舞っており、主要幹線の両側の歩道に水没した家具や泥が置いてある状況でした。

朝倉はもともと古い家屋が多く、のちに知りましたが山肌を切り開いて田畑を開墾し、住居を建て、次に主要幹線をつくっていったため自然と幹線道路周辺に水が来るようになっていたようです。

外壁も、どちらかというと昔ながらの土壁でしたので強烈な腐った匂いもあり、みんな夏の暑いなかマスクをして作業していたのを覚えています。

とにかくいたるところに、どこから流れてきたものかわからない流木やごみ・水没したものが一緒になっており、そのなかを通る車は軽トラックや災害派遣車両ばかりだったのも記憶にあります。

幹線道路より山側の状況を確認しに行ったときに、ようやくこの災害の甚大さを知りました…。農家の方たちの被害が深刻だったこと、それに対処することの難しさを活動で感じました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

友人が東北ライブハウス大作戦の上映会の手伝いをしていましたので、そこからですね。SNSで幡ヶ谷再生大学をフォローするようになりました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

熊本での活動（Hatasai Magazine Vol.7）に参加していたので、朝倉でも活動しようと考えていました。自然な成り行きになります。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

2011年3月11日の東日本大震災のときに、仕事で東北の建物調査や状況把握をしたこともあり「なにか自分でできないか」を考えていたなかで2016年の熊本地震が起きました。活動へ1人で踏み込めなかったときに幡ヶ谷再生大学復興再生部の熊本・南阿蘇の語りべ（Hatasai Magazine Vol.7 P.68）の参加募集を目にして、まず聞いてみようと思い、参加しました。



また、走って南阿蘇の現状を知るイベント「南阿蘇RUN」があったため、興味があり参加しました。南阿蘇の語りべは被災がひどかった箇所を回りながら南阿蘇に住んでいる方と一緒にほぼ家族のように接していた東海大学農学部の学生たちが当時の実体験をもとに話をしてくれました。

自分とは10歳以上も離れている学生が一生懸命自分の言葉で伝えている姿や、当時を思い出して泣いてしまった学生を目の当たりにして、さらに自分にはなにかできないかと考えていたことも覚えています。

そこで一緒に聞いた方々のお誘いもあり、活動に参加したいと思うようになりました。同時に幡ヶ谷再生大学には陸上部があることも知り、入部しようと思いました。

この南阿蘇語りべと南阿蘇RUNをきっかけに、陸上部では福岡支部や熊本支部とさまざまな支部が誕生し、ほとんどが復興再生部での活動を経験した方々で生まれた支部のため、「復興再生部＝陸上部」の関係で有事の際の情報共有がしやすくなったのも後になって気がつきました。

陸上部ができた理由も、知ったことも、入部する大きなきっかけでもあり、なんとなくですが自分のなかですべてが繋がった気がしました。

――初参加の活動・その時の感想を教えてください。

初参加は、南阿蘇で仮設住居周辺の草刈りだったと思います。初めてばかりだったのですが、仕事で上司から「すべてのことには意味がある」と教わっていたこともあり、「草刈りをしたらどうなるか」を考えながら作業していました。

途中からは夢中で草を刈っていたような気がします（笑）。この活動をきっかけに、軽トラックを運転するにあたりマニュアル車を運転するようになったのも驚きでした。「やろうとしたらできるもんだな」と。現地のみなさんは優しくて、活動後の話が楽しくて、活動が好きだった覚えがあります。

朝倉での初参加は、おばあちゃんが住んでいた古民家の中に入った土砂撤去と家財の片付けでした。夏の暑い時期で室内は湿気と匂いが充満しており、どこから手をつけていいかわからない状況でした。

そのときつらかったのは、おばあちゃんの元気がなかったことでした。捨てる判断を仰いでも半ば「全部捨ててください…」といったことが多かったので、気持ちの面で複雑になりました。

しかし片付けも終盤になるころには、おばあちゃんが次第に元気になっていくように感じられ、昔の自分の嫁入り道具に触れ、感慨深くなって当時のことを話してくれたり、笑顔が見られるようになってきたときはうれしかったです。

――朝倉でどのような活動をされたか教えてください。

災害当初は水没した民家の片付けと泥出しなどの復旧の手伝いでした。2017年の後半から梨・柿畑の土砂出し、流木撤去、被害の大きい箇所の確認などです。現在も続いています。

――撤去した流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

柿畑での土砂出しのときによく流木撤去をしました。冬の寒い時期はみんなでバリバリ動いて、体を冷やさないようにしながら作業していました。大きな流木はすぐ見てわかるのですが、土砂に混じった小さな流木や石があるおかげでなかなかスコップが入らず、撤去にとても苦戦していたのを覚えています。

本当に作業が進まなかったですね。ある日

は流木1つを取り出すだけの作業の日もありました。最初は経験がなかった分、気持ちが折れそうなときもありました。ですがみんなで試行錯誤して、少しずつですが撤去できた箇所をつくっていくことがモチベーションに繋がっていきましたし、なによりもいただいたご飯や星野さん（P.22）との話が大好きでした。

徐々に作業が進むにつれて、流木をチェーンソーやノコギリなどで切断して撤去するようになり、もうそのころにはみんながスコップの使い方が上手くなっていたような気がします(笑)

それでも直径1メートル以上の流木は何人もの人力で押して軽トラックに積んだり、細かく切断したりと、とにかく処理に困っていました。学長（TOSHI-LOW）が巨大な流木を1人で黙々と運んでいたときはみんな、びっくりしていましたね（笑）

『木札with a mission』の話を聞いたとき、自分は考えさせられました。作業をしているときはとにかく片付けて流木を撤去することしか考えていませんでした。「どこかで利用できるのではないか？」という考えがなかったので「まだまだだな…」と思いました…。木札のことは「東北ライブハウス大作戦」で知っていたのですぐに、「九州から東北へ何かできるやん！」とうれしい気持ちにもなり、さらに朝倉の木札を全国のみなさんに手に取ってもらえることで少しでも考えるきっかけになれる、と新しい光のようなものを感じました。

――作業を通じとくにうれしかったことを教えてください。

長く朝倉と接していくなかで、地元の方と生まれた結びつきがうれしかったです。作業後にご飯を用意して待っていてくださったり、流木を撤去した梨畑でできた梨をいただいたり、慰労会を開催してくださったり、もう感謝しきれないことをたくさんいただきました。お互いの思いやりというか「助けがえし」なのかな…、自分のなかにそんな思いと考えが生まれたのも大きかったです。

――活動に参加し、嫌な経験はありましたか教えてください。

いい大人が集まって作業するので、それぞれの経験や考え方があって深い話をしたりするときもありましたが、それが結果的に良い思い出だったりしています。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

一番のきっかけは、南阿蘇の語り部の学生たちの一生懸命さを目の当たりにしたときです。「何かしてあげたい」という思いが強くなり、自分の中では東北で自然の猛威を知り、熊本で出会って、朝倉で始まったように感じます。やっぱり「自分の地元は、地元の人間がやらんといかん！」という気持ちでいます。また、自分が住んでいる糸島市から朝倉市までは福岡市の中心部を通っていくので、同じように参加したい方がいても、移動手段の関係で「二の足を踏んでいたら一緒に拾って行ければな」と考えていました。

「仲間をどんどん増やせたら」と思っていたのが、継続して参加している理由だったのかもしれません。行きや帰りの道中でする会話がその日の反省だったり、好きな音楽の話だったり、仕事の話、次のライブは？など、ときには恋愛相談があったり（笑）、楽しい思い出ばかりですよ。そしていつしかできた幡再グルメも毎回楽しみだったりしてました(笑)。

それに地元の方に会いに行く感覚が好きでした。「現場を終わらす」という活動の感覚も好きでした。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する思いがあればお聞かせください。

よく活動で僕たちはいろんなことに対して「ありがとうございます」と言っています。幡再の活動は、本当に感謝することを経験できる場だと思います。

作業終わって地元の方に「ありがとう」と言っていただけますが、逆にほとんど僕らの方が「ありがとう」という気持ちにしかなりません。幡再の活動は思っている以上に自由だけど、気持ちはみんな一緒で「今日の作業は大変だ」というときもあれば、作業後にみんなで温泉へ行ったり、ぐでんぐでんに酔っ払って語るときもあったり、いろんなことが経験できる場でなんですよね（笑）

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

九州北部豪雨があってから、岡山県、広島県、愛媛県、大阪府、北海道と続けて災害が起こり、自分たちが経験したことで「助けたいな…」と思う人がいっぱいできて、いつしか「熊本自主練」から「九州自主練」に発展的改名をしました。

最近も「九州自主練」で去年の平成30年7月豪雨で被災した愛媛へ行って、朝倉で教えてもらった土嚢の作り方や作業の進め方、楽しみ方、ワイワイな雰囲気を持っていって現地の方に喜んでいただけたのはうれしかったですね。「また来ます」と約束したりできました。

これらには幡ヶ谷再生大学の陸上部の意味も大きいです。陸上部のできた理由は、「なにかあったときにすぐに駆けつけて、困っている人を助けられる体力をつけるため」と聞いています。

たまにサボったりしますが…（笑）。走りながら次の活動のことを考えたり、他の県に遊びに行ったときにその支部の陸上部の方と連絡して一緒に走りながら情報交換したりと、復興再生部とはまた少し違った、気持ちが同じ方たちが多いので楽しいですね。

さらに復興再生部で生まれた素晴らしい出会いが結婚に発展したり、みんなでお祝いしたりと気持ちひとつでいろんなことが無限に広がる“大学”だと思っています。

なによりも活動を経験してから見るBRAHMANのライブはすごく気持ちが入るんですよね。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

よく「人との繋がり」と聞きますが、本当にそうだと思います。

続けていくなかで、全国の幡再生と繋がるときがあります。全国から朝倉に来てくれたり、SNSで全国各地の仲間がいろいろな場所でいろいろな経験をしていることを知ることができます。だからこそ、幡再はずっとあり続けてほしいですね。

――読者に一言あればお願いします。

まさか自分がここまでやるとは思いもしませんでしたが、正月明けてすぐに希望を募って、幡ヶ谷再生大学で重機講習を受けて小型重機の免許を取得しました。これにより一気に安全に対する意識もできた気がします。

講習していただいた日立建機さんも、わざわざ朝倉まで来ていただいて主旨に賛同してくださったのもうれしかったですね。

参加してみると、今まで自分が良い意味で変わっていく感じもしています。とにかく、九州は楽しいですよ！ まだまだ南阿蘇や朝倉、ほかの場所でも継続していきたいです。いつでも新しい仲間を待っています。

そして、ぜひ愛媛県の現場にも行ってみてください！ 観光するとこもいっぱいありますし、なによりめちゃくちゃ美味いみかんジュースが飲めます（笑）

冗談はさておき…現場は行ってみなきゃわからない。自分が実際に行動してみて、この言葉の意味がすごく身に沁みています。

「『気高く生きる道』を選択しただけです」

行徳保宏
福岡県出身
／福岡県在住
運送業

職場の同僚の紹介で幡ヶ谷再生大学を知り、
「朝倉市には縁と親しみがあった」と話す行徳さん。
活動への参加動機、活動を通じて感じたことを訊きました。

――2017年の災害（平成27年7月九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

とにかく土砂がすごく、流された家や車があり得ない場所にあったりしていました。あの光景には唖然とさせられました。道もなくなり被災地に辿り着くのが困難な場所もありました。

災害のひどい場所では大雨で川が氾濫した様子を「山が流れてきた」と表現する被災者もいました。優先順位もわからず毎週ただただ通っていました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

同僚から幡再も教えていただき、朝倉での活動もその彼に聞きました。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

当時、社協ボランティアに参加しており、同僚からの誘いもありましたが、両親の実家も近く親戚もおり、昔の職場も近く、朝倉市に縁があり親しみを感じている街であったことが大きかったです。

ユカリさんを筆頭に地域密着型の活動に共感できたことですね。

――初参加のときの感慨を教えてください。

初参加ときは一軒家の土砂出しでした。家の中は年配の方が寝る場所もないような状況でしたが、作業しながら「これでは住むのは無理だろっ！？」と思っていました。ですが、皆の力で土砂出しが進んでゆきさまざまな知識、知恵、行動に心を打たれました。

――どのような活動をされたか教えてください。

土砂出し、土嚢作り、流木撤去、石拾い、整地…コミュニケーションになりますかね。

――流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

遠くて活動に参加できなかった方々にも木札を通じて繋がっていく喜びを覚えました。

――作業を通じ、とくに嬉しかった想いがあればお聞かせください。

最初はなかった作業道具がどんどん増えていき、しまいには重機まで取り入れ支援をいただき重機（小型車両系）免許取得に至ったこと。人の繋がり、温かさ、同じ釜の飯を食べたことです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

とくにないですね。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

『気高く生きる道』を選択しただけです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

たとえば地方からたくさんの方々が参加されても、新しく参加される方がいても受け入れ体制ができているこの温かい場が大好きです。すべての人が公平で利益を目的としている人がいないこと、たくさんの方々が知識と知恵を振り絞って、向上心をもって被災者の援護に携わることに共感します。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

Twitterで現場の進捗状況やランチのメニューを共有していってほしいですね。今後も無理なく、自分のペースで携われる現場活動が大好きですので、今後も継続していってほしいです。

――読者に一言あればお願いします。

皆さまの行動力で助け合う、絆、繋がりを学ばせていただきました。

『今日は人の身、明日は我が身!!』



「こうやって繋がっていくんだ…と実感しました」

川戸あゆみ
福岡県出身
／福岡県在住
会社員

2011年から幡ヶ谷再生大学の活動を知り、
2016年に熊本での活動から現在まで参加し続ける川戸さん。
父から教えられたボランティアとしての「姿勢」。活動を通じ、
幡再生や被災された方から教えられた“もの”を訊きました。

――2017年の災害直後の状況を教えてください。

九州北部豪雨の時は、我が家はなにも被害はなかったのですが、私の住んでいる地域でも浸水したエリアがありました。後輩の家が浸水してしまい、家に帰れない状況で「避難している」と聞き、「なにか困ったらすぐ動くから！」と連絡したのを覚えています。ニュースで朝倉の映像を見て、言葉にならなかったのを覚えています。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2011年の東日本大震災の時にTwitterで知りました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

2017年5月に南阿蘇で初めて参加し、その2カ月後に九州北部豪雨があり…募集があればできる限り参加するつもりでいました。

――幡再の活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

東日本大震災の時に、募金やNBC大作戦（http://www.straightup-rec.com/nbc-format2.html）に物資を送ったりしかできない自分がいました。その頃からずっと「活動に参加したい」という気持ちがありました。幡再の活動に対する募集はTwitterでよく流れて来ていたのですが、「自分が行って役に立つのかな」と思っていました。むしろ、邪魔ではないのかと。

しかし、そんなことを悩んでいる暇もないくらい南阿蘇の山口旅館さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.14）の活動の募集のときの投稿は、文面から緊急で人手がいるのが伝わってきましたので、会社の先輩に声をかけて参加しました。

先輩も私と同じ気持ちで、ずっと「活動に参加したい」と思っていたようで、意気投合したのを覚えています。

――初参加のときの感慨を教えてください。

初参加は南阿蘇の山口旅館さんでした。全面通行止めの道がGW中だけ通ることができるとのことでして、その間に旅館の片付けをしないと9月まで立ち入りできなくなるとのことで「これは緊急だ！」と思い、参加しました。

山口旅館さんは立派な旅館で、迷子になりそうなくらい広かったです（笑）。参加者も多かったので各部屋にある荷物を片付けたり、家具を拭きあげたり、不要になった荷物をトラックに乗せて運んだりしました。

旅館の部屋の中でも床が抜けてしまったり、土壁が崩れていたり…と危険な場所が多々ありました。片付けと言っても、まだ使えそうなものは旅館主の山口さんに一つひとつ確認して作業を進めたのを覚えています。

――朝倉ではどのような活動をされたか教えてください。

朝倉に初めて入ったときは、川沿いの土砂の片付けと並行して近所のお宅のお庭の片付けをしました。平日で参加者も少なかったのですが、大阪からファンダンゴの村上さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.78）たちも参加していたので、頼もしかったです。女性の私たちだけでは不安でしたので、本当に頼りにしてました（笑）

土砂の中から泥まみれの写真やお年玉袋とか出てきたので、困っていたらちょうど区長さん（P.24）がいらしたので、区長さんから持ち主に渡してくれることになりました。「なんでこんなところに？」と思う場所に物干しスタンドがあったりして、こんな重たいものやみんなの思い出まで、「こんなにいとも簡単に流してしまうのか…」と胸を締めつけられる思いでした。

星野さん（P.22）の柿畑に行ったときに、柿の木に絡みついた木っ端や流木の撤去をしました。自分よりも大きくて、太い流木が数えきれないくらい流れ込んでいました。人の手では簡単に動かせないくらい入り込んでいましたので木っ端を取り除き、大木の根っこにたどり着くのが大変でした。

チェーンソーの刃ですらも苦戦する大木もありました。少しずつ流木がなくなっていく姿を見ていくと、やめどきがわからず、予定時刻を過ぎてもやっていたような日も多々ありました（笑）

――その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

想像を絶するほどの流木の量でしたから、薪にしたり現地に取りに来ることができる方に無料でお渡ししたりしていました。処分するにはもったいないなと思っていましたので、「木札」として新しいカタチで使われるのはとても良いと思いました。

仙台の友だちが、私が関わった朝倉の木札に「名前を書いたよ」と連絡をもらった時はこうやって繋がっていくんだ…と実感しました。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

朝倉の活動でとてもお世話になった浦塚のおばちゃん（P.13）の言葉ですね。「水（九州北部豪雨）は憎いけど、こうやってあなたたちと出会えた。あれがなかったら、こんな繋がりはできなかったからね」とか「幡再さんはこうやって継続して活動してくれるからありがたいのよ」と言ってもらえたことです。星野さんのところでは、お父さんとお母さんにいつも良くしていただき感謝しています。

当時中学生で活動に参加していた姪っ子の高校合格を、ユカリさんをはじめ朝倉の方々や幡再生のみなさんに自分のことのように喜んでくれたこともうれしかったですね。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌な経験というものはなかったですね。免許があるのにペーパードライバーの自分が「使えないなー」と嫌になることはありましたが（笑）



――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

最初は、あの流木が「1本でも早くなくなればいいな」という思いだけでした。作業を重ねるごとに本来の柿畑の姿が見えた時はうれしかったです。

あとは、予定のない休みの日に家にいるよりは朝倉へ行けば誰かに会えるし、誰かのお役に立てればと思い、参加していました。仕事が忙しくてなかなか通えなく、久しぶりに参加しても、みんなが「久しぶり！」と温かく迎えてくれるのが理由なのかもしれません。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

ボランティアに初めて参加するとき、父に「ボランティアに行くなら、全部自己責任だ。間違っても『ボランティアに来てやった』とは絶対に思うなよ。ボランティア活動をさせてもらっているのだから」と、きびしく言われました。

わかっていたつもりでしたが、現地へ行ってこの言葉の意味が深く突き刺さりました。最初に参加したボランティアが幡再で良かったなと思いました。いろんな経験をして、たくさんの人に出会い、ときには誰かのためにと思っていたのに、自分が救われることもありました。

それはユカリさんが現地へ足繁く通い、被災者さんの気持ちに寄り添って想いを汲み取り、活動場所を見つけてきてくれるからだと思います。ユカリさんとお話しするだけで、いつもなにか学びをいただいています。この場を借りて「ありがとうございます」と御礼を言いたいです。

その想いを受け継いで、自主練で動いている幡再生のみなさまの行動力はいつも「すごいなぁ」と頭が下がる思いでいます。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

これからも継続して活動していただきたいですし、可能な限りは参加させてください!!

――読者に一言あればお願いします。

「ボランティアに参加したい気持ちがあるけど、募金とかしかできなくて申し訳ない」と言ってくれる友だちがいるんですが、それはそれですでに行動できていることですし、素晴らしいと思っています。

ボランティアは体を動かすことがメインだと思っていたのですが、現地へ行って被災者の方とお話するだけでもいいんです。その人にしかできないことがあると思います。学長も「やらない理由を考えるより、やる理由を考えた方が楽しい」と言っていたのですが、まさにその通りだと思います。

あと「浦塚のおばちゃんも大変なときなのに『人のためにいろいろと動くのはなんで？』」と聞いたら「誰かが動き出すことで、自分も頑張ろうって思ってもらいたいの！」と言っていました。

こんな素敵な方に出会える幡再が大好きです。みなさんにもこんな素敵な人たちに出会ってほしいなと思います！

「『何か力になれれば』と奮い立った理由なのかも…」

上森 仁
福岡県出身
／福岡県在住
自動車製造業

福岡県から足繁く熊本県での幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、朝倉では災害直後に朝倉の現場に入り活動を続ける上森さん。幡ヶ谷再生大学が2018年1月に開催した小型車両系建設機械講習会よりも先に重機の資格を取得した理由とは…。幡再の復興再生部員として、陸上部員として歩みつづける日々を訊きました。

――2017年の災害直後の状況を教えてください。

初めて朝倉に入ったのは災害後10日後くらいでした。見渡すかぎり茶色の世界で車が通るたび砂埃が舞っていました。

高速バスから降りて、集合場所まで歩いていると小学校校舎の地盤が削られて、今にも崩れ落ちそうになっている状況に衝撃を受けました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

BRAHMANを追いかけていたので2011年

以降、存在は知っていました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

2016年の熊本での活動に参加してからは、自ずと知るようになっていました。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

仕事やプライベートが落ち着き、「何かないか」と探していたときに思いつきで参加させていただきました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

初参加は熊本のはら農研塾（Hatasai Magazine Vol.7 P.82）でした。野原健史さん（以下、健史さん）からのさまざまな言葉をいただき、人柄に惚れました。「また来たい！」と素直に思えて、定期的に活動に参加しようと思いました。

――どのような活動をされたか教えてください。

熊本では健史さんのところや、南阿蘇の草刈りのお手伝いです。朝倉では梨畑や柿畑、山が崩れて民家に流れ込んだ土砂の掻き出し、家屋の床下土砂出しの乾燥消毒…流木の撤去などたくさんあります。

――撤去した流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

福岡のニュースではスモークチップなどにすると報道されていましたけど、量が量だったのでユカリさんが考えた末にこのような形で繋がりができてうれしかったです。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

一緒に作業する幡再生はもちろん、現地の方や子どもたちと繋がりができたことです。僕は陸上部でもあるので、作業が早く終わった日に「朝倉を走る！」となったときに小学二年生と5歳の子が自転車でついてきたときは凄く楽しかったです。

ただ子どもたちへの熱中症など自分の配慮の無さもあり、申し訳ないことをしましたが、子どもたちとの交流も深まり、凄く良い思い出になっています。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌な経験とはニュアンスが違うのかもしれませんが、悲しかったのは被災したおじいちゃんとおばあちゃんが疲労や心労（？）で「入院した」と聞いたときですね。比良松地区の宮地さん（P.00）は黒川地区で重機のオペレーターで手伝ってくれて…不甲斐なさというか申し訳ない気持ちがこみ上げ、幡再で重機講習がある前に自分で調べて資格を取りに行きました。

――どのような心境で重機講習に行こうと思われたのでしょうか。

活動を通じ「重機があったら作業が捗（はかど）るのに」という場面が多々ありました。その都度、南阿蘇から助っ人で辰弥さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.19）だったり、宮地さんなどあと数名しか乗れない状況で「素人の自分が資格を取得したら面白いな」と思い、取得しに行きました（笑）

――凄いですね（笑）資格を取得してから心境の変化はあったのでしょうか。

重機乗っているときは、安全面をすごく気にしました。作業が捗る分、危険も同時に伴うので安全を第一に考えていました。やはり、事故や怪我してからでは遅いのですので…。

――資格もそうですが、その情熱はどのようなものでしょうか。

生きる力をとても感じることなんだと思います。

印象に残っているのが、90歳過ぎのおばあちゃんが自宅倉庫横でやっていた家庭菜園の土砂や石を出した後にユカリさんの手を力一杯握って「ありがとうございました」とおっしゃっていたとき、「何か力になれれば」と奮い立ったのが理由なのかもしれません。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

幡再での活動は、他の団体とは違い継続してその現場に入り、終わるまで続けます。自ずとその現地の方とも距離が近くなるので、仲良くなって今では定期的にキャンプやBBQをしたりする仲になりました。

自分のペースで疲れたら休む。休憩中は持ち寄ったり、いただいたお茶や菓子を囲んでダラっと休憩。そんな場を作ってくれたユカリさん、幡再には僕の方からも感謝の気持ちでいっぱいです。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

これからも地域の方に寄り添って、遊び心を忘れずに人間復興、被災地支援を続けている場であってほしいです。

――読者に一言あればお願いします。

僕は、幡再を遊び場だと思っています。本気で「ボランティアをしたいんだ」と考えているようでしたら、社協や他にもさまざまな団体があると思います。その中で自分が何を感じて思うのか。

すべてが経験値となり、未来へ繋がっていく。近年、災害が畳み掛けるようにやってきていますよね？ 現在は愛媛県や岡山県・真備など活動を続けています。朝倉、熊本も人力でできることはあらかた終わったかなと思います。

復興のその先、何をもって再生となるのか？そういう段階かと思います。何かあった時にいち早く行動できるか。まずは一歩踏み出す勇気。そこには仲間や現地の方たちが温かく迎えてくれます。 百聞は一見にしかず。現地、現場へ足を運んでもらい自分の目で見てもらいたいです。



『「何かやれるんじゃないか」と感じたら、積極的に行動してほしいですね』

植田秀俊
福岡県出身
／福岡県在住
無職

福岡県に住みながら常総（茨城県）、
各地の幡再出展、朝倉にも足を運ぶ植田さん。
幡再の活動への改善点、今後、深刻な社会問題として挙げられている
「高齢化社会」への提言を訊きました。



――2017年の災害（平成29年九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

私は福岡県在住ですが、被災はしていない地域でした。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

常総（Hatasai Magazine Vol.6）での活動がきっかけでした。2011年の東日本大震災で常総に住んでいた先輩を助けに行っており、はっちゃん（服部さん：サポウィズ／Japan Hope）と知り合い、Tシャツ工場に行ったのが最初だったと思います。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

朝倉の前に熊本（Hatasai Magazine Vol.7）がありましたよね？ 行こうと思っていた日が雨天中止になったりしてタイミングが合わなかったんです。今回の朝倉もタイミングさえ合えばいこうとは思っていました。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

歳も歳だし、時間がある身ですからね。どこかの活動でユカリさんに誘われたのが一番大きかったですね。

――朝倉での活動の初参加のときの感慨を教えてください。

私はずっと社協の活動に行っていたのですが、「時間が長いなぁ」と思いましたね（笑）

――どのような活動をされたか教えてください。

黒川（地区）での土砂出しが中心でしたね。ある程度、目処がついてから流木の撤去でしたね。

――その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

「すごい利用方法もあるんだな」と関心しましたね。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

昼に美味しいごはんが食べられることですかね（笑）

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

作業時間は長くはないのですが、終わったあと、皆で会話を楽しみますよね。年齢的なものもあり、時間が長いと体に堪えます。私は現在70歳なのですが、同世代がいないのもあり、少しキツイときがあります。

皆で笑い話をしたりして、それも楽しい時間ではあるのですが、もっとメリハリをつけたら良いように感じますね。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

「情熱」というほどのものでもないですよ。なんだろ？ 高齢者の引きこもり解消ですかね（笑）

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

活動される方のほとんどが音楽で結ばれていますよね？ 私は違うけど、他人同士が活動を通じて和気あいあいとなれる仲になり、楽しくやっているのは凄いことだと思います。人間、何かしらの共通点があるのは良いことですね。

今後も定期的にやってくれたら、我々世代の引きこもり解消にはなるのかなと思います（笑）

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

私からの提案なのですが、1カ月単位でスケジュールを立ててもらえると助かります。皆さん、仕事をお持ちなので厳しいでしょうけど…。

私の場合、幡再の活動は福岡から高速道路を使わずに車中泊をしながら行くので、活動は連続して3日以上やってもらえるとうれしいです。

――読者に一言あればお願いします。

我々世代にも若い世代にも言えることですが、「何かやれるんじゃないか」と感じたら、積極的に行動してほしいですね。行かないうちから「行っても迷惑になるんじゃないか」と考える心配をしなくていいと思います。

現場に行って、自分で判断してほしいですね。行く前から自分で判断しないでほしいです。我々世代の方々には、そういう「空気感」を感じてほしい。「作業はできないけど…」と考えるなら、状況を見るだけでもいいんじゃないかな。

現場へ行くとたくさんの繋がりができるんですよ。それは幡再じゃなくても、良いと思います。

熊本地震のとき、社協で繋がった仲間たちと今度飲むんですよ。昨年も飲みました。現場で知り合った仲間はそれだけで強い繋がりができ、仲間ができるものだと思います。

岡山県にもそういう仲間がいるから、幡再の活動のついでに会いに行こうかと思っています。

我々世代がこの冊子を読んで「老後はヒマだなぁ」と考えている人がいれば、ぜひ現場へ行ってほしいと思います。



幡ヶ谷再生大学
HATAGAYA REISEIKA UNIVERSITY







幡ヶ谷再生大学

















「生きづらいな」って感じていたら、「幡再に来てほしいな」

N（匿名）
福岡県出身
／福岡県在住
高校生

福岡県朝倉での活動で幡ヶ谷再生大学を知ったNさん。
当時中学生だった彼女は頻繁に活動に顔を出し、
幡再の中に自分の居場所を見つけたようです。
現在は元気に高校に通う彼女が想う「幡再」を訊きました。

――2017年の災害（平成29年九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

被害の様子をテレビで見て、ボランティアに参加したいと思っていました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

おばが、熊本県・南阿蘇での活動に参加していて「ボランティアに行きたい」と伝えたら、その活動が幡ヶ谷再生大学のものだと教えてくれたのがきっかけでした。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

「朝倉へボランティアに行きたい」と伝えたら、おばが「幡再が朝倉で活動している」と教えてくれました。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

朝倉が近いから、という理由だけでした。おじいちゃんを誘ってお願いして、連れていってもらいました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

当時は中学生だったんですけど、役に立てるかわからなくて、邪魔になりそうと思っていました。ですが、自然と作業が自分のところにもまわってきて、一日中作業して、めっちゃ疲れたのを覚えています（笑）

――どのような活動をされたか教えてください。

畑の泥出しや農作業でした。流木を運んでもらい、運ばれてきた流木を洗う作業もやりました。ブースの出展では幡再の物販の手伝いもやらせていただきました。

――作業した流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。（P.118）

最初、「東北ライブハウス大作戦」がどういう活動なのか全然わかりませんでした。福岡でMONOEYES（Hatasai Magazine Vol.7 P.117）のLIVEがあったときにユカリさんに誘っていただき、木札の受付をさせてもらったときに活動内容を知り「九州と東北がこういう風に繋がっているんだ」と知ったときに「すごいな、こんな繋がり方があるんだな」と思いました。

やっぱり、流木が“マイナス”にならずに使われていることが一番うれしかったです。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

星野さん（P.22）に「ありがとう」と言ってもらったり、作業をするにつれて出会ったみんなと家族みたいな関係になれたことです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

とくにありません。

――ときに学校には行かず、複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

学校が嫌いになった頃、幡再に出会い、幡再に参加するのが大好きになっていました。学校に行かない日は、学校よりも好きな幡再を選んで平日でも参加していました。

うまくは言い表せないですけど、情熱というよりもただ楽しくて落ち着けたから行っていました。ちょっと悪い方法ですけど、楽しい中学生時代を過ごせました…（笑）

――2019年4月から高校生です。どのような心持ちでしょうか。

中学時代は自由にさせてもらったので、高校へは毎日ちゃんと登校しようと思っています。幡再へ参加できる日が減るのが一番嫌ですけど、自分で居場所を作らず逃げていた中学時代はもっと好きじゃないので、いろいろと頑張っていこうと思っています（笑）

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

幡再は“私の居場所”になっていて、「活動に参加したい」と思うのは朝倉の方や幡再のみんなに会いたいから参加していました。

「こんな気持ちで大丈夫なのか？」と思うこともありますが、いつも「またおいで」と言ってくれる人がたくさんいるので、感謝しかないです。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

このまま、ずっと幡再があり続けてほしいです。

――読者に一言あればお願いします。

私は中学時代のほぼ半分が「幡再で過ごしました」と言っていいほど、幡再が自分の居場所になっていました。もし、これを読んでいる人で「生きづらいな」と感じていたら、「幡再に来てほしいな」と思います。





「狭い世界から視野が大きく広がりました」

黒田憲治
熊本県出身
／大分県在住
看護師

ボラティアに対し「偽善者」というイメージが強かったという黒田さん。
そんな彼が足を運ぶようになったきっかけ、
そして現場でのさまざまな体験。活動を通じ自身が感じたこと、
現地への想いを率直に語ってもらいました。

――2017年の災害（九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

当日は勤務でした。帰りに道路が冠水し、いつもは10分もかからずに帰れるはずが交通規制等で30分以上かけて帰ったのを覚えています。同僚が一番被害のひどかった日田市の小野地区で、家が流されヘリコプターで救助されました。

こんなにも身近な場所が災害に遭うとは思いもしなかったので、驚きとショックだったのを覚えています。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

若いころバンドをしており、BRAHMANのコピーバンドをしていたことがあるぐらい好きでした。TOSHI-LOWさんが松葉杖でフラフラになりながらライブしていたころから好きで、今もBRAHMANのファンです。

東北の2011.3.11のとき、同じ日本で起きているとは思えないぐらいの衝撃を受け、何もできなかった自分がいました。熊本の2016.4.16のときは故郷ということもあり、「自分にも何かできないか」とボランティアのことを調べているときに幡ヶ谷再生大学を知り、その学長がTOSHI-LOWさんということで興味を持ったのがきっかけです。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

そんな流れで幡ヶ谷再生大学を知り、2017.7の九州北部豪雨被害時にはすぐに幡再のホームページを見ていました。幡再の募集を見て「今行かないでどうする！」とすぐに活動に参加しました。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

私はもともとボランティアに興味がある人間ではなく、どちらかと言えば「偽善者」というイメージが強くありました。なのに、なぜボランティアに参加しようと思ったかというと、妻の存在が一番大きかったです。

大分県出身の妻は阪神淡路大震災のとき、医療ボランティアとして約1カ月間、現地の方たちと寝食を共にしたと聞きました。そのときの苦悩やもどかしさ、阪神から大分へ帰ったときの生活のギャップに苛まれ、一緒に現地入りしていた友人はPTSD（心的外傷後ストレス障害）になったと聞いていました。

そのことを聞き、当時のことを想像するだけで涙が出たのを覚えています。そしてその妻と一緒になり、今回の九州北部豪雨被害が起きました。妻の体験と話がなければ、私はボランティアの概念は固定されたままでしたし、すぐに行動に移そうと思ったのも妻の後押しがあったからでした。

――初参加のときの感慨を教えてください。

朝倉への初参加は2017.7.15でした。梅雨が終わり、夏が始まる頃のあの日差しが照りつけ、目眩（めまい）がしそうなほど暑い日に、比良松の386号線沿いの一軒家（満生さんP.26宅）の泥出しに参加させていただきました。災害が起きて9日目でした。

いろんなものを運んできたであろう泥の臭いと、家具や畳の腐敗臭とも違う生臭さの残る状況下での作業でした。はじめてのボランティアで、使命感で暑さも忘れるぐらいあっという間に初日が終わったのを覚えています。

その中で、7月5日から6日にかけて降った1日の豪雨でこのような状況になり、自分の家具や衣類でさえもどうでもいいような感情が伝わるほど、何から手をつけていいのかわからず気持ちの整理ができない、今後住む家も先も見えない喪失感とも似た茫然自失である住民の方の表情が何とも印象的でした。

――どのような活動をされたか教えてください。

初日から回数を重ねるたびに泥出しを行う場所が変わって行きました。暑い季節から寒さが肌にまとわりつく季節に移り変わり、場所が変わるたびに被害の大きさに驚きました。

黒川地区で亡くなられた方の現場まで赴き、皆で手を合わせに行くなどして現地の方と当時のことを話したり聞いたりして、そのときの気持ちや状況を聞くことができました。そのことを他県から現場に来た同志たちに伝えていくことも、この災害を忘れないようにする活動のひとつだと捉えて動いていきました。泥出しとともに黒川地区の鳥巣さんの田んぼ、星野さん(P.22)の柿畑の流木をチェーンソーで時間をかけて少しずつ撤去していきました。そのときから星野さんからは行くたびに「黒ちゃん」と可愛がってもらい、ユンボの講習以降からは流木の撤去と泥出しにパワーが出てきていました。

一番覚えているのは、12月の柿畑の土が寒さで凍りつく時期に、少ない人数で「あーでもないこーでもない」と流木の大きさと量に戸惑いながら、怪我もなく皆で吐息が熱を帯びるほど力を合わせて撤去しきったことを昨日のことのように覚えています。

黒川地区に入っている時期から、ユカリさんが「この流木もったいないよね」「何かに使えないかな」と話していたのも覚えています。他のメンバーからはそのまま椅子やテーブルにしようなどの意見もありました。

しかし、一人一人がこの災害を忘れないように目で見て触って感じることができるよう手元に残る木札のことを話しました。そこで“行動の鬼”であるユカリさんは「すぐに形にしたい」という話になり、試供品として一個一個サイズを調整しながら作ったのを覚えています。

――木札with a missionとして「東北ライブハウス大作戦」の木札や幡再の出展ブースでの木札ワークショップになったことを知ったときの気持ちを教えてください。

現地入りした皆の力で流木が木札になり、朝倉のことを思い返すことのできる宝物になりました。自然の猛威は止められない。人間は「自然と共に生きているんだ」と感じさせてくれた、この宝物と大作戦は、皆の気持ちがこもったついぞ見ない幡再の功績だと思います。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

2018.1.13～1.14に行われた「小型車両系建設機械講習」に参加させてもらったことです。このとき私の人生の師匠であるTOSHI-LOWさんにお会いでき、激励されたことが一番嬉しかったです。

学長から講習終了の際、免許証を受けとるときに免許証の顔写真を見て「この顔なんだよ」とイジッてもらい、あまりの嬉しさにニヤニヤして終わるというなんとも嬉し恥ずかしな思い出になりました。

あと、その日は極寒であったにも関わらず、私たちのために昼食の準備までしていただきました。昼食中も「これ食べな～」「いっぱい食べな～」と声かけていただきましたが、なんかお母さんみたいだなぁと思いながらも、またまたニヤニヤしながら食べたのもすごく良い思い出になっています。

また、MAN WITH A MISSIONの田中センパイ（＝トーキョータナカ：Hatasai Magazine Vol.6 P.34）にもお会いでき、あのユンボの腕前を目の前で見ることができてすごく感動しました！ そこから田中センパイを密かに「狼ユンボセンパイ」だと思って見させてもらっております（笑）

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌な経験は何ひとつありません！ ユカリさんに出会い、思いを行動に変える力は私の人生の中でも大きな機転となりました。10代の頃から看護の勉強しかしてこなかった私は、幡再の活動に参加し狭い世界から視野が大きく広がりました。

ボランティアで繋がる人と人との関わりは、SNSやネットでの繋がりとはまったく違うものだと思いますし、連絡を取らなくてもあの人来ているだろうなぁと思った場所には「繋がった人」がいるものですからね。

令和となった年に、ツールを使わずに出会えるなんて思ってもみなかったし、それが「繋がり」なんだと肌で感じている日々です。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなのでしょうか。

ボランティアは行った回数ではないと思っています。一回でも行動に移して現地に来てくれて、目で見て肌で感じて話をして繋がって帰っていく。そしてそこで感じたことを帰ったところで伝えていく。

そうやってできているのが幡再だと思いますし、幡再でなければ経験できないことだと思っています。

現地に行けなくても募金だけでもいい。私はよく妻と、「体力と行動力があれば現地に行けばいい」「行きたいけど体力の問題や距離の問題もある、だったらお金に余裕があれば募金だけでもいい」いずれにせよ、そこには意識があってどうにかしたいと思ってくれている。

どの方法を取っても「バカにされることではない！」と話しています。妻はあまり体が強くないため、その気持ちを担いで現場に来ています。情熱と言ってしまえば聞こえはいいかもしれませんが、活動に賛同し参加する人には一人ひとりの意志がある。それが「情熱」なのではないかと思います。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

TOSHI-LOWさんが「日本で災害はなくならない」「災害が起きたとき、いかに助け合えるかが大事」と南阿蘇大復興祭で話しているのを聞きました。私は看護師で、大分県の日田という僻地にいます。

TOSHI-LOWさんが話してくれた「助け合いが大事」という言葉は、私たち医療者も一緒です。いかに最悪な状況を想定し、知識と技術を備えるかが大切です。しかし、危機感を持つことの意味を深いところで理解できたのも、この活動を通してだと思っています。この学長の言葉を胸に、日々生活し活動している仲間がいることは誇らしいです。この活動がなくならないように一人ひとりの健康と意識と行動が大事だと思うので、学長をはじめユカリさん、活動を支える皆さんが1日でも長く健康でいられるように願うばかりです。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

幡ヶ谷再生大学生として気高く生きる道を選択し続けたいと思います！

幡再にはいろいろな学部があります。その部が一つも欠けてほしくないですし、このまま変わらず歩みを強めて行ってほしいと思います。

――読者に一言あればお願いします。

私が皆さまに一言などおこがましいですが、私の感じたことやその時の想ったことを語らせていただきました。やはり「現場へ来てほしい」というのが本音です。しかし、一個人の意見と意志を通して何かを考え、感じていただけたらうれしい限りです。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

「現場に行くことが自分のためでもありました」

松村早苗
山口県出身
／福岡県在住
介護福祉士

2011年から幡ヶ谷再生大学の活動を応援しつづけ、
現在住む福岡県内で発生した災害に「見ている側」ではなく
「活動する側」になった松村さん。
「活動へ行こう」と思い立ったきっかけ、
実際に現場に立ち感じたことを訊きました。

――2017年の災害（平成29年7月九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

5日の朝に実家のある山口県に帰省していたんです。大雨になると天気予報では見ていたんですけど、台風も過ぎているし「まぁ大丈夫だろう」と思っていました。実家に着いてからはどんどん悪化していく状況をテレビやTwitterで情報を追っていました。それから各地で災害が発生していきました。



――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

Twitterです。2011年に東北で活動しているときからずっとフォローしていました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

こちらもTwitterです。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

熊本地震から1年が経ち、2017年4月にKieth Flack で「Radio 7 presents RISE AGAIN Vol'2 同時開催 ～石井麻木 PHOTO EXHIBITION～」が開催されたとき、福岡の幡再生に活動の話を聞くことができたんです。とても貴重な日でした。

それから少し経って7月の片平里菜ちゃん（Hatasai Magazine Vol.5 P.20）とOAU（BRAHMANのメンバー4人を含むアコースティックバンド）の2マンツアーで東海大学の学生さんやのはら農研塾の方（Hatasai Magazine Vol.7 P.82）と九州の幡再生がワイワイ話しているのを見ていました。

単純に雰囲気が良くて楽しそうで「行ってみたいな」と思い、「とにかく行ってみよう」と思って応募のことや交通手段のことを相談しました。九州北部豪雨災害が発生したのはその日から3日後でした。

朝倉での活動募集があって、直近で行ける7月16日(日)九州豪雨・福岡県朝倉市第7回に参加しました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

朝倉に向かう車中から流木や土砂で荒れてしまった田畑が見えてきたときに愕然としたのを覚えています。比良松中学校はもちろんですが、最初に行った満生さん宅（P.26）も土砂と浸水で悲惨な状態で衝撃的でした。ここでは荷物の仕分けと掃除、倉庫の片付けと土砂出しをしましたが、カビの匂いや染みついた悪臭もすごかったです。また、浦塚さん（P.13）に災害時の話を聞くこともできました。

そして何より、ユカリさんを筆頭に参加しているみんなが前向きで、声をかけあってチームワークが良くて、活気があって…思っていたとおり楽しかったです。「どんなところであっても、現場が一番楽しいと思う」というユカリさんの言葉通りだな、と感じました。

――どのような活動をされたか教えてください。

ほとんどの現場の作業に参加しましたが、いずれも土砂出しがメインでした。星野さん（P.22）の柿畑では流れ込んだ流木の撤去などもしました。

――その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

「流木が木札になる」と聞いたときはうれしかったです。後日、幡再のロゴと九州北部豪雨災害 朝倉流木使用材という刻印が入った木札を見たときは感動でした。たくさんの人に「朝倉のことを知ってもらって支援してもらえるといいな」と思いました。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

作業に行ったお宅のご家族がいつも温かく迎えてくれることや人と人との繋がりができていったことです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

とくにありません。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

私は平日に参加できる機会が多かったのですが、なかなか人も集まらないという状況のなかで仕事前だろうと仕事後だろうと「1時間だけでも」と作業に来ている幡再生たちの情熱に感化されたというか…。

私も「手が空いているなら行こう」と思い、都合がつけば参加するようになりました。たった2人でも3人でもできることをして、次回の活動へ繋げて…それを繰り返して1現場ずつ作業納めして、次の現場へと進んでいくのがモチベーションでした。

それと、みんなに会うと気持ちが「すぅーっ」とするんです。現場に行くことが自分のためでもありました。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

活動に参加することで自助と互助の大切さ、繋がることの大切さを実感できました。心の底から幡ヶ谷再生大学との出会いと関われていることを幸せに思っています。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

これからもずっと、誰からも『頼れる』存在としてあり続けてほしいなと思います。

――読者に一言あればお願いします。

この冊子をほかの誰でもいいので手渡して読んでもらってください。よろしくお願いします。

「同じ想いを持った幡再生と繋がることが財産になっている」

荒川寛幸
福岡県出身
／茨城県在住
自衛官

夫婦で足繁く“幡再”に接するものの、奥さまは幡ヶ谷再生大学の出展ブースへ、
自身は生まれ故郷での活動へ参加…と、
夫婦そろって同じ現場に参加できることは仕事柄めったにありません。
荒川さんは活動中に防災士の資格も取得し、
技術や知識だけでなく思いやりや配慮、ていねいな言葉選びなど、
仲間や地元の方からの信頼を集めています。
福岡県で生まれ育ち、現在は茨城県に住む荒川さんに朝倉で感じたこと、
幡再の活動を「恩返し」と話す、その心境を訊きました。

――2017年の災害直後の状況を教えてください。

関東にいましたので、テレビやネットの情報を見つつ、地元に連絡して被災した地域の状況を確認することしかできませんでした。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2015年の平成27年9月関東・東北豪雨で、妻の地元である茨城県常総市で被害がありました。その中でTシャツ工場に廃棄や再生のためにずっと活動している人たちがいると知り、調べたら幡再でした。（Hatasai Magazine Vol.6）

そこから幡再のTwitterをよくチェックしておりましたので、朝倉での活動も知ることができました。

――朝倉の活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

私の地元である福岡県であったことと、住んでいる茨城県の水害時にたくさんのボランティアの方たちに活動いただいたので、そのお返しをしたいと思ったのがきっかけです。

――初参加のときの感慨を教えてください。

ひとりで参加しましたが、地元の幡再生にいろいろ話を聞きながら作業できたのでとくに緊張することもなく活動できました。

――どのような活動をされたか教えてください。

家の土砂出し、水に浸かった倉庫の片付け、被災ゴミ等を処分場に運搬、梨畑や柿畑などの土砂出しもやりました。

――流木の撤去はやりませんでしたか？

撤去やチェーンソーなどを使った作業はやっておりませんが、【木札WITH A MISSION】用の木材を発送のために梱包する作業はやりました。

朝倉の流木が、いろいろな手を加えられ「東北ライブハウス大作戦」の木札になり、東北の力へと変わっていくことを感じ、繋がりって本当にすごいなと思いました。

――作業を通じ、とくに嬉しかった想いがあればお聞かせください。

倉庫の片付けをお手伝いさせていただいたお宅で、「もう住まない」とおっしゃっていた方がおられました。片付けが進み、きれいになっていくと「もう1回住んでみようかな」と心境に変化が生まれたときは本当に嬉しかったですね。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌な経験はありませんね。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

活動に参加すると、得るものが多いように思います。それは、災害に遭っても前を向いてがんばっている方たちが教えてくれたものもありますが、同じ想いを持った幡再生と繋がることが財産になっているように感じます。なにより1日活動を終えた後の達成感が、次へ向かう原動力になっています。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

幡再の活動は災害ボランティアという枠を超えた活動です。「ここまでしかできない」という線引きを作らず、地域の方と繋がりを見つけながら活動するのは、なかなか簡単なことではないです。でも、そこに最大の魅力があると感じます。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

私自身もそうですが、これからもどこの現場も「繋がり」を大事にして頑張っていきたいです。

――読者に一言あればお願いします。

活動に参加したことで、見えることは本当に多いです。災害と向き合うことで、備えることも見えるようになります。今も全国の現場で幡再の活動は行われています。参加したことがない方がいれば、ぜひ行ってみてください。感じるものはあると思います。

余談になりますが、朝倉の現場では浦塚さん（P.13）の仕出し屋さんを利用させていただいているのですが、着くと幡再生が皆「ただいま！」と言うんです。そして、作業が終わって帰るときには「行ってきます！」と言って出ていくんです。お母さんとお父さんは「おかえり！」、「行ってらっしゃい！」と言ってくれます。幡再の人の繋がりは、本当に温かいものでした。

朝倉だけのものなのかもしれませんが、自分には「幡再ならでは」に感じました。各地でもそのような繋がりが生まれているように感じます。皆さんにもぜひ感じてもらいたいですね。



「地元民の自分が行かなくてどうする」

末石容子
福岡県出身
／福岡県在住
会社員

実家が朝倉市にある末石さんは、大きな被害こそ免れました。
2011年から幡ヶ谷再生大学の活動を追いつづけ、
故郷の災害を機に行動に移した心境の変化を訊きました。

――2017年の災害直後の状況を教えてください。

実家が朝倉市で、仕事中に今までに聞いたこともない特別警報が出たことを知り驚きました。心配になり、すぐに家族や知人に連絡をしました。15時ごろに父に電話すると、雷と雨音で電話の声も聞き取りづらいほどでした。

父は「強い雨が降り続き雷も昼前からずっと止まない、こんな事は初めてだ」と言っていました。ひとまず家にいて、実家にいる両親ともに無事だったのでほっとしましたが、時間が経つにつれ、被害の様子が甚大なものであることがわかり、あ然としました。翌日両親や友人から写真が届きましたが、見慣れた景色のはずが土砂や流木ですぐにはわからないほどでした。

連休前に国道の通行止めも解除され、ようやく帰れるようになり、弟が一緒に様子を見に行ってくれましたが、あったはずの家や橋がなく、なかったはずの流木の山がある。ああ、故郷が被災地になったのだと痛感しました。



――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

学生時代からBRAHMANのファンでしたので、東日本大震災以降の活動はtwitter等で知りました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

Twitterで知りました。いち早く現地に入ってくださっていたので、とてもありがたく思っていました。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

災害後すぐは「まずは自分の近い所からお手伝いを」と思い、知人宅の土砂出しや片づけをしていました。知人宅の中には全壊の家もあったので、素人では手が付けられないこともありました。

東北で震災が起きたとき「なにかしたいけれど遠いから…」と言い訳して、なにもできなかった自分がいました。熊本地震のときも私もいつか、と思っていたのですが、なかなか踏ん切りがつきませんでした。

今回は、自分の地元で幡再が活動してくれ、遠方からもたくさんの方々が駆けつけていただいているのを思うと「地元民の自分が行かなくてどうする」と思ったのが一番でした。

――初参加のときの感慨を教えてください。

初参加のときは黒川地区での土砂出しでした。その日はあいにくの雨で土砂は重くなり、心が折れそうでした。びしょびしょになりながらもお昼に食べたAコープのおにぎりと浦塚さん（P.13）のお惣菜がとてもおいしかったです。

朝倉市出身とはいえ、黒川には初めて行きました。ユカリさんに案内してもらい、ごろごろ転がる石を飛び越え、大きな石と傾いた家のそばに、ぽつんと子供のおもちゃとお花が供えられているのを見たとき…言葉が出ませんでした。

――どのような活動をされたか教えてください。

土嚢作りや、家屋や畑に入った土砂を人力でかき出しました。星野さん（P.22）の二番目の畑で流木撤去の作業をしました。土砂出しと並行しての作業でしたが、大きな流木は木材として運べるように切断し、木端の山は砂利が混じっているので、分別し、木端だけを運び燃やす、といった作業を繰り返しました。

木端の山から埋もれていた柿の木が顔を出したときはうれしかったです。やはり、寒さとの闘いが一番堪えました。細美さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.117）が来られた時、軽々と大きな丸太を担いでいたのを見て「うわぁロッキーみたいだなぁ」と思いました（笑）

――その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

東北ライブハウス大作戦の「繋ぐ」という信念そのままに、朝倉から東北へと繋げていただいていると思うと、とても誇らしいです。もともとは朝倉の山を支えていた立派な木が雨で流され、流木として厄介者扱いされていたところ、木札として再利用され、全国の皆さんの想いを添えて東北へ運ばれると思うと胸が熱くなります。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

2019年の初めごろ、星野さんの柿畑の剪定（せんてい）のお手伝いをしたとき、隣にある他の方の柿畑は災害後ずっと手つかずのままで大きな流木もそのままになっていまし

た。ようやく行政の手が入ったのか大きな重機で流木も一気に動かし、どんどん整地されていきました。「すごいね、やっぱり早いね」とみんなで見ていたら、星野さんが「なぁに！うちは幡再のみんなとあれを全部人力で片付けたんやぞ」と笑っていました。

冗談っぽく笑ってらっしゃいましたが、星野さんも笑顔でいましたし、実はとてもうれしかったみたいなんです。私も思い出に強く残っています。大きな流木が転がる畑で、自然の脅威と同時に人の力の強さを再認識しました。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

とくにありませんが…あえて言うのなら、BRAHMANの「八面玲瓏」（武道館公演：2018年2月9日）のときに木札を一口参加させていただきました。石巻で申し込みしたはずが、その後の各ライブハウスのSNSで、どうやら大船渡に私の木札があるようでした（笑）

石巻は一度親友と訪れ、美味しいと教えてもらったカツカレーそばを食べそびれましたし「また行こうね」と言っていますが、この際全箇所行って確認したいです（笑）

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

「作業をもうちょっと進ませたかったな」や「次はもう少し頑張ろう」という気持ちが毎回あったので次も、そのまた次もと参加するようになったと思います。

少しずつですがきれいになっていく畑を見ると達成感もあります。幡再生のみなさんや星野さんたちに「またね」と言えるのもうれしく感じています。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

いつもSNSや出展ブースなどで幡再生や協力しているバンドのみなさんの活動を拝見するたびに頭の下がる思いでいます。頑張っている姿が、誰かの支えになるのは素晴らしいなと思っています。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

これまでと変わらないスタンスであり続けてほしいです。

――読者に一言あればお願いします。

まず朝倉出身者として「全国各地からたくさんのご支援をいただきありがとうございます」とお礼を言いたいです。2年が経ちましたが再建した場所やそのままのところが混在しているのも確かです。

九州自主練の活動もありますので、機会がありましたら足を運んでください。お待ちしております。

「地元の有志たちが集まって活動を継続する集団であり続けてほしい」

山本知徳
福岡県出身
／福岡県在住
運送業

幡ヶ谷再生大学陸上部に所属していたことがきっかけで
復興再生部を知った山本さん。
言葉数は少ないものの、被災地と寄り添い、地元の方との触れ合い、
継続的に活動を支える原動力を訊きました。

――2017年の災害（平成29年九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

災害後、社協のボランティアへ行っていました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

幡ヶ谷再生大学の陸上部に所属していたのがきっかけです。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

幡再のホームページで活動を知ったのが最初だったと思います。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

夏の暑い中、子供たちが熱中症になりそうになりながら、土砂をかいているのをニュースで見たのがきっかけでした。

――初参加のときの感慨を教えてください。

少しは「困っている人の役に立てたのかな」という充実感がありました。

――どのような活動をされたか教えてください。

家の中の泥出しと流木の撤去などになります。

――その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

被災地の状況を、他県の方々が知るきっかけになったことはうれしく思いました。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

被災された方や幡再の仲間たちと出会えた事がいちばんうれしかったです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

とくにありません。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。



活動に参加して、日を追うごとに人数が減っていきました。その状況を見て「継続して活動しないといけない」と思ったからです。そして、地元の人たちとの関わりが「また行きたい」と思うきっかけになりました。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

常に被災された方々に寄り添って活動している集団で、やりがいがあります。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

災害は起こってほしくはないですが、有事の際は、地元の有志たちが集まって活動を継続する集団であり続けてほしいと思います。

――読者に一言あればお願いします。

活動を通じていろんな人たちと出会えました。それは自分のためにもなりました。機会があれば参加してみても損は無いと思います。

「作業にしろ、人間関係にしろ、学ぶべきことが多々あるように感じます」

岩瀬瑠奈
佐賀県出身
／佐賀県在住
事務職

福岡県のお隣、佐賀県から九州北部豪雨を経験した岩瀬さん。
幡ヶ谷再生大学との出会い、活動を通じて生まれた信頼関係、
育まれた人と人との繋がりを訊きました。

――2017年の災害（九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

佐賀県は私の周りだけかもしれませんが、何も被害はなかったです。会社は、久留米市から来る社員が多いので臨時休業になりました。久留米市も冠水しており、家から出られない方も多かったようです。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

MAN WITH A MISSION（以下：マンウィズ）のトーキョータナカさん（Hatasai Magazine Vol.6 P.34）のツイートがきっかけでした。そこから自然と朝倉での幡再の活動を知りました。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

マンウィズが翌週から北米ツアーへ行くというときにトーキョータナカさんが朝倉へ来られました。そのときは台風が近づいており、明日にも九州に上陸するかもしれない状況で、台風に備えて重機で道路の瓦礫などを1時間ほどで片付けてくれました。その日は、東京へ戻らなきゃいけない日のようでギリギリまで活動されていました。その後のツイッターで「地元のことは地元の人間がやるべき」とツイートされていて、この投稿に背中を押してもらいました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

感慨といったものはなく、ただただキツかったです！！！ とにかく身体にこたえました（笑）

――どのような活動をされたか教えてください。

初現場は裏山が崩れて土砂がなだれている家屋でした（岩下さんP.18の現場）。出した泥を一輪車に積んで、傾斜のきつい短い坂を下り、トコトコ（運搬車のキャリー）に積み替え、トコトコで川のそばまで捨てに行く。

水を含んだ土は重くて、ひとりでは一輪車を支えきれず、ふたり一組で運びました。一輪車を持つときは腕が、一輪車を押すときは太ももが、パンパンになりました。

その現場が一段落した後は流木の撤去を行いました。

――その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

ただ捨てられたり、燃やされるだけではなく「何かに利用できる」ということは良いことだと思いました。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

星野さん（P.22）に初めて名前を呼んでもらえたときはすごくうれしかったです。そのあと星野さんのお母さんにも呼んでもらえてうれしかったです。

朝倉でも熊本でも、活動を通じ、人と人の繋がりが拡がっていくのが、純粋にうれしかったです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

今のところはないです（笑）

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

ただただ楽しいだけですね。正直、星野さんに会いたくて行っています。星野さんに会いに行って、いつものメンバーと作業して、おまけに採れたての野菜をごちそうになれる…うれしくて、楽しくて、美味しい。そんなところです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

活動を通じて知り合った人たちと、これからも心地良い関係を続けていけたらと思います。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

九州は災害復興のお手伝いが落ち着いてきています。学びの場として、さらに各地域と繋がっていけたらと思います。

――読者に一言あればお願いします。

一度、「試しに」でも良いと思いますので参加してほしいです。私は九州の活動しかわかりませんが、趣味嗜好の似た人たちが集まっていて、ライブに参戦したときのような楽しさがあります。

私個人の意見ではありますが、作業にしろ、人間関係にしろ、学ぶべきことが多々あるように感じます。



「人と人との繋がりを増やしていけたらいい」

浦野康勝
福岡県出身
／福岡県在住
運送業

石井麻木さんの写真展をきっかけに幡ヶ谷再生大学を知った浦野さん。
復興再生部の活動に尽力しつつ、故郷を突然襲った災害と向き合った日々。
現場でできた陸上部の仲間、
活動を通じてできたかけがえのない仲間たちとの繋がりを訊きました。

――2017年の災害（平成29年九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

僕の地元はそこまでの被害がなかったんですよね。だから幡再から募集がかかったときに「タイミングが合えば直接現場に行ってみたいな」と思っていました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

たしか幡再が石井麻木さんの写真展（Hatasai Magazine Vol.7 P.92）のお手伝いを始めたときぐらいにTwitterで知ったと思います。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

Twitterですね。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

やっぱり石井麻木さんの写真展になりますかね。麻木さんや熊本の被災地へ行っている幡再生の話を聞いて、「僕も現場をこの目で見たいな」と思ったんです。



――初参加のときの感慨を教えてください。

幡再の活動に初参加したのは福岡での石井麻木さんの写真展で、「麻木さんのお手伝いがしたい」と応募しました。幡再の冊子を読んだり、幡再生と話したりして幡再に触れることができたのは大きかったですね。

「災害ボランティア」には1度も行ったことはなかったのですが、朝倉の活動に初めて参加するときの不安はなかったです。

――どのような活動をされたか教えてください。

朝倉ではほとんどが泥出し土砂出しでした。大雨で流れてきて堆積した泥や土砂を出しては運ぶ、という単純作業の繰り返しです。

仕事との兼ね合いもあって、豪雨が起きた直後くらいに1度行っただけで、夏の間はずっと行けなかったんですよね。なので、僕が朝倉に精力的に行き出したのはその年の秋以降で、ほとんどが星野さんの柿畑に積もった流木の撤去などでした。

――その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

当初は焚き火に使ったりしていたのですが、すごい数の流木があって焚き火だけではとても処理できないと困っていたので、妙案だと思いました。

「被災地と被災地の繋がりがこういった形でなる」というのは素晴らしいことだと思いました。寄付してくれる方にも朝倉のことを少しでも考えてもらうきっかけにもなりますし、こうやって有効に活用するのはすごく良いことですよね。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

ユカリさんにも泥出しが「速くてしかも綺麗」とほめてもらいました。単純なので、人にほめてもらったことはなんでもうれしかったです（笑）

僕は、現場にスピーカー持っていって勝手に音楽をかけはじめたんですけど、その音楽に反応してくれたりするのもうれしかったです。幡再は音楽好きな人多いですから。

あとはやっぱり「人との出会い」ですよね。僕は2017年の秋に幡ヶ谷再生大学の陸上部に入部したのですが、現場で仲良くなった年下の子が陸上部に入部してくれたんですよね。それはうれしかったですね。

その彼とは今では月1で一緒に走って、情報交換をしています。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌な経験はないですね。逆に迷惑とかかけてないかが心配です（笑）

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

「情けは人のためならず」と言いますが、幡再の現場へ来ると毎回勉強できることだったり人の気持ちだったりなにかをもらって帰っている感じがするんですよね。

最初は「早く復興するために行けるときは1日でも多く」なんて考えていたのかもしれませんけど、途中からはただそこにいる人たちに会いに行っている感覚でした。本当に楽しかったですね。

活動の参加がけっこう自由だったのも助かりました。当時は人手が1人でも多く必要なこともあって「午前中でも午後からでもいいから来て」という感じで、昼からでも時間がつくれたら連絡なしで行っても迎え入れてくれていました。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

縁もゆかりもなかった土地に繋がりができて、そこにまた訪れるきっかけをつくってもらったことや、まだ知らない場所に知り合いができたことに深く感謝しています。

この歳になって「一生を共にできる仲間」に出会えるなんて考えてもみなかったので。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

先日転勤で福岡に来た陸上部の方と呑む機会があったのですが、「いきなり知らない土地へ来ても、こうやってご飯を食べたりお酒を飲んだりする相手がいるってすごいことだ」と言っていたのですが、本当にそうですよね。今や陸上部は全国各地にすごい数がいますし、なにかあったときにこの繋がりはすごい役割を果たすと思っています。災害ボランティアでなくても各地の自主練などでどんどん面白いことをやって、人と人との繋がりを増やしていけたらいいんじゃないかなと思っています。

――読者に一言あればお願いします。

“You'll never walk alone”

このご時世だからこそ、思いやりや助け合いの気持ちを持って生きていくのが一番だと幡再が改めて教えてくれました。

もしどこかであなたと僕が繋がったのならば、ぜひ笑顔で乾杯しましょう！

「もっと前から幡再を知っていれば、常総にも行きたかった」

河田篤典
茨城県出身
／熊本県在住
大学生

茨城県で生まれ育ち、現在は東海大学に通学するために熊本県に住む河田さん。
幡ヶ谷再生大学とともに活動をしてきた大学の先輩たちに触発され、朝倉へ。
大学生活を送りながら、幾度となく通った現場で感じたことを訊きました。

――2017年の災害直後の状況を教えてください。

熊本県に来てまだ3カ月くらいでした。大学の先輩たち（Hatasai Magazine Vol.7 P.66）やユカリさんがすぐに朝倉に駆けつけていて、「すぐに行動できるなんてかっこいいな」と思いました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

「阿蘇復興への道」という団体に入っており、新歓バーベキューのときに先輩に教えてもらって知りました。最初は「幡再」の「再」が「祭」だと思っていました。

「どんな感じの祭りなんだろう」と思っていました（笑）

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

先輩とユカリさんが豪雨直後に朝倉へ行っていたのもありましたし、ニュースなどで被害の状況を見て、「実際はどのくらいの被害なんだろう？」と思っていました。その後、先輩から被害状況や活動の募集をしていることを教えてもらいました。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

正直、誰かのためにとか、困っている人の役に立ちたい、といった気持ちはあまりなかったです。「大学生活では関わることのできない人」「手伝いに来る人」「現地の人はどんな人たちなんだろう」と、いろんな人と話してみたくて参加しました。

何度も行くうちに、話すたびに、人に会うことが楽しくなってまた行きたいと思うようになりました。

そして気がついたら現地の人のために何かしたいと思うようになっていました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

熊本市内から相乗りで行きました。知り合いが全然いなく、大学生もまわりにいなかったので、現地のおばあちゃんと話していました。最初は「幡再がなんなのか」や音楽のことも詳しくはなく、参加者がお揃いの幡ヶ谷再生大学のTシャツを着ていました。

会話も復興や復旧の話ではなく、「いついつのフェスとか行く？」とか話しており、「この人たちはなんなんだろう？」と思ったのを覚えています（笑）

作業していると満生さん（P.26）が三ツ矢サイダーをくれたので、僕と満生さんの奥さまと休憩しながら豪雨の話ではなく、他愛もない話をしたことを覚えています。

満生さんたちは被害にあって家も住めなくなったのも関わらずそんな素振りも見せずに何気ない会話をしてくれていて、すごく複雑な気持ちになりました。

その日は茨城県から来ている人もいて、茨城のことをいろいろ話しました。

その人と話しているなかで、鬼怒川（茨城県を流れる河川）が豪雨で決壊したときに幡再が現場（Hatasai Magazine Vol.6）に入っていたことを知り、「もっと前から幡再を知っていれば、常総にも行きたかったな」と思いました。

当時は幡再のことも全然知らなかったので、幡再に来ている人たちは「普段は何しているんだろう？」と疑問に思っていました（笑）

――どのような活動をされたか教えてください。

濁流に呑まれた家の土砂を出したり、いるものといらないものの選別をしました。勝手にですが「幡再は無理に頑張らなくてもいい」といった雰囲気があったので作業もゆっくり進められました。

僕は現地のおばあちゃんと椅子に座って、おしゃべりしていました。その家は、もう更地になっていると聞き、そのおばあちゃんは現在も元気なのか、気になっています。



そのほかには、星野さん（P.22）の柿畑の土砂や流木を出す作業もしました。すごく大きい流木はチェーンソーで切り、それらを運ぶ作業をしました。僕もチェーンソーにチャレンジしましたが、全然使えませんでしたので断念しました。

ほかにも多くの作業をやらせていただきましたが、どれも良い思い出として残っています。

――その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

2年前の「東北ライブハウス大作戦大忘年会」へ行ったときにライブハウスの壁に貼られている木札を見て、「朝倉の木もあの壁に飾られるの　か！」と思い、うれしかったです。

のちに「木札には誰でも名前を書くことができる」と知って、僕も書きたいなと思いました。いまだに書けてはいないのですが、今年中に書ければと思っています！

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

知り合いが増えていくことや、普通の大学生活では話すことができない大人たちと話したり、悩みを聞いてもらったり、いろんな人と話せてすごく楽しい経験をさせていただきました。

熊本から相乗りで来たとき、行きも帰りも爆睡してしまい、気がついたときには高速代やガソリン代などすべて支払ってくださっていました。それなのに嫌な顔ひとつせずに仲良くしてくれて、そんなカッコいい大人たちと大学生のうちに出会えて良かったです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

朝が早いことですね（笑）8時30分くらいに朝倉集合の場合、4時30分くらいに家を出なければならないんです…。でも毎回、不思議なのが幡再の活動の帰りには「行って良かったな」と思えるんですよね。それが一番不思議です（笑）

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

んー、情熱は特になかったですね（笑）。でも大学でせっかく遠い熊本県に来たので「大学時代にしかできないことをする」ことを実行するのに必死でした。

いろいろな考え方やいろいろな人と関われる「幡再」と接することが楽しかったのかもしれないです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

「被災地で活動する」ことがこんなにも充実した気持ちにさせてくれるとは思いませんでした。

こんな言い方をしたら語弊があるかもしれませんが、「行ったらなんか楽しいことあるかも？」「とりあえず人と話したいから行ってみよう」くらいの気持ちで活動に行ってもいいと思います。

そういう活動を繰り返している幡再からたくさんのことを学ばせてもらっています。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

僕は「活動がもっと広がってほしい」とかはまったく思ってはいません。ですが、これまで会った人と人との繋がりと、これからもっと“太くなる”だろう繋がりがずっと続いてほしいです。

――読者に一言あればお願いします。

活動に行くまでは「幡再＝ロックバンドのファン」という認識がありました。実際はそうではありませんし、興味すらない人もいます。僕自身もロックバンドにすごく興味がある人間ではないのですが、行ってみてたくさんの思い出を作ることができました。

もし「行きたい」と思っているのならば、一度行ってみると自分のなにかが変わるかもしれません。なによりもお昼ご飯がおいしいですよ（笑）

「『待ってました!』と迎えてくれる仲間がいる現場に心から感謝しました」

塚本千賀子
福岡県出身
／愛知県在住
主婦

熊本県・南阿蘇につづき、朝倉での活動も足繁く通った塚本さん。
幡ヶ谷再生大学との出会い、陸上部への入部。
かけがえのない仲間との出会い、つらい体験を乗り超え、
そして新天地でも現場に通いつづける想いを訊きました。

――2017年の災害直後の状況を教えてください。

7月5、6日はサカナクション（日本のロックバンド）のライブへ行っておりました。同じ福岡県でもかなり災害がピンポイントでして…。

このときは正直「こんなときにライブへ行っていて良いものなのか」とかいろいろ葛藤していました。このときライブでは、豪雨で40人ほど来られなかった方がいました。

のちに徐々にひどくなる被害状況をニュースで知り、同じ福岡県でもこんなに違うのか、と信じられない気持ちと「なにかしら自分にできる事をやりに行きたい！」と、思いました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

Twitterで自分の好きなミュージシャンが東北で活動しているのを知ってからです。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

Twitterの募集でした。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

「実際に行ってお手伝いがしたい！」という気持ちだけでした。

――初参加のときの感慨を教えてください。

熊本県南阿蘇での幡再の活動に参加していたこともありましたが、初参加の日はとにかく暑くて大変でした…。今までこんなに泥と向き合ったことはなく、みんなでひたすら泥と格闘してました（笑）

その日はたくさんのボランティアの方が来られていたのが心強かったのと、南阿蘇でお世話になっていた旅館・朝陽さんの社長さん（幡再冊子Vol.7 P.12）も参加されていてうれしかったのは思い出に残っています。

――どのような作業をされたか教えてください。

最初は浦塚さん（P.13）の仕出し屋の泥出しと泥にまみれた家財道具の掃除や不要なものを集積所に運ぶ作業でした。渕上さん（P.20）の倉庫の中身を出し、きれいに洗って戻す作業や家の裏山の崩れた土砂をひたすら出す作業もしました。

柿畑の泥出しや田んぼに入った流木の撤去や「東北ライブハウス大作戦」の木札を各ライブハウスへ送る梱包作業ですね。

――その流木が「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

今までの災害で最大規模といわれた朝倉の流木は、いろいろな団体が知恵を絞り再利用する中で幡再では木札として東北へ、全国へ、とたくさんの方々のもとへと繋がっていくのはうれしかったです。



活動の参加者がそれぞれの気持ちを込めていましたし、朝倉の流木が木札以外にも余すところなく幡再のブースで、ワークショップで使われるということは素晴らしいなと思いました。なによりもその作業に関われたことにとてもうれしく思いました。

朝倉の木札を見たとき、うれしくて名前を書かせてもらいました。もちろんワークショップで焼印も押しました(笑)

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

浦塚さんの仕出し屋での活動で、最初は椅子に座って無口だったおじいちゃんが、泥出しが進むにつれて話かけてくれるようになりました。後日、幡再のTwitterで満開の笑顔になっていたのを見たときは自然と微笑んじゃいました。

そういった気持ちの変化や、泥出しをしていた柿畑の柿が無事に実り、収穫祭に参加できたこともすごくうれしかったです！
また、とある事情で重いスコップの先端をビニール袋で覆って電車やバスに乗ったのはレアな体験でした（笑）

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌な経験はありませんが、後悔していることはありますね…。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

情熱という感じではないですね…。初めましての方や、いつもの仲間たちとの活動で、地元の方々と過ごす時間や学びは貴重な体験でした。

毎回楽しくて良い経験をさせてもらっているので、自分が「行けるなぁ」と思ったときは行きたい心持ちです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

幡再で活動することによって南阿蘇を大好きになり、その大好きな南阿蘇を走ってみたくて走り始めて、幡ヶ谷再生大学の陸上部に入りました(笑)

農業のお手伝いも楽しく興味深くて、共に活動する仲間たちからもいろいろ教えてもらったり、今までの自分になかったものがどんどん増えてくる…私にとって学び、繋がり、人に感謝する大切な場所です！

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

「ぜひ一度、現場へ足を運んでみてください！ きっと何かが広がると思います！」と、私が言える場所を作ってくれる幡再には、今後もありつづけてほしいです。

――読者に一言あればお願いします。

完全に私事で申し訳ないのですが…。私は、朝倉の活動中に母を亡くしてしまいました。最期にちゃんと母を見送ることもできませんでした。

この日のことを思うたびに自分の行動に後悔しかなく、ただただ辛いままでした。でもいつまでも後悔の気持ちから抜け出せないままじゃいけないし、「とにかく前を向かなくちゃ」と必死な想いでいました。

このまま幡再に行くことを止めるのも違うんじゃないか、とも思っていました。

そんな折、母の友人から「お母さん、電話でね『娘が熊本にボランティアに行っているの』とうれしそうに話していたのよ」と伝えられました。

それからしばらくして、自分のペースで行けるときにまた活動に参加するようになりました。

久しぶりの参加にも「待ってました！」と迎えてくれる仲間がいる現場に心から感謝しました。

みんな、私の母親のことは知っていたのですが、いつも通りに楽しく振る舞ってくれる、変わらない活動ができる九州自主練はホントに最高です。

私は現在、愛知県に引っ越してしまいましたが、この冊子を読んでいただいて気になった方がいらっしゃいましたら、ぜひ行ってみてください。

みんな、快く迎えてくれると思いますよ。

「『みんなが力を合わせてがんばる』。そんな幡再生が好きで参加しています」

norio（匿名）
石川県出身
／福岡県在住
無職

娘から幡ヶ谷再生大学の存在を聞き、
活動に参加するようになったnorioさん。
活動を通じて芽生えた感情、感じた善意の輪…。
今後を見据えた提言をいただきました。

――2017年の災害（平成29年九州北部豪雨）直後の状況を教えてください。

ニュースを見て、ただただ驚くばかりでした。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

次女から幡再の活動を教えてもらいました。「機会があれば参加したい」と思っていた折に「今度、朝倉に行きたいんだけど送ってくれないか」と頼まれました。せっかくなら自分も、と思ったのがきっかけでした。

――初参加のときの感想を教えてください。

初参加は2017年8月と記憶していますが、自分が想定した活動とは違っていました。「物足りない」とまでは言いませんが、作業が終了し「まだ他にやることがないのかな」と思いました。

――どのような活動をされたか教えてください。

生活道路に堆積した土砂の撤去に始まり、何度か活動に参加して10月頃には柿畑に流れ込んだ土砂や流木の搬出を行いました。星野さん（P.22）の“1枚目”の畑の土砂の搬出が終わり、次の畑を見に行き、幾重にも重なり合った流木を見たときは正直「この畑は再生できないのでは」と感じました。

そのときユカリさんが「なんとかなるんじゃない」と、この言葉で「やれるところまでがんばってみよう」と思えました。

日に日に撤去作業が進み、流木がなくなり柿の木が現れてくると、みんなに愛情が芽生えたのか「この1本も」、「こっちの1本も」と“助け出す”スピードが速くなっていきました。

作業が進んでいく中で、撤去した流木の活用方法について、話が出てきました。「薪にして引き取ってもらえば再生できる」と提案があり、一部は薪に替りました。そんなある日、ユカリさんから「東北ライブハウス大作戦の木札にしたい」と提案がありました。

最初は流木を木札にして、どのように活用するのかわかりませんでした。作業は木札に適した傷みの少ない流木を見つけると、泥を落として2ｍほどの長さに切断していきました。製材所に運ぶ前に、降雪もいとわず水洗いをして泥を落としたのは、良い思い出になっています。

チェンソーも膨大な流木の前に刃の損耗が早く、作業の進捗に支障をきたすようになりました。昔のツテを頼り、チェンソーを借りてなんとか流木の切り出しを終えました。

――その流木が木札with a missionとして「東北ライブハウス大作戦」の木札になったことを知ったときの気持ちを教えてください。

自分たちで撤去した流木が木札に変わっていき、その木札が幡再ブースで善意の輪となって被災地に還元されたと思うと頑張ってよかった、と思いました。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。



自分たちで切り出した流木の一部を「GAMADASE KUMAMOTO 2018熊本復興祭」の幡ヶ谷再生大学ブースで木札やキーホルダー、コースターに替わった流木の販売に携わったことです。

その際、私の孫が流木の上に一休みする写真を展示してもらい、流れ込んだ流木の大きさを見てもらうとともに撤去作業の説明をして、来訪者から共感と励ましを受けたことです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

とくにありません。

――数え切れないほど活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

活動参加者が協力して作業を進めていく姿、被災者に向き合う姿勢、あきらめず丁寧に行う作業など、一緒に作業していて感心することばかりでした。

余談ですが活動中の休憩の折、ひたむきにがんばる幡再女子に「幡再女子をなめたいかんよ」と話したことがあります。流木の撤去においても、“男性軍”が「ここまでかな」と諦めかけると、女性軍が「もう少し」と声を上げ泥にまみれた木っ端の片付けをはじめ、それにつられた男性軍もがんばることがしばしばありました。

そのような姿に触発されているのかもしれませんね。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

活動には、被災者の生活再開のために行う支援、その次に生活継続のために行う支援があると考え、継続して参加しています。

以前、娘からもらったCDを聴いていたら学長が「『個と個』を大切にしたい』」旨のことを話していました。また、作業が行き詰まったときのユカリさんの「なんとかなるよ」のこの一言に励まされて「みんなが力を合わせてがんばる」。

その2つの文言を忠実に守っているかのように活動している、そんな幡再生が好きで参加しています。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

今後も、活動の継続を期待しています。即応力の向上のため、技能講習会との研修を企画してみてはいかがでしょうか。

――読者に一言あればお願いします。

例えば身体が弱い、参加してもなにをしていいかわからないなど参加できない理由を探すことなく、まずは参加してみましょう。現地に行けば、それぞれの能力でできることが必ずあります。

参加する際の心がけとして、被災者に寄り添い、その気持ちを理解してもらえればと思います。

「『仲間を増やすために活動へ行く』でも僕は良いと思います」

四星球U太
兵庫県出身
／徳島県在住

2011年から幡ヶ谷再生大学の活動を追い、その機会を待ち望んでいたU太さん。
現地で感じたこと、活動することの意味、
現在復興再生部が現地入りしている愛媛県での現場への感謝…。
幡ヶ谷再生大学への想いを訊きました。

――ご職業を教えてください。

コミックバンド『四星球』のベースとマネージャーで、『officeみっちゃん』の代表です。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2011年3月の東日本大震災以降、SNSを通じて知りました。その後、2012年10月14日に福島県まちなか広場にて開催された「F-WORLD 2012」×「YES.福島」でユカリさんと出会い活動内容を教えていただきました。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

以前から「幡ヶ谷再生大学の活動に参加したい、なにかの役に立てたら…」という気持ちはありながらも、ライブして移動、そして徳島在住ということもありなかなか現地へ足を運ぶことができませんでした。

参加できる場所がないかと調べていましたら、毎年福岡で開催されている「TRIANGLE（音楽イベント）」に出演が決まり、同じ時期に朝倉で活動されていると知り、参加させていただきました

――初参加のときの感慨を教えてください。

現地へ入り、まず日常生活のなかで当たり前のように経験する雨で、ここまで大きな被害が出ることに驚きを隠せませんでした。朝倉の方にお話を伺い、当たり前にあった生活が一変してしまう怖さを目の当たりにした記憶があります。

それと、活動に参加している皆さんと「うまく接することができるかな…」と不安もありましたが、皆優しく、明るく迎えてくださり、声を掛け合い和気あいあいと活動させていただきました。

――どのような活動をされたか教えてください。

「TRIANGLE」のイベント会場にてMAN WITH A MISSIONのトーキョー・タナカ氏（Hatasai Magazine Vol.6 P.34）より軍手を預かり、現地で活動されている皆さんにお渡しするミッションから始まりました。

現地に入ってからは、大雨で梨畑に流れ込んだ土砂をスコップですくい、三輪車等に載せて梨畑の外へ運び出す内容でした。梨畑のなかに入ると、溜まった土砂で梨と地面との距離が近くなってまっすぐ立つことができず、みんなしゃがんだ状態で腰を曲げて作業したのを覚えています。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

被災された現地の方に喜んでもらえたことです。帰り際、笑顔で見送ってくださったことが印象深い思い出となっております。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

ありません。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

平成30年7月豪雨では四国・愛媛が大雨による被害を受けました。山の土砂崩れが数え切れないほどあり、家屋や道路、名産であるミカン畑もかなりの被害を受けました。

ミカンを育てる上で大切な“土”が、流れてきた土砂でダメになってしまい、元通りになるまで数年かかるとのことでした。四国自体が、近年大きな災害を経験していなかったこともあると思うのですが、自分を含め復興に向けてなにから手をつけてよいかわからないなか、早い段階から幡再には活動を始めていただき、愛媛の者ではないのですが同じ四国在住の人間として本当に感謝しております。

――これからの幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

全国の被災された地域の皆さんに、将来「あのときは大変やったけど元通りになって良かった！」と言ってもらえたらいいですよね。

それまでには時間も人も必要だと思いますし、現地の皆さんに寄り添って活動をつづけていくことが大事だと僕は考えています。とはいえ、なかなか行きにくい場所もあったりもするのですが、実際に足を運んでみるとそれぞれの土地の素敵な部分を知ることができると思います。

そして幡再生の皆さんと一緒に活動することで仲間も増えます。「仲間を増やすために活動へ行く」でも僕は良いと思います！

――読者に一言あればお願いします。

「なにかあったら持ちつ持たれつの助け合いの精神」はみんなが少なからず心にあると思うんです。「活動に参加してみようかな」とちょっとでも思ったらぜひ活動に参加してみてほしいです。

学長はああ見えて優しいですしね（笑）





































092

台風10号
支援活動

2016年8月に発生した台風10号は北海道、東北地方に甚大な被害の爪痕を残しました。発生当初こそ支援はあったものの、ときの流れとともに関心が薄れたころ、岩手県に住む有志たちと幡ヶ谷再生大学の活動が始まりました。

「あのときから『後悔しないように』と考えていました」

吉見康裕
岩手県出身
／岩手県在住

東日本大震災直後、幡ヶ谷再生大学として物資を届けた岩手県宮古市で生まれ育ち、現在は岩泉での活動を支える吉見さん。2011年から現在まで幡再に寄り添い、活動を通じて感じたこと、過去から未来へ紡ぎたい想いを訊きました。



――ご職業を教えてください。

夢を見させる仕事です（笑）

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2011年以前から何度かBRAHMANをLIVEで宮古に呼ばせてもらっていたので、ごく自然に、ですね。

――岩泉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

岩泉での活動前からユカリさんが来てくれていて、2人で地域の声を聞きに巡りました。

――活動を発足させようと思い立ったきっかけを教えてください。

岩泉は両親の出身地でもあり、私にとっては第二の故郷なんですよ。「少しでもお役に立つことができれば」と思ったのがきっかけですかね。

――初参加のときの感慨を教えてください。

ワクワクドキドキ（笑）

――どのような活動をされたか教えてください。

地元の団体が行っていた薪割りが中心ですね。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

地元の方が「普段若い人と話す機会ないのでうれしい」と喜んでくれたことですね。あと「養子に来い」と言われたこと（笑）

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

いろいろな想いを持って活動に参加される方と接するなかで、いかに円滑に活動を進めることのむずかしさを学びました。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

歳をとれば、少しは「何かのお役に立ちたい」と思うものですよね。2011年の津波のときは漠然として動けなかったので、あのときから「後悔しないように」と考えていました。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

人の繋がり、地域の繋がり、過去から未来への繋がり…どれも勉強になります。ご指導ご鞭撻をいただきながら、活動させていただきます！

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

繋がりある活動が未来永劫続くことを願います！

――読者に一言あればお願いします。

岩手県岩泉町、遠くて不便な所ですが…（笑）ぜひ遊びに来てください！

「親しくなった方々にお会いするのが楽しみになっていました」

三浦由貴
岩手県出身
／岩手県在住
福祉職員

2011年から幡ヶ谷再生大学を追い、2016年に発生した台風10号の被災者となり、死と隣り合わせの生活を送った三浦さん。
地元「岩泉」での活動が始まると足繁く参加し、「岩泉自主練」を運営する1人に。
活動を続けることの意味。伝えたい想いを訊きました。



――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2011年の東日本大震災発生後のTwitterのタイムラインとスペースシャワーTVで放送されたBRAHMANさんのドキュメンタリー映像を見て知りました。

また、2013年の石巻のONEPARKさん（宮城県石巻市にあるスケートボードパーク）のイベントで初めて幡再ブースの活動写真を拝見しました。

――岩手県・岩泉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

Twitterで「薪割り活動募集」の投稿を拝見し、参加に至りました。近所の写真も投稿されていて驚きました（笑）

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

BRAHMANさんのファンであったことや東日本大震災での幡再の活動をTwitterで見ていたこともあり、その幡再が地元の復興支援で来ていることがうれしくて音楽好きとしては協力したかったですね。

自宅でも薪ストーブを使っていますので、少しだけでしたが薪割りを手伝ったこともありました。それに薪割りの大変さと暖かさを知っていたので「力になれるかな」と活動に参加しました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

初参加のときは昼食作りから参加しました。現場に着くと岩泉の知っている方もいて、他にはどんな方々が来るか、来られた方々と打ち解けられるか、緊張しながら待っていたと思います。

好きなバンドのTシャツを着ている方も多く、バンドの話ができて楽しかったのを覚えています。

――どのような活動をされたか教えてください。

昼食作りやチェンソーを使って丸太を切り分けたり、薪割りや岩泉自主練（P.127）の立ち上げに協力させていただきました。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

岩泉町にBRAHMANさんやORANGE RANGEのYOHさん（Hatasai Magazine Vol.5 P.21）が復興支援にやってきてくれたことがうれしかったです！

また、昼食作りに祖父母が育てた野菜や米を提供して、みなさまに「美味しい」と喜んでもらえたことも思い出深いです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

「地元民だから」とプレッシャーを感じ、自分の意見が言えなくなった時期もありました。

組織が大きくなる以上致し方ない部分は必ずありますが、円滑に物事が進むように尽力しております。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

情熱よりも親しくなった方々にお会いするのが楽しみになっていました。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

ライフラインやインフラの整備が進み、目に見える復興は進んでいますが心の奥底の傷が癒えるには至ってはいない方がまだたくさんいます。仮設住宅から出られない理由も人それぞれ抱えていて、簡単に希望を与えられないのが現実です。

ですが、その方々が“幡再生”に出会って少しでも生きる希望を持ってもらえたらうれしいです。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

薪割りから始まった岩泉の活動は、関わってくれている幡再生の力がまだまだ立ち直れていない被災者の力になっていると感じてい

ます。岩泉は小さな街ですが、歳を重ねてもこの縁が途切れずに幡ヶ谷再生大学がありつづけてほしいです。

――読者に一言あればお願いします。

東日本大震災発生以来、原発問題、地震、豪雨災害があり、全国の被災地について他人事のように思っている人にもたくさん会いました。被災地に足を運んだことのない知人もいて、「疑わしさ」や「偽善なのかな」と考える日もあります。

私は台風による豪雨災害で実際に死ぬかもしれない恐怖を体験し、復旧作業でたくさんのボランティアの方々のご支援を受けながら発災からの数カ月を必死に生きました。

場所は違えど、私と同じ思いをした方々が全国にたくさんいると思います。

自分は「今、平和だから」と目をそらさず、幡再をきっかけに被災地のことや災害への備えや災害時のボランティア活動への興味を持っていただければ幸いです。

「高齢者同士の支え合いになり、大きな支援になっていると思います」

小松ひとみ
岩手県出身
／岩手県在住
本屋

岩泉町で生まれ育ち、2016年の台風10号では被災者になった小松さん。
地元と幡ヶ谷再生大学のパイプ役となり、活動を支えています。
本冊子を通し、伝えたい想いを訊きました。



――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2016年8月に台風10号の災害で被災した際、テレビで「ストーブが足りません」と訴えました。その翌日にMAN WITH A MISSION（Hatasai Magazine Vol.6 P.34）さんがストーブ300台を無償で贈ってくださいました。その後、掃除機もいただきました。

その後に吉見さん（P 93）からユカリさんを紹介してもらったのがきっかけだったと思います。

――活動初日の感慨があれば教えてください。

吉見さんとユカリさんと話し合いを重ね、活動初日を迎えました。岩泉は不便な地域でボランディアさんが「来てくれるかな…」と不安がありました。しかしその不安もなんのその、全国から多くの方が駆けつけてくださり大感謝でした。

――どのような活動をされたか教えてください。

被害の大きかった安家（あっか）地区の方たちにとって冬の寒さを凌ぐには薪ストーブが必需品ですので、薪割りを中心に行いました。

私たち「岩泉女性連絡会議おじゃんこの会」と「岩泉デザイン会議」でも幾度か昼食を差し入れに伺いました。現在は、薪割りを継続しています。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

「いつかMAN WITH A MISSIONさんのLIVEイベントができたらいいな」と言うと、若者たちはみんな、目を輝かせ、歓声を上げていました。

今年の5月4日・5日に行われた「2019龍泉洞まつり」の2日目にMAN WITH A MISSIONのトーキョータナカさんとTOSHI-LOWさんが出演してくださり、我々の想いを叶えてくださったことです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

とくにはありません。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

毎回、全国各地から活動の参加者がみえられます。このことは「町の皆さんにも伝えていかなければ」という想いだけです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

とても頼もしく助けられています。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

これからは季節によって、あらゆる状況の変化もあると思いますが、幡再の活動を町へ繋げてほしいと思います。

――読者に一言あればお願いします。

薪割りは地元の方々の貴重な資源であり、欠かすことのできない暮らしの必需品です。幡再の活動は高齢者同士の支え合いになり、大きな支援になっていると思います。

被害の大きかった安家は、町の中心部からもまだ奥先にあります。この冊子を読んでくださるひとりでも多くの方に訪れてほしいと思います。

「最初から参加していれば良かったな…」

高橋生大
青森県出身
／青森県在住
米軍三沢基地 従業員

閉園した「小渕浜みかん公園」にも足繁く通い、
岩泉へも青森県から片道3時間をかけて通う家族で高橋さん。
幡ヶ谷再生大学との出会い、継続的に活動へ参加するその想いを訊きました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

学長（TOSHI-LOW）が幡再のことを「ダメはダメなりに、馬鹿は馬鹿なりに、馬鹿なんだけどちょっとだけ良い馬鹿になれれば…」という言葉にピンときました。テレビかDVDだか…何で見たかはちょっと忘れてしまいましたが(笑)

――岩泉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

岩泉の活動が始まる半年くらい前だったと記憶しているのですが、小渕浜みかん公園で

ユカリさんに岩泉のことを教えてもらったのが最初でした。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

ユカリさんに教えてもらったのもそうですが、岩手県は私の住む青森の隣県で、岩泉には日本三大鍾乳洞と言われる龍泉洞という有名な観光地があるにも関わらず、一度も行ったことがない場所に興味がありました。単純に青森からだと、一番近い幡再の現場でしたので「継続して行ける」と思いました。それでも片道3時間かかりますが(笑)

――初参加のときの感慨を教えてください。

青森の仲間数人で、車で向かったのですが、道路沿いにずっと川が流れていて透明感があってすごくきれいだなぁと思った反面、川沿いの道路、橋、家屋などが壊れたままの状態で自然の脅威も同時に感じました。

――どのような活動をされたか教えてください。

岩泉では多くの家庭で薪ストーブを使っておりまして、台風被害で出た流木を利用して燃料用の薪を斧や機械を使って割ったり、その薪を軽トラックで町内の各家庭に配ったりしている地元団体のお手伝いでした。

現場では80代90代の大先輩方が元気に作業をされていて、最初はお手伝いというか逆に足手まといになっていたような気がします…。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

割った薪を軽トラに乗せて配達したとき、そのお宅の80代くらいのお父さんにとても感謝されたことです。軽トラを走らせてミラーを見たら何度もお辞儀している姿を見たとき、とても嬉しかったです。「また来よう」と思いました。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。



嫌な経験ではないのですが、「龍泉洞まつり2019」で幡再ブースの出展の下調べに2019年4月下旬に行きました。その帰りの峠道で季節外れの雪が降り、恐る恐る車を走らせたことがちょっと怖かったです。

スタッドレスタイヤから普通のタイヤに履き替えていましたので、恐怖でした…。ユカリさんも言っていますが「家に着くまでが幡再」です。事故や怪我にはくれぐれも注意していきたいですね。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

正直なところ情熱と言われると…あまり無いですね(笑)。皆さんいろんな想いで足を運んでいると思いますが、自分はあまり気負わず時間と距離はちょっとだけ無理をして遊びに行く感覚ですよ。それでも「誰かのためになれれば」という想いですね。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

幡再の活動はもちろん知っていたのですが、自分のちょっとひねくれた考えで「そのうち震災が風化して幡再の参加者も減るだろう、そのときが自分の出番だ！」なんて馬鹿な考えが当初ありました。

ですが実際、小渕浜に参加し何度か行っているうちに「あぁ、最初から参加していれば良かったな…」と今でも後悔しています。そういう空間を作り出してくれる幡再の現場は素晴らしいと思います。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

本当はこの先災害がなくなり、幡再の現場もこれ以上増えなければ良いのですが、それは無理な話で自然災害は大なり小なり毎年のように起こりますよね。まだまだ幡ヶ谷再生大学の出番はありますし、今後も継続して活動し過去の災害も風化させないように被災地に寄り添っていきたいです。

――読者に一言あればお願いします。

人それぞれいろいろな事情があり、現場へ行きたいけど行けない方、募金してくれる方、グッズを買ってくれる方、ブースに寄って写真を見てくれる方、冊子を読んでくれる方、僕はみんなが幡再生だと思っています。

また、幡再に参加するようになって嬉しいことは、友達が一気に増えて東北のフェスやライブハウスへ行くと必ず知り合いがいます。それ以上に嬉しいのは、家族で参加することが多いのですが、みかん公園へ通っているうちに子供同士が仲良くなって「誰々ちゃんと松島に遊びに行く」とか「今度ジャニーズのライブに一緒に行ってくる」と聞くと凄く嬉しいですし、それが一番の宝です。

そしていつか参加を考えている方は、初参加といえども準備や後片付けの際、ボーッとしていると「幡再にお客さんはいないよ！」と、ユカリさんにどやされるのでご注意をください(笑)

「この新しい風を繋げていけたらと思います」

うれいら3（匿名）
神奈川県出身
／岩手県在住
岩泉デザイン会議「pure」代表理事
「おじやんこの会」代表

岩手県在住のうれいら3さんは、2011年の東日本大震災につづき、
2016年の台風10号豪雨災害で被災しました。
2つの大きな天災に見舞われて感じたこと、
幡ヶ谷再生大学との出会い、今後に期待することを訊きました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

岩手県は2011年の東日本大震災につづき、2016年8月30日台風10号豪雨災害を受け、全国からさまざまなご支援をいただきました。毎日の泥だしや毎日の生活がやっとのなか、遅々として復興が進まない状況でMAN WITH A MISSIONのトーキョータナカさん（Hatasai Magazine Vol.7 P.34）がいち早く、ストーブ300台と掃除機を届けてくださいました。

早い時期から寒さが押し寄せる岩手では本当にうれしく、感謝、感謝でした。なんとか御礼を伝えられないだろうか、気持ちを現せないだろうか。岩泉の感謝を伝えたいとの思いで動いていました。それが、みんなの力にもなると思ったからでした。

そんな折、ユカリさんとの出会いがありました。「幡ヶ谷再生大学」という名前も、そのとき、初めて知りました。

幡ヶ谷再生大学ってなに？ なにをしているの？「？？？」だらけでした。

ただ、ユカリさんの飄々とした、それでいて包み込むような人間力に安心感を覚えました。誤解を恐れずに言わせていただきますと2011年から復興に乗じて、変な人もたくさんいましたから…。

――岩泉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

自分たちでできること。幡ヶ谷再生大学ができることなどをユカリさんと何度も話し合い、何度も足を運んでいただきました。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

岩泉に住んでいない方々が、岩泉のために動いてくださろうとしているのに、町民として「傍観しているわけにはいかない」という想いでした。

――初参加のときの感慨を教えてください。

SNSを活用し、全国への働きかけ、マンパワーの凄さを改めて感じました。

みなさんの温かさ、応援する気持ちに力をいただきました。

――どのような活動をされたか教えてください。

応援に来てくださるみなさんが活動しやすいように事前に準備したり、人との繋がり、ご飯の準備などをしました。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

活動の参加者が災害や被害の状況をすぐにSNSで発信してくださったり、寄り添ってくださったことに尽きます。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

とくにありません。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

『pure』にしても、『おじやんこの会』にしても、岩泉が良くなるように、良い方向になるように、言いたいことを言い合い、行動するという人たちの集まりです。

それぞれ仕事もありますが、なにかお役に立てれば、時間の許す限り、体の許す限り、動きたいという想いです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

地元の人間だけでは開けることのできない扉に「穴」を開けていただき感謝しております。



す。また、労をいとわない行動には毎回、頭が下がります。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

若い人たちのさまざまな発想や繋がりには驚いています。これからも多くのことを教えていただきたいです。この新しい風を繋げていけたらと思います。

――読者に一言あればお願いします。

岩泉町は東京23区と横浜市を合わせたほどの大きさです。その地域の人口は1万人を切りました。広い地域に各集落での生活です。山に囲まれ龍泉洞（岩手県下閉伊郡岩泉町にある鍾乳洞）を有し、海を臨む水の綺麗な町です。震災や豪雨災害は想像を超えるものでしたし、自分が生きている間にこんな経験をするとは思ってもいませんでした。

水の綺麗な、水の豊富な町で２度も水の災害に遭うとは思いもしませんでした。ユカリさんと知り合い、そこから全国からいろいろな方とのご縁をいただき、人の繋がりの温かさ、強さを感じています。

何度も岩泉町までお越しいただいているトーキョータナカさんや幡ヶ谷再生大学の学長（TOSHI-LOW）さんの応援には、申し訳ない気持ちと感謝の気持ちでいっぱいです。

たくさんの応援、ご支援、本当にありがとうございます。岩泉を代表するわけではありませんが、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この冊子を読んでくださる方のひとりでも多くの方に、ぜひ岩泉へ足を運んでいただきたいですね。

「互いの違いを認め合いながら、いろいろなことを考えて、楽しく活動ができたら」

ミエ（匿名）
岩手県出身
／岩手県在住
会社員

2011年東日本大震災以前よりボランティア活動をつづけていたミエさんは、
岩泉での活動が始まると幡ヶ谷再生大学の活動に参加。
活動に参加する一方で、自発的にも活動をつづけるようになりました。
今後の幡ヶ谷再生大学･復興再生部、岩泉での活動に期待する想いを伺いました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2011年以前からBRAHMANやOAUの音楽に触れていましたので、自然に東日本大震災後の彼らの活動には強い関心がありました。

――岩泉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

2017年10月の朝日新聞の掲載記事がきっかけだったと思います。2016年に台風10号豪雨災害で被災された住民自らがボランティア団体「お福分けの会」を立ち上げ活動している記事を目にしました。会員の半数は仮設

住宅にお住まい、ということもあり「なにかできないか？」と思うようになりました。

そのころ幡ヶ谷再生大学のwebで、岩泉での活動を知りました。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

活動があることを知ってから予備知識として「どうして活動が薪割りなのか」を含めてネットなどで情報を収集しました。

すると、薪割りボランティアに入る地域はとくに高齢化が進み、援助がむずかしいのが現状ということや、台風10号は東日本大震災や2016年の熊本地震と比較し、エリアや被災規模から従来の水害に対する支援がベースになっていることを私なりに理解していました。

また、財源の確保が非常にきびしい状況を知り「少しでも力になれれば」と思いました。

――初参加のときの感想を教えてください。

薪割りの活動をきっかけに、地元の方々と楽しく交流を続けながらお話をし、当座の生活で不自由を感じていることがあれば解決に向けて、お手伝いの幅を広げ、繋げていく活動をしているものと考えておりました。

そんな考えで現場に入りましたが時期的にタイミングが悪かったようでして、薪割りをしている地元の方はいらっしゃらず、幡再生だけでの薪割りでした（笑）

――どのような活動をされたか教えてください。

2018年4月の初参加から数回続けて参加しましたが、幡再生を中心に地元の方はひとり…ふたり…といった状況でした。当然、薪の需要の調整がなされている現場だと思い参加していましたが、年度の切り替わる時期と重なり行政から地元ボランティア団体や業者に出ていた復興予算が保留になっていたために薪にするための流木の追加補充もなく、地元の方との活動はおろか、薪割りの活動さえ危ぶまれる状況となりました。

そういったなか工事関係の仕事をしている幡再生から、復興河川工事で伐採し処分された木や流木を無償で提供してもらいながら活動をつづけています。いただいた木材やそれらを保管する場所の確保は簡単ではないため、地元の方と相談しながら進めています。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

岩泉での活動の原点回帰として、「地元の方の声を直接聞きたい」と思い、お顔つなぎもかねて「お茶会」を企画しました。

岩泉自主練女性3人でお邪魔し、「そもそも私たちは地元の方に必要とされているのか？」などを話し合いました。地元の方と一緒にお手伝いできることを教えて欲しい一心でした。このお茶会でいただいたアドバイスやご提案は現在でも良い道しるべになっています。そういう間柄を築けたのはいちばんうれしかったです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

岩泉での活動の初期から支えてくれている幡ヶ谷再生大学の自主練生の先輩方と、地元の方からいただいた情報を共有しています。ご高齢の被災者の方々が生活再建で行き詰まっているという話も耳にします。

「地元の方々と今後なにをしていくのか？」とみんなで集まり掘り下げて話をする機会がなかなかないことにもどかしさを感じております。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

私は東日本大震災前から、その後も自分の時間があるときには公的機関を通して活動やNPO団体などでのボランティアをさせていただいておりました。

私が幡ヶ谷再生大学で活動してみようと思ったのは、自主性や主体性を尊重してくれる場所だからでした。また、幡ヶ谷再生大学の基本理念とする「人間として気高く生きる道を選択します」の言葉に心を深く動かされたからです。

お茶会の際にご紹介いただき、現在も仮設住宅に住み、女性ひとりで農業をつづけている農家さんに受け入れていただき、薪割りのほかに週1回のペースで草刈りやビニールハウス内の草取りなどのお手伝いをさせていただいております。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

現在、私は岩泉の自然のなかで「癒し」を感じながら、楽しく活動をしています。最近、現地の方から「うちでも手伝ってほしいことがある」と声をかけてもらいました。

その経験があってから、「幡ヶ谷再生大学の求められる姿はこのようなものではないか？」と感じています。

その想いを教えていただいた幡ヶ谷再生大学には感謝の気持ちでいっぱいです。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

私は「全国各地の幡ヶ谷再生大学の仲間と繋がっている」と考えています。そう思える仲間がひとりでも増えていくことを期待しております。

――読者に一言あればお願いします。



たくさんのことを知り、学び、直接触れて、感じて、互いの違いを認め合いながら、いろいろなことを考えて、楽しく幡ヶ谷再生大学の活動、自主練の活動ができたらいいな、と思っています。

内容はなんであれ、一人ひとりが自主的に主体的に地域の方々と一緒に多様な課題に取り組んでいくことが重要に思います。

それによりさまざまな発見やアイデアや解決策が生まれてくるのだと思います。幡ヶ谷再生大学・復興再生部の基本理念を深め、これからの未来、子供たちのためにも、将来につながる自発的な社会貢献をしていけたらいいなと思っています。

できる人が、できるときに、できることを。

「『ありがとう』の言葉と、たくさんの『笑顔』に出逢わせてくれた場所」

藤根果歩
岩手県出身
／岩手県在住
接客業

多くの方が「幡ヶ谷再生大学」をSNSやWebを通じて知る中、
「言葉」で知った藤根さん。
行動に移した先に待っていた悦び、心境の変化を訊きました。



――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

LIVEでCOUNTER ACTION MIYAKO（岩手県宮古市にある東北ライブハウス大作戦のライブハウス）に行った際、ユカリさんがステージで「幡ヶ谷再生大学」のお話をしてくださり、そこで知りました。

――岩泉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

幡ヶ谷再生大学のTwitterで知りました。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

各地の活動をTwitterで拝見していましたが、ユカリさんより「見ているだけじゃなく自分の目で見て、現地に行ってみないとわからないこともある」と言われ、その言葉がきっかけです。

――初参加のときの感慨を教えてください。

最初は大船渡KESEN ROCK FREAKS（岩手県大船渡市にある東北ライブハウス大作戦のライブハウス）の木札貼りに参加しました。震災の爪痕が残る中、少しずつ復興している街に新しくライブハウスが建ち、1枚1枚皆さんの想いが詰まった木札を壁一面に貼っていく。

この作業に携われたことやその場所に行けたことは、今でも私にとって大切な日です。またいろんな景色を見ていきたいですね。

――どのような活動をされたか教えてください。

主に岩泉では薪割り活動をしました。台風10号の災害で出た流木がたくさんあり、機械で切断したり、斧を使って割る作業をしました。初めての斧での薪割りはなかなか割れず苦戦しましたが、コツをつかみ徐々に割れるようになりました。

次の日の筋肉痛は大変ですね（笑）

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

活動していく中で地元の方とお会いするたび、「誰かに会うことも少なく、こうしてみんなと話せるだけでも楽しい…また来てね」と言われた時が印象に残っています。

いつも笑顔が絶えなくて、そこに行って話すだけでも温かい言葉を掛けてくださり、元気をもらっています。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌な経験はありませんよ。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。

その情熱はどのようなものでしょうか。

その場所、場所に会いたい人がいるからですかね。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

「ありがとう」の言葉と、たくさんの「笑顔」に出会わせてくれた場所です。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

この先もずっと続いて欲しいです。これからも寄り添い続けます。

――読者に一言あればお願いします。

「繋がる」ということを改めて感じる場所だと思っています。なにかをきっかけにして参加してみてもらえれば、と思っています。

「何かに突き動かされた感じがして『今からでも何かしよう』と」

新田義徳
岩手県出身
／岩手県在住
建設業

岩手県在住ながら、2011年東日本大震災も
2016年台風10号による被災を免れた新田（しんでん）さん。
幡ヶ谷再生大学との出会い、その後の活動で得た絆…。
今後起こりうる災害に対しての心持ちを訊きました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

「POWER STOCK IN MIYAKO 2017」（岩手県宮古市で開催された音楽イベント。以下、パワスト宮古）のときに知りました。「なぜ大学がブース出しているの？」と思ったのがきっかけでした（笑）

――岩手県・岩泉町での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

パワスト宮古のあと、ネットで幡再を検索するうちにTwitterをみつけてフォローしました。それから少し経ったころに岩泉の募集がかかったと思います。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

2011年の震災も2016年の台風10号も自分は運良く被害はほとんどありませんでした。仕事が建設業ですので、両災害とも初期段階から復旧に携わっていたものの、ボランティアとしては活動しませんでした。

どちらかというと、それを“偽善”と捉えて動かない側でしたが、「やらない自分」に対してなんとなくモヤモヤしていました。そんな折に娘の付き添いで行ったパワスト宮古で見た若者たちの“押しくらまんじゅう”や、人の上を人が転がる異様な光景は強烈でした。さらに観客の上に乗り、歌う“鬼”（TOSHI-LOWの愛称）の姿には驚愕でした（笑）。“鬼”の語る一言一言が心に響き、「今からでも何かしよう」と突き動かされた感じがしました。その“鬼”がのちに幡再の学長だったのはその後に知り、良くも悪くも驚愕でした（笑）

――初参加のときの感慨を教えてください。

初参加の日、少し遅刻してしまったのですが、皆で和気あいあいと食事の準備をしていました。少々人見知りな自分は雰囲気について行けず、気後れしたのを覚えています…。

――どのような活動をされたか教えてください。

岩泉の冬は厳しく、薪が冬には欠かせないものだということは聞いておりましたので、地域の自治会の皆さまのお手伝いとして、災害で出た流木を割って薪にする薪割りと、薪の配布です。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

会長さんから、「個人的にでも来て手伝ってくれ」と言われました。人の役に立てたのが実感できてうれしかったです。その後、２回ほど伺わせていただきました。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

それはありません。あ、強いて言うなら、勘違いとか意見の相違から起こる仲間割れのような現象、ですかね（笑）。とは言え、全員が想いをもった幡再生ですので、ボタンの掛け違いだと私は思っています。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

単純に薪割りが楽しいからです（笑）。私だけでなく、参加してくれた皆が楽しいと言っています。あと、近隣から参加しているのは自分と何人かしかいないため、地元としての責任感みたいなものもあるように感じます。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

他のボランティア経験がほとんどないのですが、今後いつ起こるかわからない災害に対しても、“ここで築けた繋がりやネットワークで対処できるように”と思って活動をしています。いつか全国で開催されている自主練にも行ってみたいと思っています。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

期待も何も…娘も参加させていただいておりますので、親子共々よろしくお願い致します、といった心境です。

――読者に一言あればお願いします。

幡再の活動に参加させていただいてはおりますが、いまだに「幡ヶ谷再生大学とは何か？」の答えは、わかり兼ねる心境でおります。活動で出会った仲間たちと今後も追求していきたいと思います。岩泉でお待ちしております。



「『自分だって何かできるんじゃないか?』と誰かが動くキッカケに…」

千田泰伸
岩手県出身
／岩手県在住
萬福食堂

萬福食堂のオーナー千田さんは東北地方のフェスでの出店や、
これまでに幡ヶ谷再生大学の活動での昼食も幾度となく提供していただきました。
岩手県で経営をすること、
幡再のみならず支援活動に参加することの意味を訊きました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2011年９月石巻にRaccoさん（IdolPunch：RACCOS BURGER／RACCOS BAR：主宰）のお手伝いで行かせてもらいユカリさんに出会いました。

――岩泉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

トーキョータナカさん（Hatasai Magazine Vol.6 P.34）に「岩泉ニ、ヒーターヲ届ケタイ」と言われ、その運転手として同行させていただいたのが最初でした。

――活動へ行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

宮古のおっかないけど大好きな先輩・吉見兄さん（P.93）が先頭切って動いていたからです。



――初参加のときの感慨を教えてください。

自分にできる事は「何か」を考えました。

――どのような活動をされたか教えてください。

自分の職種を生かし、参加される皆さんの胃袋をほんの少しですが満たすことができるよう努めました。

――作業を通じ、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

大した腕ではないですが、自分の作った料理で皆さんの笑顔をいただけた事です。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌なことがあれば本人に直接伝えているので、ここに書く内容はありません。

――各地でのフェスや幡ヶ谷再生大学の東北各地での活動の昼食を作りに継続して来ていただいております。その情熱はどのようなものでしょうか。

震災後、多くのご縁をいただき、名だたるバンドマンの方々がこんな自分にチューニングを合わせてくれてお付き合いくださっています。それがキッカケでファンの方々もご来店してくださるようになりました。

「自分の力による売上ではない」ので、被災した方々が必ず笑顔になるキッカケのための「使うべき売上」として実行しています。

吹けば飛ぶようなたかだか数坪の小さなお店ですが、こんなお店のこんなクソみたいな人間でも動けるのなら、「自分だって何かできるんじゃないか？」と誰かが動くキッカケになってもらえたら、と考えております。



そういう方が増えたら、もっともっと被災した方々の心をひとりでも多く救えるんじゃないかと思っております。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

尊敬するユカリさんやおっかないけど大好きな吉見兄さんの頼まれごとは基本「YES」か「はい」しか返事は用意していませんので、今後も必要とされればいつでも動ける準備はしております。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

誰に対しても過度な期待はしておりません。

――読者に一言あればお願いします。

「できる人が、できる時に、できるだけできることを」で良いと考えております。










Welcome


岩手日報 2016年（平成28年）11月20日（日曜日）
善意の暖房300台 岩泉へ
“オオカミ”バンドの「マンウィズ」






















橘ヶ谷再生大学
















日本三大鍾乳洞
龍泉洞

小渕浜FINAL

2013年4月29日に公園作りに着手し、
2014年1月に完成した「小渕浜子供広場」は
同4月29日にお披露目会を開催しました。
その後2015年10月「小渕浜みかん公園」に改名。
たくさんの想いが詰まった公園は2017年11月19日に役目を終え、
2018年6月3日に「閉園式」が開催されました。



「これからも笑顔が増える場で あって欲しいです」

小池智美
宮城県出身
／埼玉県在住
会社員



公園のあったあの場所で生まれ育ち、
公園作りから閉園式までの5年間を見守りつづけた小池智美さんに、
幡ヶ谷再生大学とともに過ごした日々を話してもらいました。

――2013年から2014年に公園作りに着手し、2017年11月19日にその役目を終えました。ふり返るとどのような月日でしたか？

最初に美輝くん（Hatasai Magazine Special Issue P.20）から公園の話が出て、自宅の跡地の使用許可を取りに、ユカリさんと学長（TOSHI-LOW）とりょうさんが、当時住んでいた「みなし仮設」まで挨拶に来てくれました。

作業は土地の整地からで、当時赤い髪だった難波さん（Hi-STANDARD／NAMBA69）が重機を運転して土を運ぶ姿がすごく印象に残っています。その後、壁の絵や遊具、花壇もできて、津波に流されて解体された自宅のあった土地が荒地になって見るたび悲しくなっていた場所が、多くの人の手でどんどん公園らしくなるごとに大好きな場所に変わっていきました。でも、子供たちが成長とともに公園で遊ばなくなってしまい、踏まれない土地は雑草が育ちやすく荒れていってしまいました。

遊ぶ子供たちがいないのに公園続けていくか悩みました。

「続けよう」と決めて、美輝くんと草取りを計画したけど人が集まらなくて、地元で活動しているボランティアの方に手伝ってもらったりしても、なかなかうまくいかなかったです。

そんな時に学長や細美さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.117：MONOEYES／the HIATUS ／ ELLEGARDEN）が草むしりに来てくれました。また、MONO EYESで来てくれたときの細美さんの何気ない一言から「みかん公園」っていう名前で再スタートしました。

そのような経緯もあり、ベンチを作ってくれる人がいたり、植物に詳しい人がいたり、活動の時に率先して手伝ってくれる人たちも少しずつ増えていきました。

そのころからですかね…。なかなか進まなかった街全体の高台移転の話が進み、「いよいよ公園の役目も終わりか…」と話し合い、少しずつ整理を始めていく中で運動会の話が出て、いつも手伝ってくれていた人たちと実行委員を立ち上げて第一回目の運動会をやることになりました。

やってみたら面白くて、みんなの笑顔が溢れていて、公園が無くなっても「こうやって楽しいことで繋がっていけたら良いな」という希望になっていきました。

遊具の撤去や絵が描かれた壁を解体するときはすごく寂しい気持ちと、これまで集まってくれた“近隣”の人たちに「最後の解体作業になるから助けて」とお願いしたら、皆さんすぐに駆けつけてくれました。

遊具解体の時は、いわきの内郷げんこつ会（Hatasai Magazine Vol.5 P.10）とミーワムーラ（Hatasai Magazine Vol.6 P.42）の手際の良さに感動して、抱えていた寂しさが和らぎました。

人見知りで人と接することが苦手だった自分が、たくさんの人と出会う日々で、悩んだり、疲れてしまったときもありましたが、一生の宝物みたいな出会いだと思っています。

なかなか会えなくても、大好きな人が日本中にいて心強いです。そういう場を作ってもらえた事に感謝しています。

――幡ヶ谷再生大学にとっても、公園作りに携わった多くの方々にとっても、たくさんの思い出が詰まった場所だと思います。「なくなる」ことが決定したときのことを教えてください。

はじめからこんなに長く続くとは、正直誰も思っていなかったんです。もっと早く高台移転が進んで、「新しい公園もできあがって役目を終えるんだろうな」と思っていました。

でも、なかなか高台移転が進まなくて、新しい公園もできなくて…そんな中で子供たちも成長して公園を必要とする年代の小学生が小渕浜にゼロになった時に「一回、公園をどうする？」と話にはなったんですが、最終的に「高台移転が正式に決まるまでは続けよう」となりました。

やがて高台移転が決まり、仮設住宅もなくなるタイミングで「役目を終わらせても良いんじゃないか」という話になりました。あの頃も、現在でも「必要なくなるということは、前進」だと受け止めています。

でもやっぱり、たくさんの人の想いを感じていたので簡単には決断できませんでした。

――とくに印象に残っているうれしいことがあれば教えてください。

たくさんありますが…お披露目会（2014年4月29日）のときに、ちっちゃい子が突然走ってきて「公園ありがとう」と言ってくれたんですよ。そのときはすごくうれしかったですし、とくに印象に残っています。ですが、公園で見せてくれる子供たちの笑顔が1番の喜びでした。

――残念に思ったこともあれば教えてください。

これまで、多くの方に球根やお花をいただいたのですが、潮風の影響と鹿の被害もあり…たくさんダメにしてしまったことが本当に申し訳なく思いましたし、残念に感じました。

――2018年6月3日に閉園式が行われました。たくさんの仲間やお客さんが集まりました。そのときにどのような感情を抱いたか教えてください。

閉園式の時は準備や進行で頭がいっぱいで、正直何かを感じる余裕があまりなかったのですが、BRAHMANの4人が揃ってステージに現れて「ナミノウタゲ」を演奏してくれた時は涙が出ました。

笠間コブラ会の内藤武敏さんの発案でタイムカプセルを埋めることになって、内藤さんが作ってくれた石碑をその上に置いたときに「10年後もこうやってみんなで笑いながら集まりたい」と心から思いました。「公園だから楽しく」と活動してきたので、楽しく終われて良かったです。

余談ですが、その後ORANGE RANGEのYOHさん（Hatasai Magazine Vol.5 P.）が遊びに来てくれた時に公園へ行ったら、タイムカプセルを埋めた場所が陥没していました。

沖縄県から何度も小渕浜まで足を運んでくれたYOHさんと一緒に修復したのが、すごく良い思い出になりました。最後の活動にも、閉園式にも来てくれたYOHさんと作業ができたのは本当に感慨深くもありました。

――その後2回目の運動会が、みかん公園ではなく石巻市立・大原小学校で開催されましたね。あの公園で知り合ったたくさんの仲間が楽しむ姿を見て、微笑ましくも、寂しさみたいなものはありましたか？

寂しさはなかったんですよ。ただ公園のあの狭さでしたので、第1回目は「アットホームな雰囲気で楽しい運動会ができた」と感じていた部分はあったので、「広い校庭ではどうかな」と心配はしていました。

でも、やってみたらやっぱり楽しくて、笑顔いっぱいでその心配は吹き飛びました。

――2019年8月には「ISHINOMAKI BUCHI ROCK」が開催されますね。「みかん公園」を経て、小渕浜自身が主催するフェスです。どのような感慨をお持ちでしょうか。

素直にうれしいです。出演者もそうですが、その場所で出会った方がたくさん関わってくれます。きっと来てくれるお客さんも小渕浜に来たことあるとか、ないとか関係なく、想いを寄せてくれて集まってくれる方々だと思いますので楽しみにしています。

――今後の幡ヶ谷再生大学に期待するものがあればお聞かせください。

幡再の活動の場が増えているという事は、裏を返せば被災地が増えている事ですが、私たちがそうであったように、これからも笑顔が増える場であってほしいです。

――読者に一言お願い致します。

2011年以降、生きていると笑えない時をたくさん経験しました。それでも「なるべく笑って過ごせたら良いな」と無理してでも笑おうって決めていました。

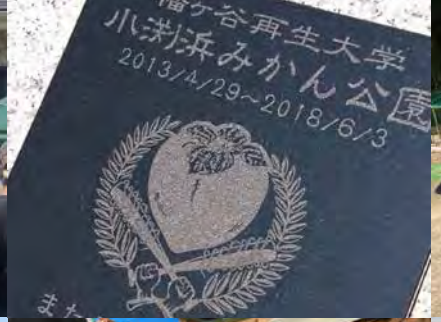
実際は笑えない日も多かったのですが、幡再の皆さんと接するうちに自然に笑みが生まれるようになりました。私は現在、小渕浜を離れ他県で生活しています。想像していた以上に寂しくてびっくりしたのですが、ふとした瞬間に幡再の皆さんと過ごした日々を思い出し、励まされています。

素敵な思い出を作っていただき、感謝しています。「全員と思い出話をしたい！」という気持ちです。

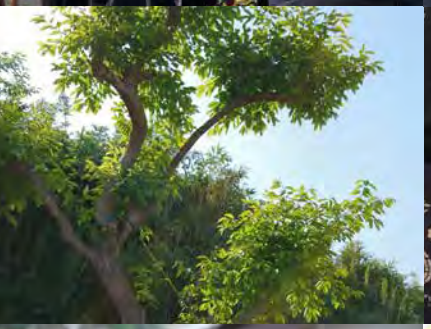
災害は毎年、全国各地で頻発しています。これから幡再が入る地域には、私のような人がたくさん生まれているのではないでしょうか。

皆さんと、また笑顔でお会いしたいです。どこかで見かけたら声をかけてください。





橘ヶ谷再生大学
小渕浜みかん公園
2013/4/29~2018/6/3








公園
コチラ


2018
6.3
みかん公園
用園会
美輝
Campus




小渕浜










木札 with a mission

2017年に発生した九州北部豪雨は、土砂崩れによる大量の流木が大きな被害をもたらしました。
福岡では20万トンとも推計され、過去最大級の流木災害とも言われ大量の土砂や木っ端ととも何層にも重なった流木の山。
たくさんの人の想いと行動、笑顔や思い出を九州と東北を繋ぐ東北ライブハウス大作戦の木札へ、学長命名の【木札with a mission】として新たな役目を持って再生します。

東北ライブハウス大作戦と木札作戦とは?
2011年東日本大震災で被害を受けた東北三陸沖沿岸地域にライブハウスを設立するプロジェクト「東北ライブハウス大作戦」で、ご賛同の方に1口￥5,000での募金協力をお願いする【木札作戦】を展開中。木札に記名し、KLUB COUNTER ACTION MIYAKO・KESEN ROCK FREAKS・BLUE RESISTANCEの各ライブハウス内の壁をみんなの木札で作っていくという作戦。福島県の猪苗代野外音楽堂でも木札をパネルにて展示中。



「『カタチになれば』という不安は常にありました」

末金伸一
福岡県出身
／福岡県在住
製材業・材木商

九州北部豪雨の被害に遭いながらも「末金製材所」を営業しつづけた末金さん。
当時の状況、幡ヶ谷再生大学との出会い、
製材所に持ち込まれた流木が「東北ライブハウス大作戦」の
木札へとなる過程を伺いました。

――2017年の災害直後の状況を教えてください。

梅雨特有天候でしたが、突如半日に渡り局所的豪雨に変化していきました。福岡県朝倉市から東峰村の山間部や中山間地に降りつづいた雨により、谷川（谷筋）ごとに、山肌の土砂崩れ、森林からの樹木流出がおき、泥と流木と濁りきった雨水が河川を氾濫させ、幹線道路が川のように激変していったのを記憶しております。

雨水が工場・建屋内に小石や砂泥とともに流入していきました。道路に面した倉庫建屋の前面開口部から流入した雨水は、建屋壁面や裏手開口部より流出していき、倉庫の壁面等は水流により破損しました。

最深部で20センチほどの水深があり、製品（商品）が浸水していきました。コンセントも漏電し、電気配線がショートしました。電気設備・製造設備等も水濡れや異常な数度の落雷により廃棄処分にせざるを得ない状況でした。

ついで河川の堤防や砂防ダム・水稲用の溜池（堤）の決壊が重なり、人家の破壊・浸水、幹線道路の水没・陥没、橋の流出、停電などが市内各所で発生しました。

当方の自宅は高台のため、損壊などは免れましたが停電のなか自宅を開放し、帰宅困難になった人々を受け入れ、一昼夜を過ごしました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

幡再の支援活動がボランティアで活動されているのは朝倉市での活動を聞き、存じておりました。ですが、依頼された作業は「通常業務としてお願いできないか」というものでした。また、「通常営業に支障がないように」との気遣いもあり、お話を詳しく聞かせていただきました。

――朝倉での幡ヶ谷再生大学の活動を知った経緯を教えてください。

近隣の農地や畑地に折り重なった「流木を使った支援活動ができないか」との打診がありました。詳細はわかりかねましたが「できることがあればやります」といったスタンスでした。

――流木は本来、「使い物にならない」、製材所では受け入れないと聞いたことがあります。

流木は、中の細胞が破断していたり、砂利を噛んでいたりしており、製材刃物を損傷することから、受け入れすることがないのは事実です。しかしながら、幡再の支援活動の内容を聞いてみると「表面の砂利は洗浄する」「持

ち込みや引き取りも自分たち自身の手と体を使って行う」と極力私どもに迷惑を掛けないというものでした。

支援の片付けを行っている畑から自分たちの力で移動し、軽トラック5台分積み込み、当方へ持ち込んでくれました。そこから丸太の流木を木札用に板挽きする作業を行っていきました。

しかし、製材は一工程に過ぎず「乾燥・カンナがけ･切り出し･刻印などは幡再メンバーで行う」というものでしたのでお任せしました。正直「カタチになれば」という不安は常にありました。

――加工された流木が「東北ライブハウス大作戦」の「木札」になっていくことにどのような感慨をお持ちになりましたでしょうか。

「支援できるほどの効果があるのか」と不安しかありませんでした。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

一生懸命に支援しようとしているメンバーの気持ちや行動力が、1つずつカタチになっていくのを感じ､行動力のすごさを感じました。不安もありましたが、木札は軒並み完売し作業の追加が発生したのは嬉しさというより驚きのほうが大きかったです。

――幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

とくにありません。

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

活動を通し、とても感じ入りましたし、感服しました。

――これから幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

例年､災害が発生している場所にネットワークと組織力で、即座に駆けつけ、長年に渡る支援活動を行っているわけですよね。すばらしい、の一言です。

――読者に一言あればお願いします。

当方にとってはただの通常作業でしたが、幡ヶ谷再生大学のメンバーが一番大変な作業を受け持ち、通常作業にしてくれたということに、一方的でないボランティアのあり方、支援のあり方を考えさせられました。
思いやりや思慮深さ､行動力には感服しました。





「活動の息の長さ、見捨てない活動に、幡ヶ谷再生大学という名前の意味がある」

西片明人
新潟県出身
／東京都在住
ライブサウンドエンジニア
／SPC Peak Performance代表
／東北ライブハウス大作戦・本部長

ライブサウンドエンジニア集団SPC Peak Performanceの代表として、
バンドマンと全国のライブハウスを駆け回る日々を送っている西片さん。
東日本大震災が起こると「東北ライブハウス大作戦」を立ち上げ、
現在では岩手県宮古市に「KLUB COUNTER ACTION MIYAKO」、
大船渡市に「KESEN ROCK FREAKS」、
宮城県石巻市に「BLUE RESISTANCE」の3箇所のライブハウス、
福島県・猪苗代湖の湖畔に「猪苗代野外音楽堂」を建設し、支えています。
仲間として、チームとして2011年3月11日から
幡ヶ谷再生大学と共に歩んだ日々、「繋ぐ」想いを訊きました。

――2011年、タクティクス（tactics records／BRAHMAN・OAUが所属する音楽レーベル）で支援物資の募集が始まり、実質的に「幡ヶ谷再生大学・復興再生部」の活動がスタートしたわけですが、自身で経営するSPCの事務所でも支援物資の募集をしていましたね。

8年経った現在、ふり返るとどのような心境でしょうか。

なにをどうしていいかわからなかったね。地震があって、津波があって、2週間後に仙台の若林（宮城県仙台市若林区）あたりまで行ったんだよね。それから1カ月後に宮古（岩手県）の仲間たちに会いに行ったのが4月だから…一ヶ月、ちょうど1カ月くらいはなにもできてなかった。

タクティクスに物資持って行ったり､サポートしたりしていたね。後方支援だけだった。

――その後、「東北ライブハウス大作戦」を立ち上げ、現在では東北に3箇所のライブハ



ウスと猪苗代湖の湖畔に野外音楽堂があります。その4箇所に『木札with a mission』によって木札が各地に送られました。

『木札with a mission』の概要を初めて聞いたときの心境をお聞かせください。

いいアイデアだと思ったよ。そのアイデア自体は、以前からあったのね。「朝倉の流木、なにとかならないかね」みたいなことは聞いていて、猪苗代野外音楽堂（福島県）の「デコレーションやアートみたいなものに使えないかな」っていうのはふわっとはあった。その後、ユカリさんから「現地の材木屋さんと繋がったからいろいろなことができるよ」って聞かされたので、「ぜひお願いします」って返事をしたの。そこからとんとん拍子で進んだけど、漠然としたものはあったかな。

――それはどうしてでしょうか。

実際に現地へ行かないとわかんないのよ。現場に行かないと、そのアイデア自体が浮かばない。その意味ではユカリさんは、災害があった地域にいち早く入って状況を教えて情報を共有してくれる人なので、そこでのアイデアは安心して委ねられる存在だった。やっぱりその場所に行かないとわからないから。自分も時間とタイミングが合えば行っているけど、ユカリさんやTOSHI-LOW（学長）に比べたら全然現地には行けてないほうだと思うよ。

現場に入った人からのアイデアは絶対、って言っていいほど信頼をおけるものだからね。

――この冊子を作成中、天災の猛威を経験した東北と九州が繋がったことへのうれしさや感謝の言葉がみなさんから聞かれました。西片さん自身、現在どのような心境でいるか、お聞かせください。

こちらこそ「ありがとうございました」という気持ちでいます。東北ライブハウス大作戦は『木札with a mission』で助けてもらっている側だからね。それに、いいタイミングでみんな（TEAM BRAHMAN）で現地を見ることができたし、少しでも現地で活動して、工場まで行けたのは良かった。

――これまでの冊子のなかで「東北ライブハウス大作戦」が入り口で幡ヶ谷再生大学を知った人。その逆パターンの方もいました。

また『木札with a mission』は、「幡ヶ谷再生大学をやりつつ東北ライブハウス大作戦と絡めたってことがすごくうれしい」という感謝の言葉を口にする人が多かったです。

西片さんにとって「幡ヶ谷再生大学」はどのような存在でしょうか。

元々は遊びのサークルだったから、そこで



一緒に遊んでいて、そこからいろいろ派生していったものだと思ってはいる。でも、今はサークルの枠ではないし、法人化もしている。自分の居場所でもあるし、助けたり、助けてもらったりできる場所だと思っている。

元々、幡ヶ谷再生大学は仲間意識が強いところだし、「互いに支援し合う」という形が生まれてくるのは理想の形だと思うよ。

たとえば現在、全国の音楽フェスティバル（以下、フェス）会場で東北ライブハウス大作戦のブースを展開させてもらっているけど、幡ヶ谷再生大学がフェスでブースを展開していることの入り口が「東北ライブハウス大作戦」でもあったのね。いまやフェスで「東北ライブハウス大作戦がブースを出さなくても、幡ヶ谷再生大学が出している」みたいになっているしね。

幡ヶ谷再生大学は居場所でもあり、お互い支え合える場所でもあり、刺激をもらえる団体でもある。何でも相談できるしね。

――東北ライブハウス大作戦では「繋ぐ」という言葉がホームページのトップに出てきます。個人的にですがSNSやネットなどが普及し、人間関係が希薄になってしまった印象があります。

「繋ぐ」に込められた意味を教えてください。

人と人との繋がり…。いろいろあるだろうなとは思うけど…どういう繋がりでもいいと思うよ。同じところを見つける必要はないと思うし…というより、質問が漠然としすぎてるよ（笑）

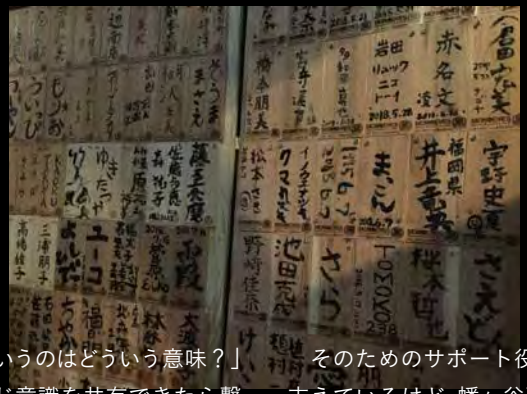
――すみません（笑）。個人的にですが、現代はSNSが普及した弊害で「本当に繋がっているのかな」と不安になっている印象を個人的に受けます。

「SNSのみの関係だとか、デジタルの世界でのみ繋がってはいる」。この言葉だけをとらえれば、自分はそれを「繋がっている」とは思わないかな。

ファンでもなんでも共通認識を持った人同士が実際、目と目を向き合わせたときに同じものを共有しているか、そのときに初めて「繋がる」ってことの最初の段階に踏み出せるんじゃないかと思っている。

「繋がりってどういう意味ですか」って聞かれると、SNSも繋がりってとらえることはできるよ？“くくり”で言えばね。

東北ライブハウス大作戦のキーワードで「繋ぐ」って書いてあるのは、「街が繋がって、世代が繋がって行けるような場を創りたい」というところはあるよ？ だからホームページのトップに出てくる。



じゃあ「繋がるっていうのはどういう意味？」みたいなものは、同じ意識を共有できたら繋がるっていう意味になるんじゃないかな。それはなんでもいい。SNSを否定しているわけじゃないし。その定義をどこでとらえるか。

自分の場合は、繋がる場所、自分を構築した場所がライブハウスだったからね。そこにいて、繋がりができて、初めてその言葉にできるわけで。だから「繋がりを大事にしたいですね」ということは言い続けている。

だからこそ「繋ぐ」を、東北ライブハウス大作戦のキーワードの意味でホームページのトップに書かせてもらっている。

――読者に一言お願いいたします。

幡ヶ谷再生大学は全国に自主練があり、支部があり、そこで必ず繋がりが持てるわけだよね？ そういうことは押しつけがましくじゃなくて、そういう場所をつくりさえすれば自然と人が集まって来るし、コミュニケートできる場になると思う。

東北ライブハウス大作戦の本部長として言えば、実際に東北にライブハウスっていう場所がある。今となっては存続させることのサポートに回って、いつ閉じるかを決めて動いているわけじゃないし、つくった以上はずっとあって欲しいしさ。

そのためのサポート役として形を変えつつ支えているけど、幡ヶ谷再生大学で言ったら、活動する場所がなくなった方がいいと自分は思っているんだよね。

だって、災害がない方がいいわけじゃん。災害があって、そこに活動する場があって、ただそれをいかに「先々に伝えていけるか」っていうのは大事にしていると思うから、災害があった場所で、新しいものづくりとしてなにができるかっていうのを考えながら活動しているところに幡ヶ谷再生大学の意味がすごくあると思う。

支援活動をして、被災者が「ある程度生活が元通りになりました」っていうところで手を引かない。そこで「じゃあがんばってね」って手を離さない根の張り方があると思う。

この前、フェスに行ったときに幡ヶ谷再生大学のブースで愛媛のみかんジュースが並んでいたりとか、活動をきっかけに小渕で今年フェス（ISHINOMAKI BUCHI ROCK：宮城県石巻市小渕浜漁港特設会場で2019年8月12日に開催）があったり。

そういう活動の息の長さ、見捨てない活動に、幡ヶ谷再生大学という名前の意味があるんじゃないかなとは思う。



東北ライブハウス大作戦

幡ヶ谷再生大学
木札 with a mission
〈木札で繋ぐ九州¯東北〉

幡ヶ谷再生大学復興再生部

石巻市南境自主練

石巻の年末年始の伝統文化「目玉木」に触れ、地元のお母さんたちとの会話から2011年に発生した東日本大震災の被災地の「今の姿」を感じる場を提供しております。
2015年11月より幡ヶ谷再生大学の活動を引き継ぐ形で自主練がスタート。
毎年11月に「正月飾りづくり」の募集を「石巻市南境自主練」のTwitterにて行っておりますので宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。





幡ヶ谷再生大学復興再生部

岩手岩泉自主練

2016年8月に発生した台風10号の被害に伴い、現在でも有志が集まり自主練を開催しております。
現在も本活動と平行して「岩手岩泉自主練」のTwitterにて支援活動の募集を行っておりますので、宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。

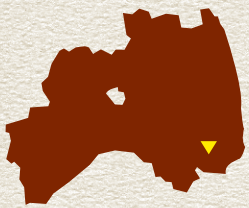




幡ヶ谷再生大学復興再生部

いわき自主練

2014年8月より、「世間の風潮や感情に流されることなく思考し、判断できるようにする」を掲げ、幡ヶ谷再生大学では福島県いわき市にある「生木葉ファーム」にて農作業などのお手伝い、勉強会を開催しております。
現在は本活動と平行して「いわき自主練」のTwitterにて支援活動の募集を行っておりますので、宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。





幡ヶ谷再生大学復興再生部

愛媛自主練

2018年7月に発生した「平成30年7月豪雨」は、西日本を中心に甚大な爪痕を残しました。幡ヶ谷再生大学では8月より、愛媛県南予地方に現地入りし支援活動を行っております。
現在も本活動と平行して「愛媛自主練」のTwitterにて支援活動の募集を行っておりますので、宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。

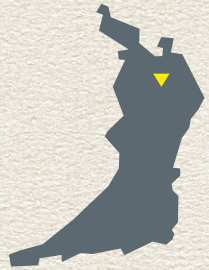




幡ヶ谷再生大学復興再生部

大阪自主練

2018年6月に発生した「大阪府北部地震」に伴い、大阪府茨木市を中心に活動を行っております。
現在も本活動と平行して「大阪自主練」のTwitterにて支援活動の募集を行っておりますので、宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。





幡ヶ谷再生大学復興再生部

九州自主練

2016年の「熊本地震」、2017年の「九州北部豪雨」の支援活動を引き継ぎ「九州自主練」として行っております。
現在も本活動と平行して「九州自主練」のTwitterにて支援活動の募集を行っておりますので、宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。





幡ヶ谷再生大学復興再生部

東海自主練

2018年7月に発生した「平成30年7月豪雨」は、西日本を中心に甚大な爪痕を残しました。同年「岐阜自主練」として岐阜県関市上之保地区にて始動。
現在は「東海自主練」に名称を変更し、Twitterにて支援活動や防災活動の募集を行っておりますので、宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。
















幡ヶ谷再生大学復興再生部

真備自主練

2018年7月に発生した「平成30年7月豪雨」は、西日本を中心に甚大な爪痕を残しました。幡ヶ谷再生大学では災害発生直後より真備や芳賀に現地入りし、支援活動を行っております。
現在も本活動と平行して「真備自主練」のTwitterにて支援活動の募集を行っておりますので、宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。
















編集後記

2019年の大河ドラマ「いだてん」は故・金栗四三氏と故・古今亭志ん生氏の半生を描いて、始まっている。前者は日本人初のオリンピック選手であり、お正月の風物詩「箱根駅伝」の創始者のひとりとして知られている。

後者は破天荒な人生を送りながらも明治、大正、昭和の激動の時代を生き抜き、「落語」という文化を後世の噺家（はなしか）たちへ継承し、今日の落語界においても「不世出の落語家」として知られている。

両者に共通することは後世の担い手たちが平成から令和へ世が移ろいでも、人々に勇気を届け、ときにつらい気持ちを忘れさせる文化を現代にまで残したことだろう。その足跡が色褪せることはない。

忘れてはならないのは、両者の功績の陰には両者を支えた仲間たちが必ず存在する。そして、文化を途絶えさせることなく紡いだ功労者たちが後世に誕生し、脈々と現在に受け継がれていることではないだろうか。

幡ヶ谷再生大学の復興再生部が2011年3月11日に始動して、今年で8年目になる。

「幡ヶ谷再生大学」は“幡再（はたさい）”と略され、定着している。

また出展ブースではときおり“同窓会”のような雰囲気になる。これまで“幡再生”が全国各地を訪れ、繋がった友情は色褪せることはないように思う。

まったく異なる出身地の“幡再生”同士が、出展ブースで談笑する様子は感慨深い。「久しぶり」の挨拶にはじまり、互いに近況報告などをすると当時の思い出に華が咲き、自然と両者から笑顔がこぼれている。

2019年3月11日、筆者は福島県のJヴィレッジにて開催された追悼復興イベント「SONG OF THE EARTH FUKUSHIMA 311」の幡ヶ谷再生大学の出展ブースに立っていた。お客さんのなかには、久しぶりに顔を合わせた面々がいた。

活動を通じ、知り合った“幡再生”たちは勤めていた会社で責任ある立場になった者、転職した者、家族ができた者、それぞれの「8年間」があり、ともに汗を流し、笑いあった日々が蘇った。何より、数年ぶり会っても色褪せることのない繋がりが嬉しく感じた。

本冊子の作成が例年より遅れてしまい、掲載者の方には古い記憶を思い起こしていただいた。いきいきと話してもらえる事柄もあれば、不特定多数に読まれることを配慮し、掲載を見送った返答もあった。

九死に一生を得た経験をされた掲載者もいた。

災害により、消し去りたくても消せない爪痕を心に残しながら、そのことを他者に感じさせず、気丈に振る舞う掲載者の方の様子を思い出すとPCのキーボードを打つ手が止まるときは1度や2度ではなかった。

本冊子やこれまでの冊子のなかでも掲載者の幾人かは「災害はなかったほうが良かったが、被災して生まれた縁があった」と話し、現状に悲観せず、楽しく、たくましく生きている方が多いように見受けられる。

たとえ被災しても、人生を悲観せず、新しい章を書き加えて突き進んでいる人間の持つ頼もしさには独特の美しさを感じる。

どの地域の“幡再生”と話をしても、それはより実感する。被災者と寄り添いながら、「仲間が増えていく感覚」を嬉しく感じ、「沈んでいた時期に活動へ行ったが逆に癒やされた」という言葉も数多く見聞きした。

2019年7月に九州南部を大雨が襲うと、前号に掲載された鹿児島在住の野間さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.87）は自身のTwitterに次のように投稿した。

「東北ライブハウス大作戦、幡ヶ谷再生大学、この8年間鹿児島のみんなで学ばせてもらい、形にしたのがWALK INN FES!です。
【僕らの街は僕らで創る！】氾濫危険水位に達してる所も増えてきた、20時満潮。いつものように皆んなで情報共有して、助け合いこの夜を乗り切りるぞ！！！」と投稿。

街が落ち着くまで、自身が経営する音楽スタジオ「WALK INN STUDIO!」を無料開放している。

天災が毎年のように起こる日本は今後も、有事の際はきめ細やかな情報共有が求められる。必要な助け合いを学び、手を離さない活動を今後も幡ヶ谷再生大学は続けていくだろう。

災害に見舞われた土地で「再生」の文化を根付かせ、繋ぎ、継承していく姿を今後も期待したい。

2011年から8年。現在では、全国各地に幡ヶ谷再生大学・復興再生部「自主練」が立ち上がり、空虚な虚栄心などを持たず、粛々と活動を続けている。

彼らは口々に「困っている人の手助け」と話す。

過度な期待より冷静な希望を持って。

ご支援ご協力について

私達、幡ヶ谷再生大学復興再生部は音楽やスポーツを通じて繋がった仲間達、そして皆様のご協力のもと、長期的かつ継続的な復興支援を行なっていくことができます。現時点、当団体は専任のスタッフを雇用しておらずボランティアによる、少人数での運営となっております。そのなかであくまでも現地の連携を直接的にすること、個人、団体、自治体に関わらず、私達の力を必要とする場所へ確実な復興支援を目指していきます。随時、人手募集や物資の募集も行います。また皆さまよりご支援頂いた物資や支援金は当団体が責任を持って復興のために使わせて頂きます。

Text: 山口 努　**Edit:** 高橋 健　**Photo:** 石井麻木　三吉ツカサ（showcase）　平野大輔　**Design:** 上條 慶